仙台市文化財調査報告書第209集

笹　森　城　跡

発掘調査報告書

１９９６年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第209集

笹　森　城　跡

発掘調査報告書

１９９６年３月

仙台市教育委員会

笹森城跡全景（南東上空から）

笹森城跡調査区全景（南上空から）

序　文

日頃より、本市の文化財保護行政に対しまして、ご理解とご協力をいただき、感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世に至るまでの数多くの遺跡が存在し、古くより人々が生活を営み、文化を築き上げてきたことが知られています。宮城野区にも、大規模な中世の山城として国史跡の指定を受けている岩切城をはじめとして、古代から中世の重要な遺跡がいくつも見られます。この鶴ヶ谷地区を見ましても、奈良・平安時代に陸奥国府多賀城や陸奥国分寺・尼寺で使用した瓦や土器を焼いた台原小田原窯跡群が全国的にも知られております他、周辺地区には古墳時代以降、集落跡、横穴墓、城館跡などの多くの遺跡が点在し、古くから人々の生活の場として重要な位置を占めていたことを伺うことができます。

近年、市街地北部は住宅地化が著しく、なかでもこの地区は昭和40年代に総面積約178haという大規模な団地の造成工事が行われ、かつての地形や景観が変貌し、土地に根付いた歴史の足跡をたどることが困難な現状となっております。今般、市街地の交通渋滞を解消するため鶴ヶ谷地区に都市計画道路東仙台泉線の建設が計画され、これに伴い、路線予定地にかかりました笹森城跡の発掘調査を実施いたしました。

その結果、丘陵上に中世の建物跡や平場などを発見し、伊達政宗の家臣国分衆であった鶴ヶ谷氏が戦国時代に居城したとされる笹森城跡に関わる遺構であることを確認し、さらには古代の竪穴住居跡や縄文時代の遺物を発見し、この地区での連綿とした歴史の一端を知ることができました。

ここに報告いたします調査成果が、研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護に役立つものとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことに対しまして深く感謝申し上げます。

平成８年３月

仙台市教育委員会
教育長　坪　山　　繁

例　言

1．本書は、仙台市都市計画道路東仙台泉線の整備工事に伴う、平成７年度に実施した笹森城跡の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆・編集は、金森安孝、本多裕聡が担当した。

3．発掘調査および本書の作成にあたり、下記の方々に助言指導、協力をいただいた。記して感謝の意を表する。
入間田宣夫、菅野正道、白鳥良一、横田銀一、横田繁夫、吉井　宏、鶴ヶ谷北町内会、鶴ヶ谷町内会、関兵精麦株式会社、仙台市寺沢土地区画整理組合、宮城県図書館（順不同、敬称略）

4．本報告に関わる出土品や遺構実測図面、写真などの記録資料は、仙台市教育委員会が一括して保管している。

凡　例

1．本報告で使用した土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1976）に準拠している。

2．本文・図中で使用した方位の北は、すべて磁北で統一している。

3．図中の座標値は平面座標系Ⅹによっている。

4．標高値は海抜高（T.P）を示している。

5．掲載した地形図や航空写真は、国土地理院発行のものを一部複製し、使用したものである。

6．調査区の全景写真は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、縮尺1/200現況地形図及び1/100遺構平面図の測量図化を株式会社アイシー北関東営業所に業務委託した。

7．遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。
SA：柱列　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SI：竪穴住居跡　SK：土坑　P：ピット　SR：河川
SX：性格不明遺構　その他、焼土遺構、土塁、平場遺構、通路状遺構は、略号を用いずに使用した。

8．遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。
A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器　D：土師質土器　E：須恵器　F：瓦質土器
G：瓦　H：土製品　J：磁器　K：石器　L：石製品　M：金属製品
N：古銭

9．遺物観察表の中の法量で（　）内数値は、土器・磁器については図上復元値を、その他は残存値を示している。

10．出土した金属製品のうち、笄と鉄砲玉の成分分析と保存処理については、新日本製鉄株式会社釜石製鉄所釜石文化財保存処理センターに業務委託した。

11．出土した炭化材15点の樹種同定については、株式会社古環境研究所に業務委託し、分析結果を掲載した。

本　文　目　次

巻頭カラー写真
序　　文
例　　言
凡　　例

Ⅰ　調査経過

1．調査に至る経過……1
2．調査要項……1
3．遺跡の位置と環境……2
4．調査方法と経過……8
5．基本層序……11

Ⅱ　検出遺構と出土遺物

1．検出遺構……13
2．出土遺物……42

Ⅲ　自然化学分析

仙台市笹森城跡出土炭化材の樹種同定……49

Ⅳ　まとめ……54

Ⅰ　調査経過

1．調査に至る経過

仙台市建設局道路部街路課では、宮城野区鶴ヶ谷字本山・館下に所在する笹森城跡に関し、平成８年４月に着工予定の都市計画道路東仙台泉線道路改良工事に伴い、平成５年７月12日付け建道街第118号で発掘通知を仙台市教育委員会に提出した。

これを受けて、仙台市教育委員会文化財課では、道路幅22m、総延長約800mの工事対象区間12,120㎡について、平成６年９月20日、建設局街路課担当者と笹森城跡の現地踏査を実施し、現況で土塁や通路状遺構を確認し、平成７年１月から２月にかけて、調査対象地の樹木を伐採、場外搬出した後、平成７年度に約4,000㎡の発掘調査を実施することとなった。

2．調査要項

遺　跡　名：　笹森城跡（仙台市遺跡番号C－512　宮城県遺跡番号01120）

所　在　地：　仙台市宮城野区鶴ヶ谷字本山・館下

調査事由：　仙台市都市計画道路建設（仙台市建設局道路部街路課）

調査対象面積：　約12,120㎡

調査面積：　約 4,000㎡

調査主体：　仙台市教育委員会

調査担当：　仙台市教育委員会文化財課調査第一係

文化財課長　　小井川和夫

調査第一係　係長　田中　則和

主任　金森　安孝　　主事　工藤信一郎

教諭　五十嵐康洋　　文化財教諭　本多　裕聡

発掘調査期間：　平成７年４月18日～平成７年12月１日

遺物整理期間：　平成７年12月４日～平成８年３月22日

調査・整理参加者：相沢みえ子、相沢美佐子、相沢　守、安藤　繁、石川直路、岩間郁雄、蛯名博之、大島武夫
大槻京子、大友広美、奥山妙子、長田源七、小野洋子、小野寺俊史、小山田博子、神坂勝太郎
川嶋孝子、川嶋富美子、菅家典子、菅間喜美子、木村明美、九島一文、熊谷きぬ子、熊谷キミ子
桑島精一、今野多喜子、齋藤喜恵子、佐藤剛、佐藤紀子、佐藤久栄、佐藤よし子、柴田徳郎
庄子大介、菅原典子、関口国生、高橋弘子、高橋宏明、田中世津子、千葉律子、七宮　清
新沼よしゑ、古川千鶴子、古舘宏美、細谷あや子、三浦三枝子、武藤多喜子、森　剛男
山口　巌、横田恵美子、横田耕造、横田由美子、我妻亀三、渡辺純子

3．遺跡の位置と環境

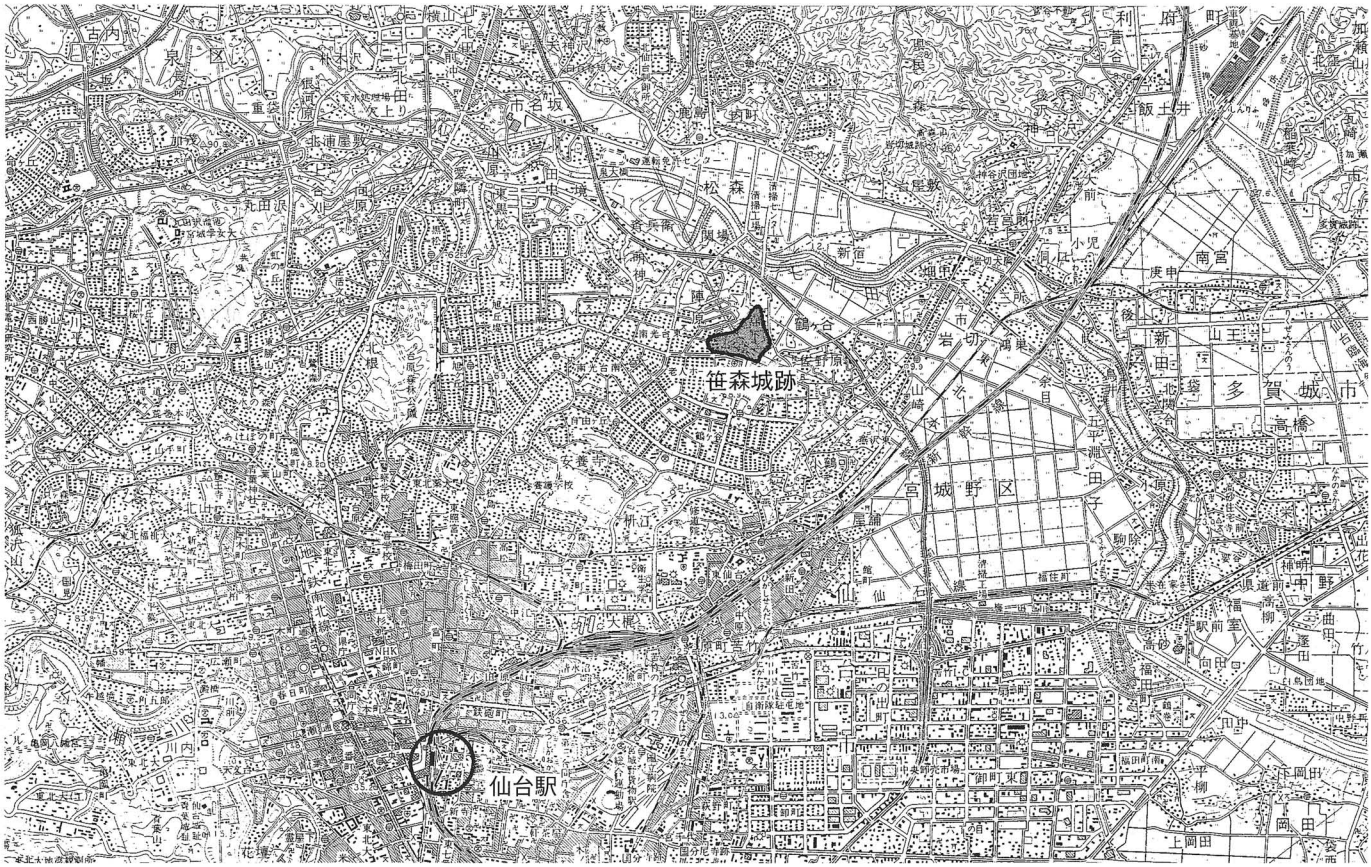
【地理的環境】

笹森城跡は、仙台市の北東部、仙台駅の北東約６kmの宮城野区鶴ヶ谷字本山に所在する城館跡である。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山系から続く七北田丘陵が東に延び、泉ヶ岳に源を発する七北田川が東流しながら丘陵地形を開析し、丘陵端から太平洋にかけて広大な沖積平野を形成している。河川流域には、河岸段丘が発達し、両岸には自然堤防を形づくっている。

笹森城跡は、七北田川右岸の丘陵上部で、尾根の北東端の頂部に位置し、七北田川をはさんで岩切城や松森城と対峙する位置にある。遺跡の東には、七北田川の小分流である新川上流の鶴ヶ谷大堤があり、北西には中堤や北堤を連ねる谷があって、これらの谷に挟まれた標高60～64m、北側崖下部、宮城野区鶴ヶ谷字館下との比高差が約40mの尾根上に立地する。

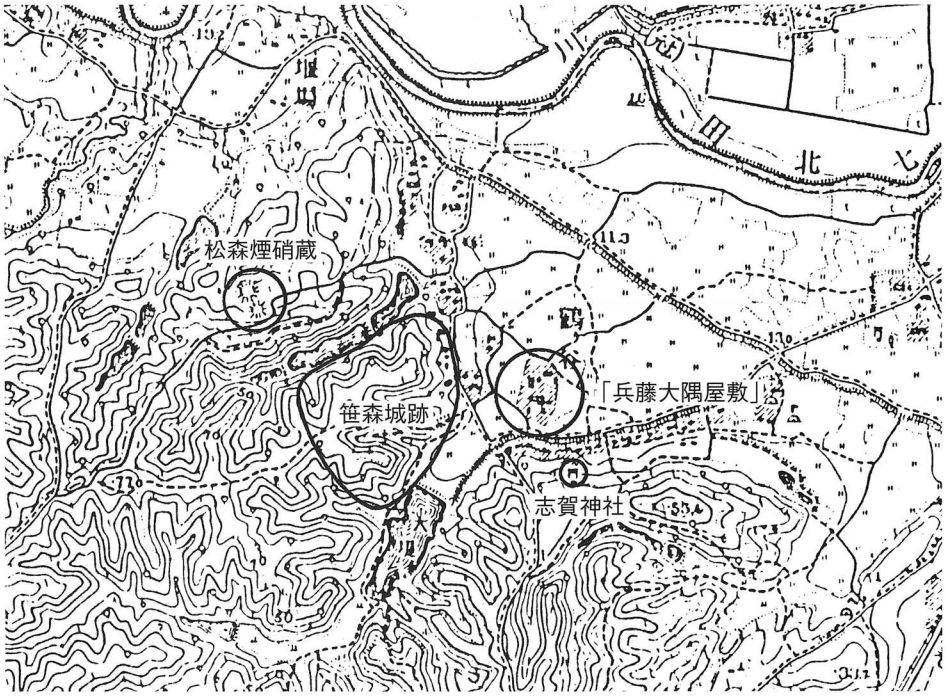
笹森城跡は、昭和30年代以降、鶴ヶ谷地区の開発で周辺地の造成や土採りが著しく行われた。地元住民からの聞取りによれば、かつては明瞭な遺構が尾根の突端上部に残存し、東西50m、南北80mほどの平場（曲輪）や三段の「段」（帯曲輪）など城の主要な部分が現在は壊滅状態にさらされ、これまで発掘調査が行われたことのない城館跡である。



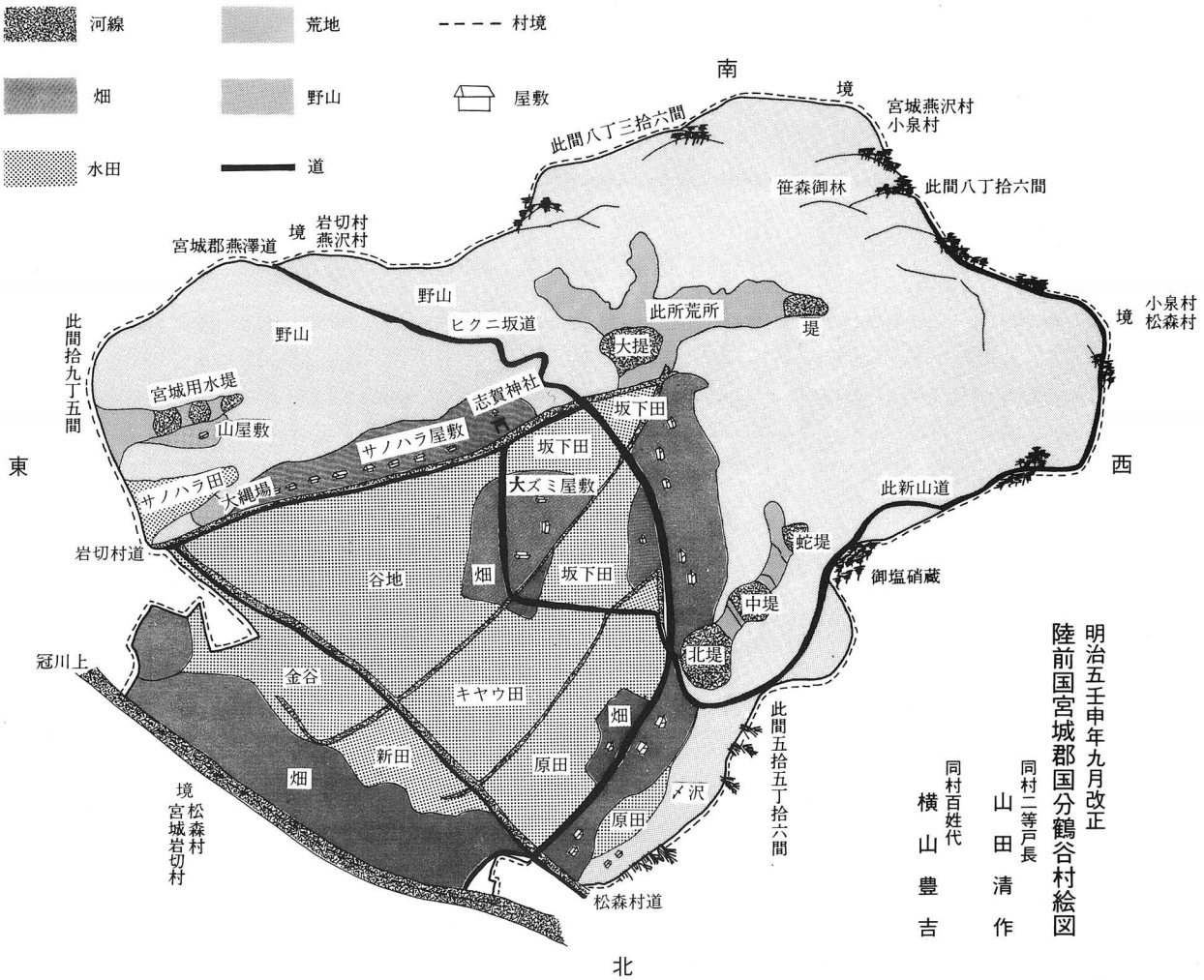
第１図　遺跡位置図（1/75,000）

No.	遺跡名	立地	時代	No	遺跡名	立地	時代
1	笹森城跡	城館	中世	16	糠塚古墳	高塚古墳	古墳
2	高森城跡	城館	中世	17	五郎兵衛古墳	高塚古墳	古墳
3	松森城跡	城館	中世	18	善応寺横穴古墳群・壷古の碑	横穴墓群・石碑	古墳末・弘安5年建碑
4	小鶴城跡	城館	中世	19	台屋敷横穴墓群	横穴墓群	古墳末
5	稲荷城跡	城館	中世	20	入生沢横穴墓群	横穴墓群	古墳末
6	鴻ノ巣遺跡	集落跡	古代・中世	21	北畑塚群	墳墓	古代
7	東光寺遺跡・横穴墓群	城館・寺院跡・横穴墓群	古墳末・中世・近世	22	岩切畑中遺跡	集落跡	古代
8	今市遺跡	集落跡	平安・中世	23	燕沢遺跡	集落跡・寺院跡（？）	古代
9	洞ノ口遺跡	城館	中世	24	大蓮寺窯跡	窯跡	古代
10	新田遺跡（多賀城市）	城館	中世	25	大正囲遺跡	散布地	平安
11	住吉遺跡	集落跡	旧石器・縄文・中世	26	新宿囲遺跡	散布地	平安
12	長岫遺跡	集落跡	旧石器・縄文・弥生・古代	27	吉沢遺跡	散布地	平安
13	若宮前遺跡	城館・散布地	縄文・古墳・平安～近世	28	入生沢遺跡	散布地	平安
14	菖蒲沢遺跡	散布地	縄文・古代	29	松森焔硝蔵跡	火薬庫跡	近世
15	千人塚古墳	高塚古墳	古墳	30	比丘尼坂	辻標	

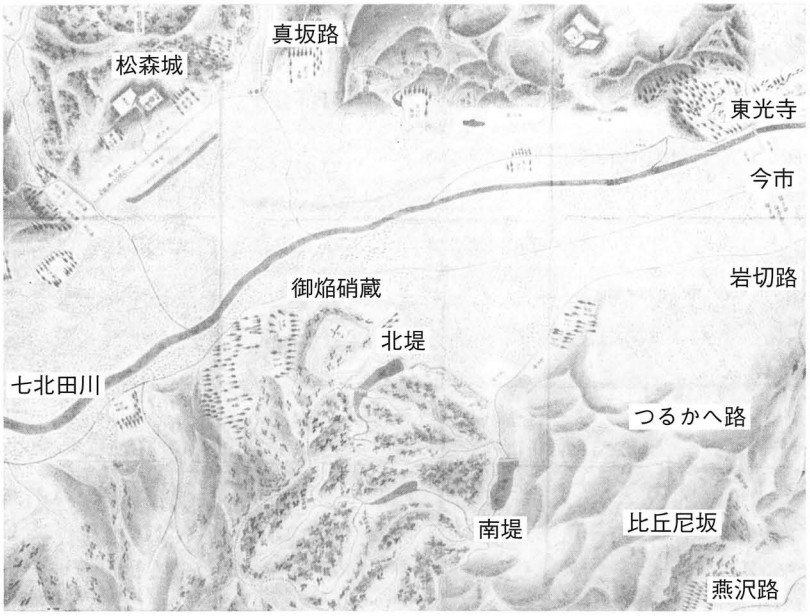
第2図　周辺の遺跡分布図（1/25,000）



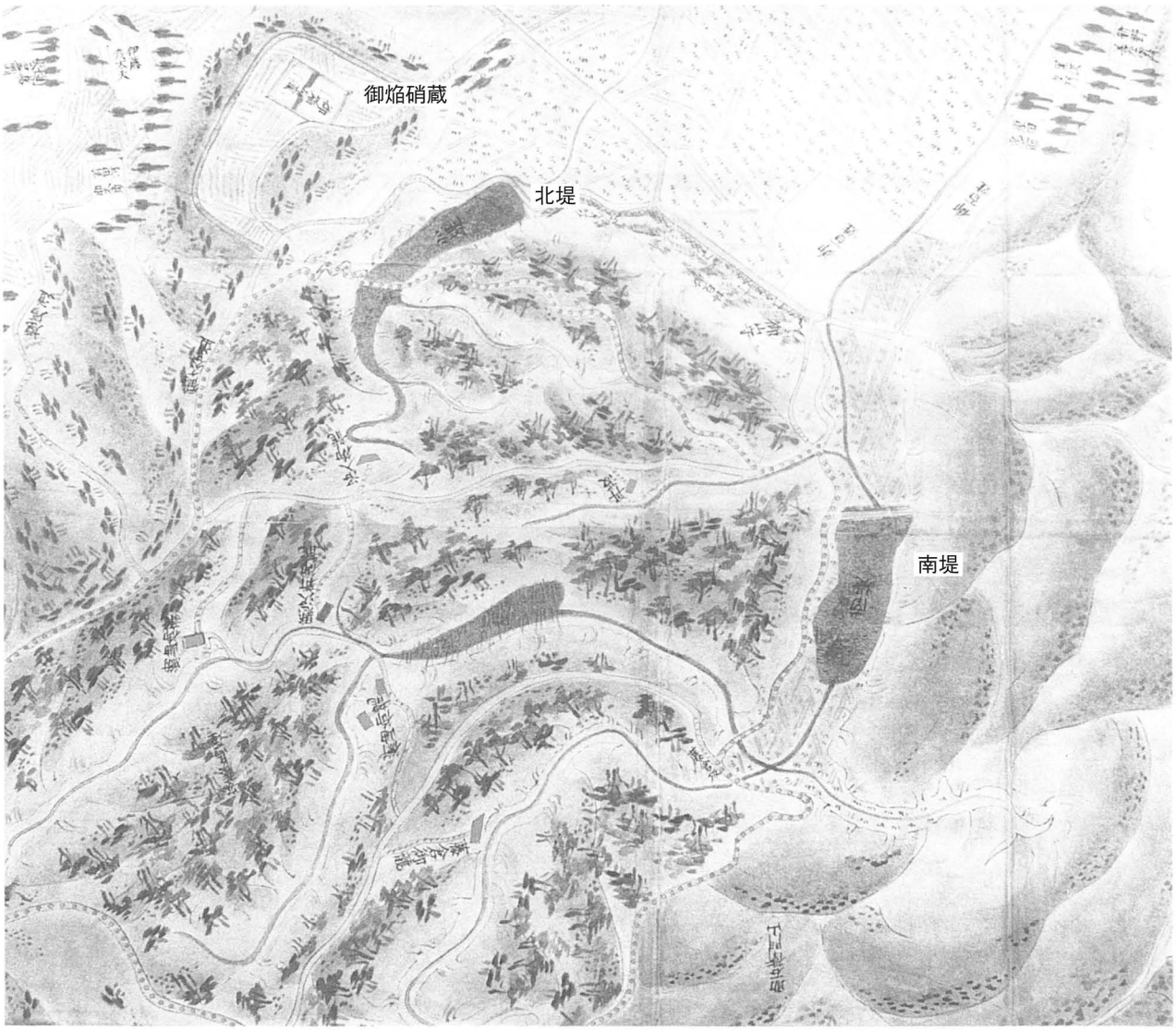
第３図　鶴ヶ谷村周辺地形図
（『仙臺東北部』大日本陸地測量部　昭和６年を調整）



第４図　鶴谷村絵図（明治５年をトレース・調整）



第５図　「野狩初図」（部分　宮城県図書館蔵）



第６図　野狩初図（笹森城跡部分を拡大）

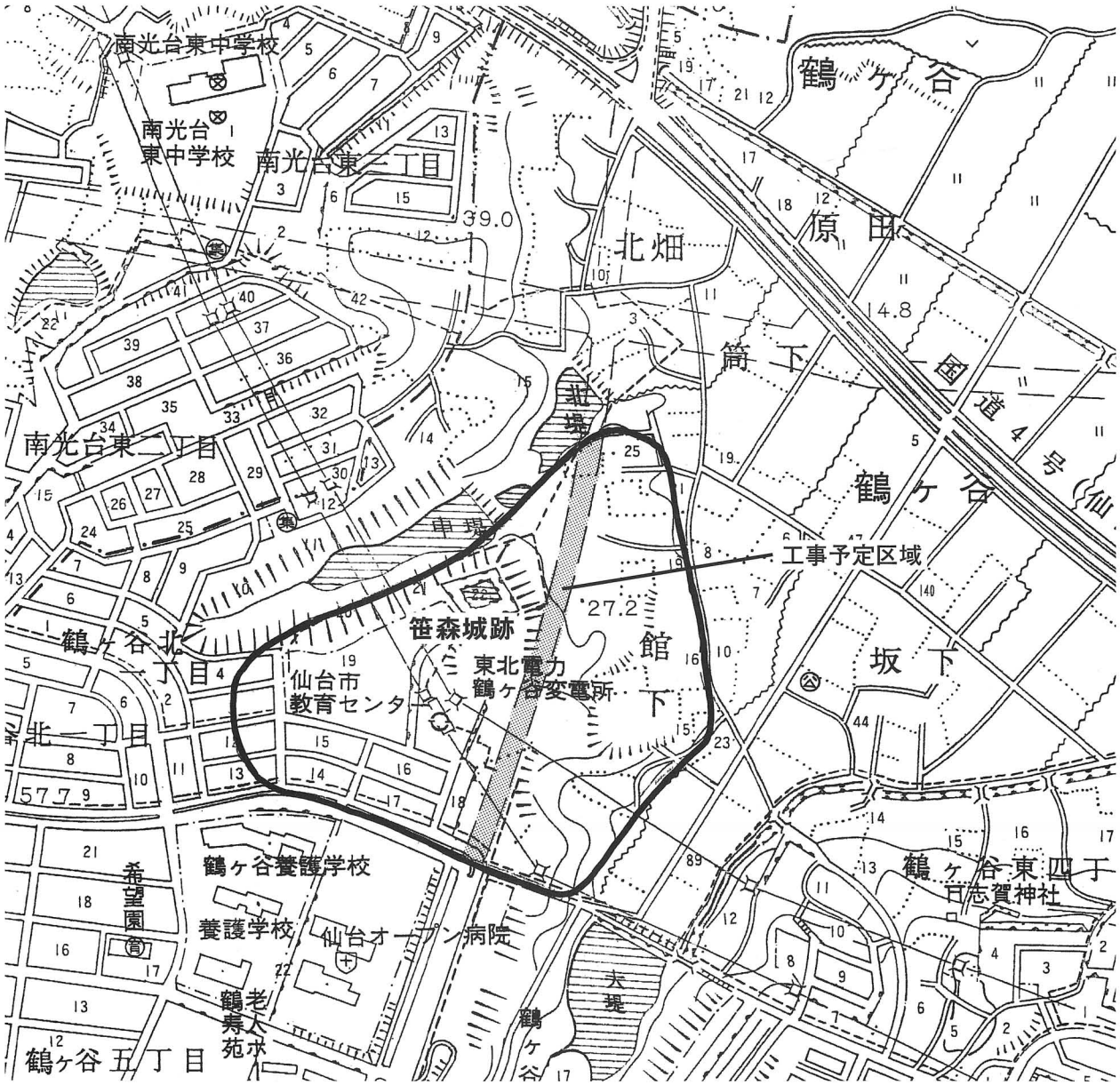
【歴史的環境】

笹森城跡周辺の遺跡は、七北田川両岸の丘陵面と自然堤防上に立地している。現在、弥生時代の遺跡は確認されておらず、古墳時代以降の遺跡が数多く点在する。

古墳時代の高塚古墳として岩切字山崎に千人塚古墳があり、円墳と推定されている。また、今市の岩切小学校隣接地や多賀城市新田遺跡からは円筒埴輪が出土しており、未知の古墳が埋没または削平されている可能性がある。

古墳時代の集落としては、七北田川右岸の自然堤防上に立地する鴻ノ巣遺跡があり、古墳時代前期から中期にかけての遺構や遺物を確認している。台原・小田原丘陵には、青葉区堤町から連続して近世まで引き続く窯跡が点在するが、そのなかでも丘陵東部の大蓮寺窯跡は、初期須恵器の生産窯として全国的にも名高い。

古墳時代終末から奈良時代にかけては、七北田川両岸の丘陵の麓に善応寺・東光寺・入生沢・台屋敷・菅谷などの横穴墓群が形成されている。奈良時代には、本遺跡の東５kmに、陸奥国府多賀城が造営され、その南西７kmの陸奥国分寺・同尼寺などとともに、この地域は東北の中心地として栄え、これらの施設に供給される瓦・土器の生



第７図　都市計画道東仙台泉線路線図

産が台原・小田原丘陵上の多くの窯跡で開始され、一大窯業地が形成されている。

平安時代に入ると、漆紙文書や瓦を出土し、官衙風の建物跡からなる南東部の丘陵上の燕沢遺跡や、鴻ノ巣遺跡、岩切畑中遺跡など、多くの遺跡で中世に至るまでの遺構や遺物を確認し、集落としての発達を窺うことができる。

源頼朝の平泉攻略の後、陸奥国留守職に任命された伊沢氏の居住の地として栄えた岩切・利府周辺には、岩切城跡、洞ノ口遺跡、東光寺城跡、松森城跡、化粧坂城跡、竹林城跡、利府城跡など、中世の城館跡が数多く分布している。

また、東光寺境内には、嘉暦２年（1327）銘の大型板碑をはじめとする県内でも有数の板碑群があり、薬師如来や阿弥陀如来の石窟仏群を擁し、宗教的な中心地でもあったことが確認されている。

留守家文書には、鎌倉時代後半、冠屋市場、河原宿五日市場などの存在に関わる記載がみられ、七北田川周辺の今市付近では活発な商業活動が営まれていたようで、古代以降、陸奥国府の官人たちの往来によってもたらされた高い文化を背景に、地方にあって政治・文化の中心地であったことが知られる。

岩切地区は、江戸時代は宮城郡国分山根通鶴ヶ谷村に属しており、今市の集落は江戸時代に開かれた街道に沿った町並みが形成され、足軽町や宿場町として交通の要衝として栄えていたが、昭和16年（1941）に仙台市に合併され、今日に至っている。

笹森城に関わる文献として、江戸時代、延宝年間（1673～1681）に記された『仙台領古城書上』には、領内21郡の536ヶ城の記事がある。その中に「鶴谷村　山（城）一、笹森城　東西四五間、南北二十間、･･･」とあり、笹森城は岩切村鶴谷にあって、東西45間、南北20間ほどの規模で、城主として鶴谷治部（次郎）が天正年間まで居住したとされる。また、享保13年（1728）制作の『仙台領古城書立之覚』にもこの記事と同様の記事がある。

鶴谷氏は、「留守分限帳」に記された「里之人数」の中に「鶴かやふせん」（鶴谷豊前）とあり、「余目氏旧記」には留守氏の被官である塩竈社の「宮侍」として記されるが、高野山参詣に関する天文16年（1547）の「国分宗政等宿坊証文」（秋田国分文書）には、国分能登守宗政とともに鶴谷大蔵尉宗重や松森氏等の名が見え、留守氏と国分氏の両勢力の間で、「両属・多属」の小領主として郷六氏や南目氏、粟野氏などとともに戦国時代を生抜いたとされている。

また、「国分氏系図」によれば、国分氏第14世宗政の妹が家臣鶴谷盛勝の室となっていることから、鶴谷氏は、16世紀後半には、宮城郡西南部を領していた国分氏と姻戚関係をもつ有力な家臣として、「国分三三箇村書上」にも村名がある鶴谷の地に居住して館を築いていたものと推測される。この地は、留守氏との領地の境界付近に位置しており、天正２年（1574）の留守政景宛行状写に、鶴谷の地で「合戦」があったことが窺えることから、笹森城は国分氏側に与する村規模の領主であった鶴谷氏の城館として、対留守氏の最前線に設置されたものと考えられる。

その後、慶長５年（1600）の「最上陣覚書」には、「国分衆」の一員として鶴谷氏の名が見え、延宝５年（1677）に記された「伊達藩家臣録」には、鶴谷治部が伊達政宗の家臣に召抱えられ、鶴谷氏は二代藩主忠宗の代になって宮城郡高城竹谷村（松島町高城）の野谷地開発等で加増され、正徳６年（1716）まで続いた家系とされている。また、「佐藤純粋覚書」には、国分鎮守である白山宮の祭礼行事は、かつての国分衆に名を連ねた鶴谷氏等が江戸期にも執り行っていたことが記されている。

仙台藩で正月に行われていた「軍事演習」の「陣立」を示す「野初絵図」（宮城県図書館蔵）には、笹森城付近に地名の記載や城の平場などの遺構を示す表記は認められないが、岩切地区を中心とする七北田川周辺の山野で、軍事演習が展開したことが知られている。この絵図には、本遺跡の西側に元禄年間に造営された松森焔硝蔵が記され、明治初年まで使用されていたが、土塁に囲まれた蔵跡や爆発坑が確認され、現在は市指定史跡として指定されている。

さらに、戦国大名留守氏の家臣であった兵藤大隈信俊は、奥羽仕置後に浪人となり、現在の今市（宮城野区岩切字今市）の地に移り住んで新田開発や道路建設に取り組み、元和７年（1621）より数年の間に岩切村の開発を指揮

し、その功によって仙台藩主伊達政宗により、寛永２年（1625）、今市足軽の組頭に取立てられた。さらに、「安永風土記」にも記される薄ヶ沢堰は、この頃に松森村薄ヶ沢で七北田川から取水し、鶴ヶ谷を東流した後、今市、小鶴へと流れる用水で、今市足軽によって築造されたものとされ、新田開発に大いに貢献している。

兵藤氏は在郷で今市足軽を指揮し、かつ伝馬業務や六斎市の開催など、町検断役をも命じられ、在郷屋敷を構えていたが、寛永年間に居館を鶴谷から今市に移したとされており、現在でも笹森城の麓、鶴ヶ谷字館下に「大隈屋敷」の推定地を屋敷林などで確認することができる。この兵藤氏の一族は、14世紀中頃、文和年間に鶴ヶ谷の地に居住したとする説もあるが、その居館の位置や笹森城との関係については不明である。

これらのことから、笹森城の築城時期は不明であるが、文献史料との関係から、城の廃絶時期は16世紀末、天正年間頃と考えられ、近世期にはこの地は伊達氏の配下となる兵藤氏に治められていたが、城は荒廃し、平場などの遺構も機能していなかったものとみられる。

４．調査方法と経過

【調査区の設定】

調査地は、宮城野区鶴ヶ谷５丁目に所在する財団法人仙台市医療センター仙台オープン病院の北側で、鶴ヶ谷北１丁目に所在する仙台市教育センター及び東北電力鶴ヶ谷変電所の東側に位置し、現況で標高48m程の平坦な造成地の北に、西から東に尾根が2本延び、その間に新川の支流の沢が東側から入り込み、急峻な谷地形を呈している。

今回の道路工事では、標高59～64mの南側の尾根部分は道路の両側から階段状に65m幅で逆台形に削平され、標高55～63mの北側の尾根部分は西側が15mほど階段状に削平される計画であるが、その東突端部はすでに土採りで削られている。２本の尾根に挟まれた標高32～40mの谷部は工事で盛土されるが、対象地全域の遺構について記録保存を前提とした発掘調査を実施し、調査前と遺構検出後にラジコンヘリコプターによる航空写真測量を行うこととした。

調査区は南からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区と命名し、調査対象地南側の平坦な造成地のⅠ区、谷部のⅢ区、尾根部のⅣ区・Ⅱ区の順に発掘調査を開始した。さらに、遺構の連続性を検討するため、Ⅳ区の西側にⅤ区、Ⅱ区の東側にⅥ区を設定し、現況で地表顕在の遺構確認を行った。

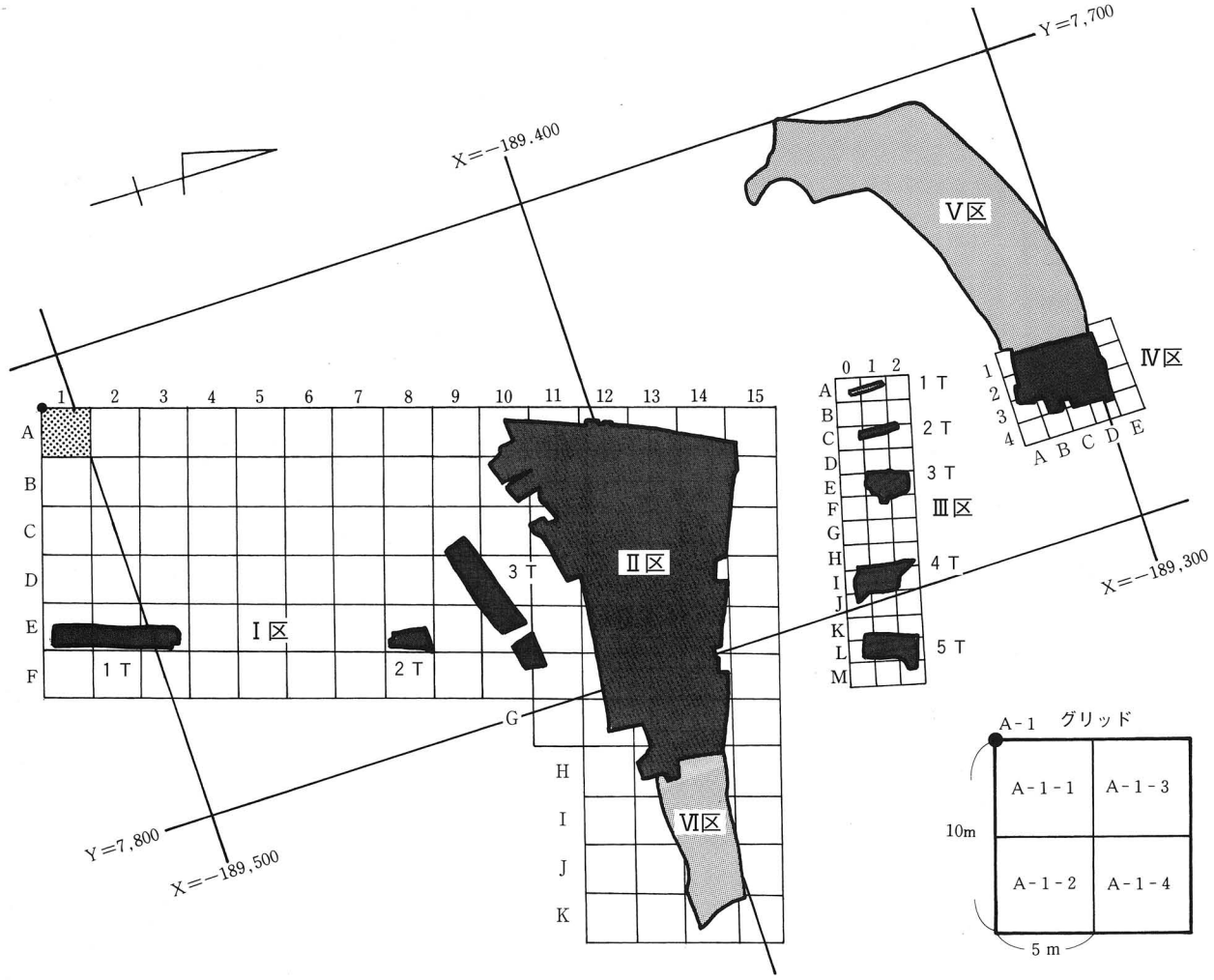
５月８日から調査区南西角に測量基点を設け、Ⅰ区とⅡ区に10mメッシュの基準線を設定し、南から北方向に１～１５、西から東方向にA～Kと区画を区切って、調査区ごとに遣り方測量を行った。座標系の基準線は、磁北を基準に東に18°偏し（N－18°－E）、遺構実測の便宜上５mのグリッドごとに平面図を作成した（第８図）。

さらに、調査区外に延びる地表顕在の遺構については、1/100平板略測図を作成し、写真で記録化した。

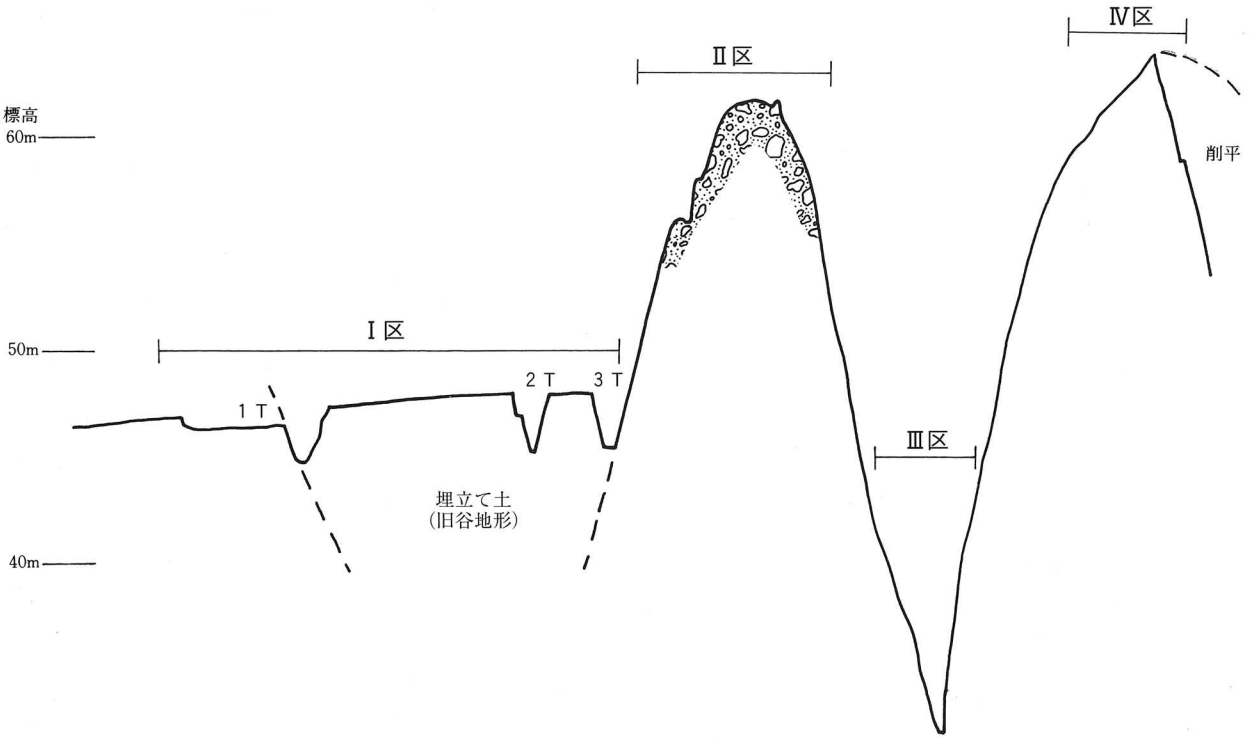
調査区全体図については、４月中旬にラジコンヘリによる現況写真撮影を行い、10月12･13日と11月28日には発掘調査後の航空写真測量を行い、25cm間隔の等高線を記した縮尺1/200の現況地形測量図及び1/100遺構平面図を作成した（付図）。

【調査経過】

まず、４月下旬に調査対象地南側で、丘陵裾部までの平坦地であるⅠ区に３箇所４本の試掘トレンチ（以下、Tと略す）を設定し、重機を用いて遺構確認調査を実施した。都市計画道路の計画中軸線の東側に、幅４m、長さ33m、面積約130㎡の南北方向の１トレンチ（以下、１Tと略す）を設定した。南端では現地表から30cmの深さで、重機による掘削痕のある岩盤面を検出し、この岩盤面は北側へ徐々に深くなり、谷部の肩から急激に落ち込んでいくことを確認した。旧地形の尾根にあたる部分の試掘を行ったが、岩盤上の旧表土は削平されてなく、東西方向の谷の落ち込みを確認した。この周辺の覆土は鶴ヶ谷団地造成時の埋立て土とみられる。Ⅰ区北寄りの地点に幅４m、長さ９m、面積約36㎡の東西方向の２Tを設定し、現地表から３mの深さまで重機で掘り下げたが、埋め立てられ



第８図　調査区と座標系



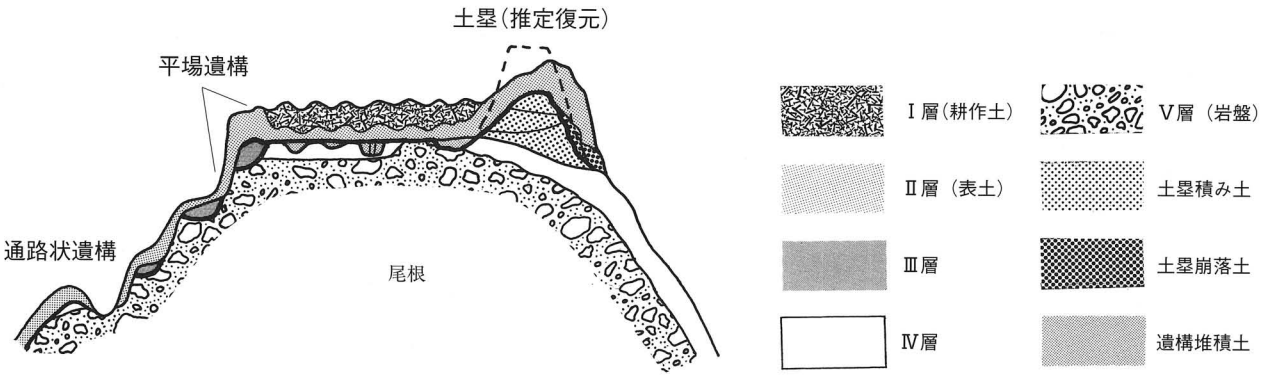
第９図　調査区縦断模式図（道路中軸線）

た谷地形の上部にあたり、１Tと同様に造成時の埋立て土であることを確認した。さらにⅠ区北端、尾根の裾部に東西方向に20×５m、８×５mの２本、計約140㎡の３Tを設定し、尾根の斜面に沿って10cm前後の旧表土層を確認したが、斜面は45度以上の急勾配で南側に落ち込み、約2.5mの深さまで掘り下げたが遺構を確認できなかった。以上の調査結果から、Ⅰ区は団地造成により、旧地形が削平または土砂で厚く埋め立てられていることを確認し、本調査の対象から除外した。

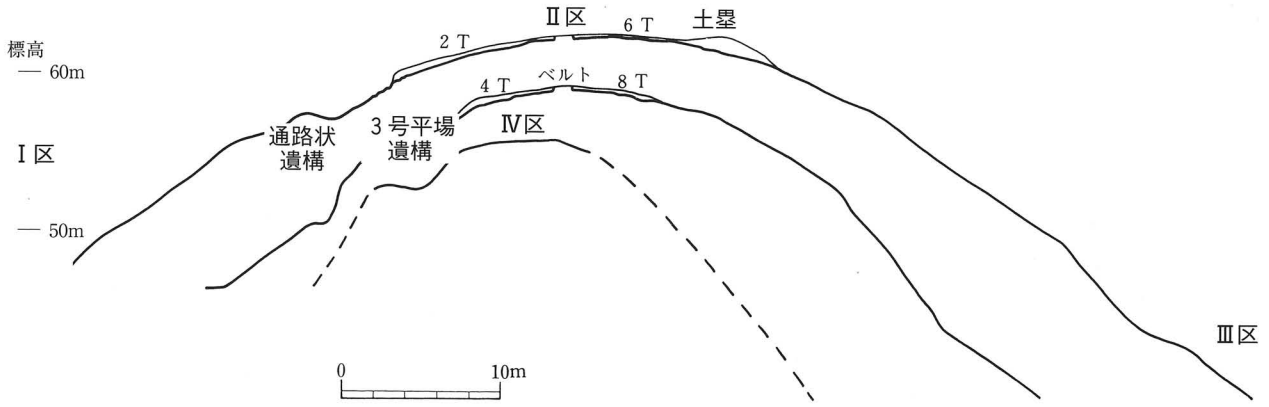
Ⅰ区の北側、調査対象地の中央で東西方向に延びる尾根をⅡ区とし、尾根上の調査区約2,000㎡を格子状に１～８Tに区画し、５月10日から調査区西辺の試掘トレンチで堆積状況を確認した上で、調査区全体の表土排除を行い、調査を開始した。５月22日、２・３Tの南側斜面と６・７Tの北側斜面を土捨て場に設定し、６月１日、尾根上の調査区の乾燥を防ぐための散水ポンプを準備した。尾根上の平坦部分の遺構を検出して精査の後、８月から尾根の南側の平場遺構･通路状遺構の精査に着手した。その結果、これらの遺構が尾根の南側斜面に延びていることから、新たに９・10Tを設定して精査を行った。また工事区域外ではあるが、Ⅱ区の南東部斜面、及び、東側の尾根上にも段状に平場遺構、通路状遺構が延びていたため、尾根の東端部を新たにⅥ区として、９月下旬から遺構現況調査を行った。

Ⅱ区では、掘立柱建物跡や柱列、溝跡、土塁、平場遺構、通路状遺構、竪穴住居跡、土坑、焼土遺構、ピットなどの遺構を検出し、縄文土器、土師器、土師質土器、瓦器、磁器、砥石、笄などを出土した。12月１日に調査を終了した。

Ⅱ区の尾根北側に位置する谷部をⅢ区とし、５月８日、調査区西側から１～５T、約300㎡を設定し、精査を開始した。重機を使用して沢底を検出し、３・４TではV字状の沢底の肩部に幅0.5～1.5m程の平坦部を確認し、通路



第10図　基本層序模式図（Ⅱ区）



第11図　Ⅱ・Ⅵ区尾根断面見通図

であった可能性がある。ロクロ土師器、磁器、寛永通宝、鉄砲玉、砥石を出土した。５月24日に調査を終了した。

北側の尾根のⅣ区では、５月15日から試掘を開始、５月24日から樹根の掘起し作業に着手し、１～４T・約190㎡を設定し、精査を開始した。斜面上部、尾根縁辺部にあたる１・２Tの北側と東側で区画をなす塁状の高まりと、３・４Tで斜面を斜行する通路状遺構を確認した。Ⅲ層上面では、ピットや倒木痕などを検出し、７月26日からはⅣ層上面の調査に移って土坑やピットを検出し、土師質土器、土師器、縄文土器を出土した。８月23日に調査を終了した。

Ⅳ区の通路状遺構は西側に延びており、５月31日、新たにⅤ区を設定し、草刈を行った上で、現況の地形測量調査を６月７日まで行った。その結果、現況で通路状遺構の他、平場や塁状の区画、堀切や土塁、通路状を呈する人工的な地形を確認したが、工事による遺構の削平を受けないため、表面観察にとどめている。

普及活動として、８月24日に鶴ヶ谷中学校１～３学年の生徒14名、社会科教師２名による発掘体験学習を実施した。事前に発掘調査や遺跡の概要を説明した後、６グループに分けてⅡ区で実施した。学習した成果については、参加した生徒たちにより中学校の文化祭で展示発表がなされた。11月８日には、鶴ヶ谷東小学校２学年の児童107名による遺跡見学会を実施した。事前に簡単な概要説明をし、発掘調査の様子や遺跡を見学した。児童からの多数の質問が出され、担当職員がわかりやすく説明した。事後の感想文には、発掘調査という仕事や昔の生活、地域の歴史について関心が抱かれたことなどが記され、生活科の学習として成果があったものとみられる。発掘調査成果については、９月27日に報道発表を行った上で、９月30日に現地説明会を実施し、約350名の市民の参加を得た。

調査終了後、12月４日に出土遺物や実測図面を泉整理室へ移動し、12月23日、現場事務所の解体を終了した。

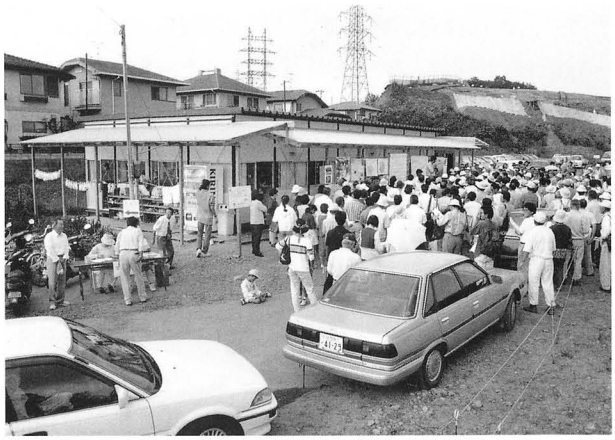
５．基本層序

遺構の検出は、調査地全体に繁茂していた雑木林を伐採・撤去し、その後、地層の堆積状況を確認する試掘調査を行った。堆積層が厚い谷地形であるⅢ区については、重機を用いて表土層を除去して精査した。その結果、流水の影響を受け、土砂の混入が著しい谷部のⅢ区は、各トレンチで複雑な地層の堆積状況を呈した。

尾根上のⅡ区では、畑として利用された畝状の耕作痕跡が平坦面で確認され、その層の厚さも薄かったため、人力で表土を除去し遺構確認を行った。基本層序は模式図（第10図）に示すように、表土（Ⅰ層）、耕作土（Ⅱ層）、旧表土層（Ⅲ層）、漸移層（Ⅳ層）、地山となる凝灰岩質砂岩系の岩盤（Ⅴ層）の堆積状況であった。

谷をはさんだ北側の尾根上のⅣ区については、傾斜地で周辺が杉の植林地であり、また、重機が登ることができない急な斜面であったため、人力で表土を除去し、遺構確認を行った。踏み跡や植林地を区画する塁状の盛り土遺構を確認し、表土（Ⅰ層）、旧表土（Ⅱ層）、漸移層（Ⅲ層）、地山（Ⅳ層）となる堆積状況であった。

発掘体験学習（鶴ヶ谷中学校）



現地説明会

Ⅱ　検出遺構と出土遺物

1．検出遺構

Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区の発掘調査で検出した遺構には、柱列８列、掘立柱建物跡２棟、溝跡10条、竪穴住居跡１軒、土坑11基、焼土遺構２基、土塁１基、平場遺構５ヶ所、通路状遺構２ヶ所、性格不明遺構９基などがある。

Ⅴ区とⅥ区の地表顕在の遺構調査では、中世城郭に特有の形状である、堀切や虎口、土塁、通路状遺構などの可能性のある地形を確認している。

1）Ⅱ区

Ⅱ区では、調査区を土層観察用のベルトで１～８Tに区画し、耕作土（Ⅰ層）と表土（Ⅱ層）、旧表土（Ⅲ層）を除去し、地山岩盤（Ⅴ層）もしくは漸移層（Ⅳ層）上面で遺構確認を行なった。検出した遺構のうち、主な遺構について記述する。

【柱列】

SA－01柱列　１T南西端の平坦な地山上面で検出した。柱穴４個からなる東西柱列（方向：E－20°－N）で、柱穴は直径39～54cm、深さ26～30cmで、堆積土は黒褐色シルトで、柱間寸法は242～281cm、総長7.8mを測る。SB－01掘立柱建物跡の南辺柱列と近接し、南西角柱穴に切られる。

SA－02柱列　６Tで検出。南辺寄りの東に緩やかに傾斜する地山上面で検出した。柱穴５基からなる東西柱列（方向：E－１°－S）で、柱穴は小円形を呈し、直径10～36cm、深さ19～28cmで、検出した地山面からの深さがほぼ一定で、地山面の傾斜は構築時の状況を反映している。堆積土は黒褐色シルトで、柱間寸法は210～289cm、総長9.6mを測る。この柱列の東方向には、SB－02掘立柱建物跡の桁列とSA－08柱列がほぼ同じ方向に並び、同一基準で構成された遺構群とみられる。

SA－03柱列　２T、東に緩やかに傾斜する地山上面で検出した。柱穴４基からなる東西柱列（方向：E－５°－N）で、柱穴は直径９～12cmと小型であるが１基のみ27cmであり、深さ８～12cmの小ピットで杭列とみられ、堆積土は黒褐色シルトで、柱間寸法は115～147cm、総長4.0mを測る。２TのSA－04、SA－07とほぼ一直線状に並び、同一遺構の可能性がある。

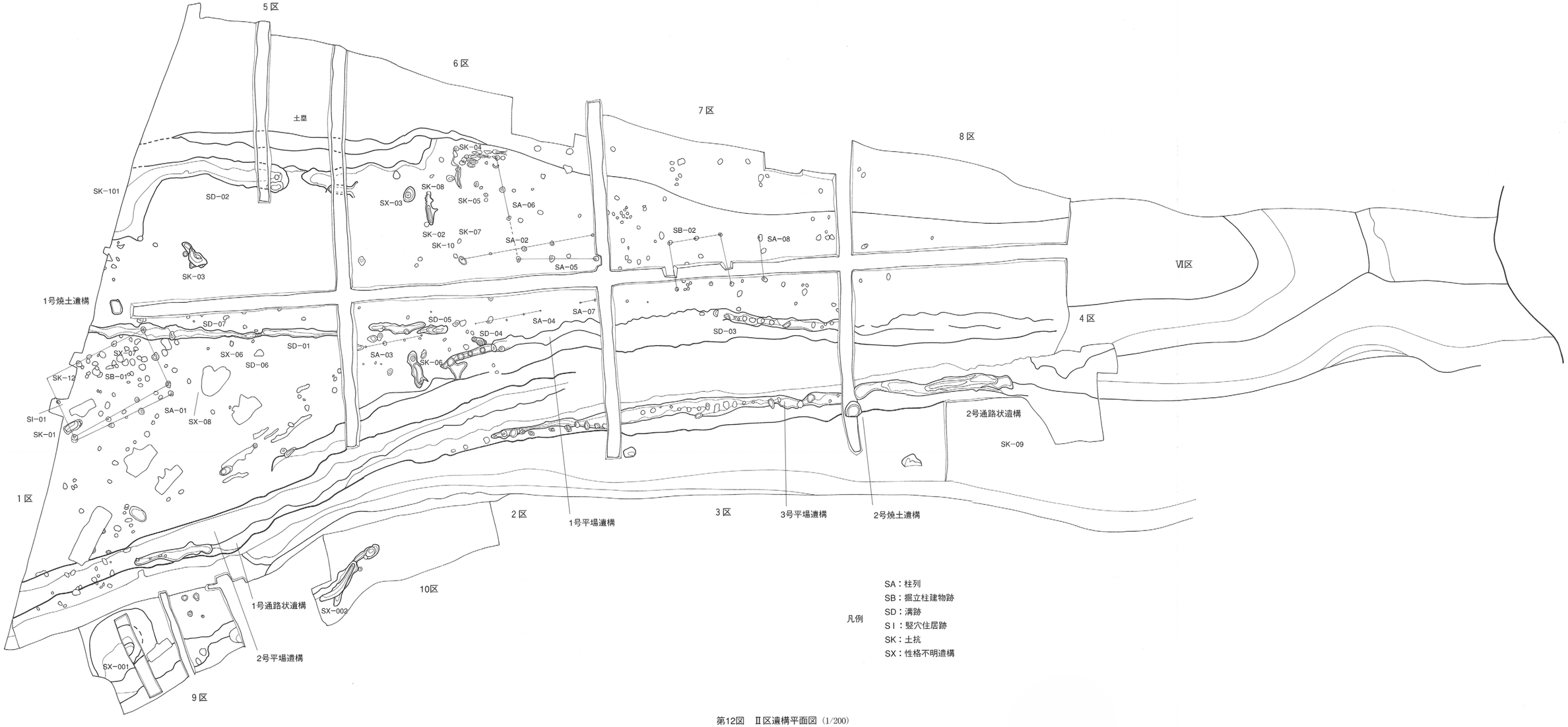
SA－04柱列　２T、東に緩やかに傾斜する地山上面で検出した。柱穴５基からなる東西柱列（方向：E－４°－N）で、柱穴は直径８～16cmと小型であり、深さ８～10cmの小ピットで杭列とみられ、堆積土は黒褐色シルトで、柱間寸法は98～126cm、総長4.7mを測る。２TのSA－03、SA－07とほぼ一直線状に並び、同一遺構の可能性がある。

SA－05柱列　6T、東に緩やかに傾斜する地山上面で検出した。柱穴３基からなる東西柱列（方向：E－４°－S）で、柱穴は楕円形を呈し、直径33～40cm、深さ19～25cmで、検出した地山面からの深さがほぼ一定で、地山面の傾斜は構築時の状況を反映している。堆積土は黒褐色シルトで、柱間寸法は238～312cm、総長5.5mを測る。

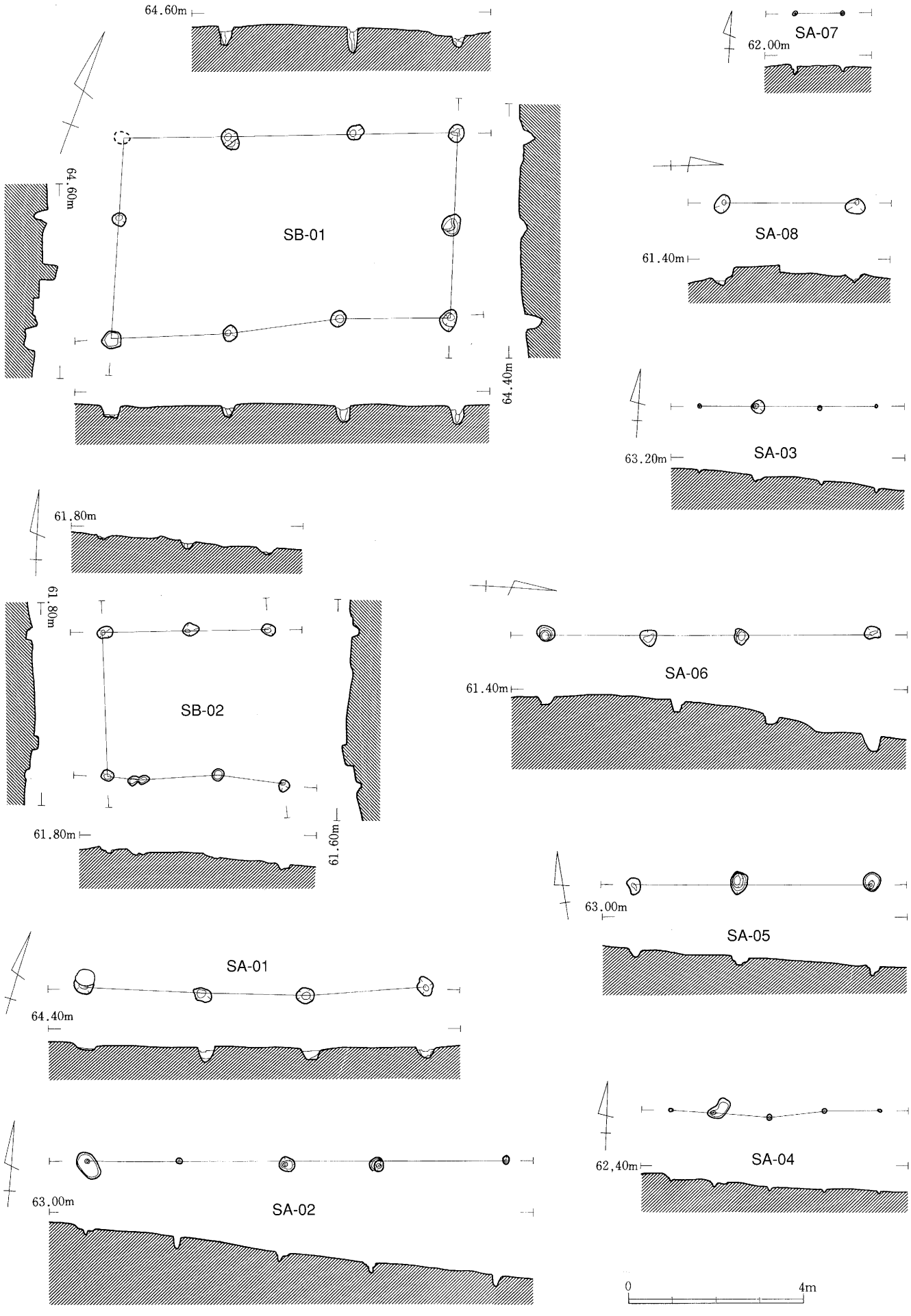
A－06柱列　６T、北側へ約９度の勾配で傾斜する地山上面で検出した。柱穴３基からなる南北柱列（方向：N－６°－W）で、柱穴は楕円形を呈し、直径34～43cm、深さ25～38cmで、堆積土は黒褐色シルトで、柱間寸法は217～232cm、総長4.6mを測る。この南延長方向にはSA－05柱列の西端が交差または連結する可能性がある。北端の柱穴がSK－04土坑を切っている。

SA－07柱列　２Tで検出した。柱穴２基からなる東西柱列（方向：E－３°－N）で、柱穴は直径10～14cmと小型であり、深さ９～19cmの小ピットで杭列とみられ、堆積土は黒褐色シルトで、柱間寸法は113cm、総長1.1mを測る。２TのSA－03、SA－04とほぼ一直線状に並び、同一遺構の可能性がある。

SA－08柱列　３・７T、尾根の中央やや東、緩やかに傾斜する地山上面でSB－02掘立柱建物跡の東側に並行して検出した。柱穴２基からなる南北柱列（方向：N－１°－E）で、柱穴は直径34～46cm、深さ20～22cm、柱痕跡は直径６～12cm、深さ５～10cmと小型で杭列とみられ、堆積土は黒褐色シルトで、柱間寸法は300cm、総長3.0mを測る。SB－02掘立柱建物跡の庇痕跡となる可能性がある。



第12図　Ⅱ区遺構平面図（1/200）



第13図　Ⅱ区掘立柱建物跡・柱列実測図

掘立柱建物跡柱穴・柱間寸法表

遺構番号	柱穴記号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）
SA－01	E 1	42	26	
（E－20°－N）	E 2	46	26	E 1～E 2：261
	E 3	39	36	E 2～E 3：242
	E 4	54	30	E 3～E 4：281
SA－02	W 1	10	19	—
（E－1°－S）	W 2	16	28	W 1～W 2：261
	W 3	36	23	W 2～W 3：240
	W 4	29	23	W 3～W 4：281
	W 5	19	27	W 4～W 5：294
SA－03	E 1	9	8	—
（E－5°－N）	E 2	12	12	E 1～E 2：137
	E 3	27	12	E 2～E 3：147
	E 4	10	12	E 3～E 4：115
SA－04	E 1	8	8	—
（E－4°－N）	E 2	11	8	E 1～E 2：124
	E 3	11	8	E 2～E 3：126
	E 4	16	10	E 3～E 4：125
	E 5	16	8	E 4～E 5：98
SA－05	W 1	39	20	—
（E－4°－S）	W 2	40	19	W 1～W 2：238
	W 3	33	25	W 2～W 3：312
SA－06	SA—05—W 1	39	20	—
（N－6°－W）	S 1	34	27	W 1～S 1：301
	S 2	38	25	S 1～S 2：217
	S 3	43	38	S 2～S 3：238

遺構番号	柱穴記号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）
SA－07	W 1	14	19	
（E－3°－N）	W 2	10	9	W 1～W 2：113
SA－08	S 1	34〈12〉	20〈10〉	〃
（N－1°－E）	S 2	46〈6〉	22〈4.5〉	S 1～S 2：300
SB－01	E 1・S 1	40〈9〉	42〈20〉	〃
（北桁：E－20°－N）	E 2・S 1	36〈19〉	38〈30〉	E1・S1～E2・S1：260
（南桁：E－23°－N）	E 3・S 1	36〈12〉	28〈16〉	E2・S1～E3・S1：263
	E 4・S 1	48〈13〉	26〈4〉	E3・S1～E4・S1：269
	E 1・S 2	48	15	E4・S1～E1・S2：220
	E 4・S 2	28	30	E1・S2～E4・S2：212
	E 1・S 3	32〈6〉	28〈5〉	E4・S2～E1・S3：274
	E 2・S 3	26〈10〉	62〈50〉	E1・S3～E2・S3：248
	E 3・S 3	38〈10〉	44〈32〉	E2・S3～E3・S3：287
SB－02	E 1・S 1	18	16	〃
（北桁：E－2°－N）	E 2・S 1	26	4	E1・S1～E2・S1：160
（南桁：E－2°－S）	E 3・S 1	30〈12〉	10〈6〉	E2・S1～E3・S1：246
	E 1・S 2	32〈10〉	16〈6〉	E3・S1～E1・S2：186
	E 2・S 2	38〈8〉	20〈14〉	E1・S2～E2・S2：190
	E 3・S 2	38〈14〉	12〈5〉	E2・S2～E3・S2：350

【掘立柱建物跡】

SB－01掘立柱建物跡　1T、調査区西端の平坦な地山上面で検出した。北西隅柱は調査区外となり確認できなかったが、東西3間・南北2間の東西棟である。柱穴9基を確認し、南側の桁行は7.9m、方向はE－23°－N、北側の桁行は5.4m以上、方向はE－20°－Nで、東側の梁行は3.3m、方向はN－29°－Wを測る。円形ないしは不整形の9個の柱穴は直径26～48cm、深さ15～62cm、桁行で確認した柱痕跡7個は直径6～19cm、深さ4～50cmと様々で、桁行の柱間寸法は248～287cmで、梁行の柱間寸法は212～274cmを測り、一定でない。南側桁列南西角柱穴がSA－01柱列を切っている。

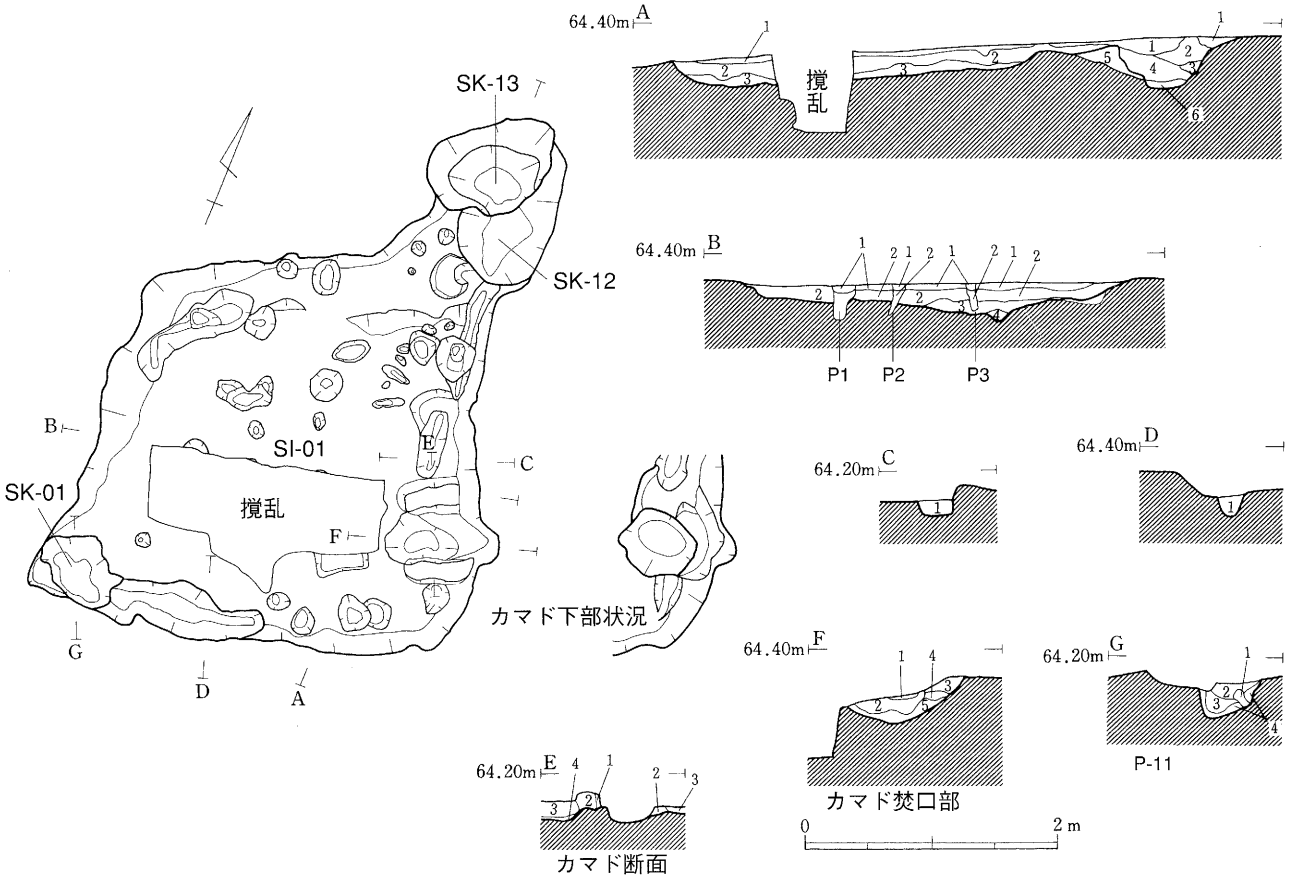
SB－02掘立柱建物跡　Ⅱ区中央、3・7Tで検出した。東西2間・南北1間の東西棟である。柱穴9基を確認し、桁行は南側がE－2°－S、北側がE－2°－Nで、梁行もN－2～6°－Wと歪みがあって、建物は不整形を呈す。北側桁列3基と南西角の柱穴で、炭化物を含む柱痕跡4基を確認した。柱穴は直径18～38cm、深さ4～20cm、柱痕跡は直径8～14cm、深さ5～14cmを呈し、北側桁行の柱間寸法は186～190cm、南側桁行の柱間寸法は160～246cmで、東側梁行の柱間寸法は350cm、西側梁行の柱間寸法は340cmを測る。SA－08柱列と並行し、同一の遺構とすれば庇などとなる可能性もある。

【溝跡】

SD－01溝跡　Ⅱ区西半、尾根中央平坦部の1・2Tで検出した。東西方向の溝で、方向はE－8°－S、全長26m分を検出した。検出面での上端幅は90cm、下端幅は60cm、底面はほぼ平坦で、深さ5～14cm、断面形は舟底形を呈する。堆積土は大別して3層に分けられ、2層中に炭化物が混入している。5・6Tで検出した土塁状遺構の南側でほぼ並行して伸びており、この遺構と南北幅12mほどの区画を構成する遺構の可能性もある。SB－01掘立柱建物跡の北東隅の柱穴に切られる。底面から須恵器坏（E－01）と縄文土器を出土している。

SD－02溝跡　Ⅱ区北西部、尾根北辺の5・6Tで土塁の南裾部に沿って検出した。ほぼ東西方向の溝であるが、土塁に沿って「く」の字状に屈曲して全長13.4m分を検出した。上端幅70～130cmで最大180cm、下端幅60～120cm、深さ15～20cm、断面形は舟底形もしくはV字形を呈し、東端部で浅くなり、消失する。土塁と同時に構築された可能性が高い。

SD－03溝跡　Ⅱ区中央、2～4Tで検出した。上端幅約100～160cm、下端幅60～120cm、深さ5～20cm、断面形



A

層位	土色		土質	土性 粘性	土性 しまり	備考	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒を少量含み又、極わずかに1cm程度の岩盤ブロックと炭化粒を含む均質な層	S'X-04
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒と炭化粒を少量含む層	
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックを多く含む層	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒を少量含み又極わずかに1cm程度の岩盤ブロックと炭化粒を含む均質な層	S'X-12
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	1層に類似しているが直径2～10㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を少量含む層	
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	SX-04の3層に類似しているが、それと比べて土のしまりが弱い層	
4	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	直径2～15㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を極わずかに含む層	
5	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒と炭化粒を少量含む層	
6	10YR4/4	褐	粘土質シルト	あり	ややあり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックを少量含み又極わずかに炭化粒を含む層、他の層に比べて一番粘性が強い層	

B

層位	土色		土質	土性 粘性	土性 しまり	備考
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒少量含み又極わずかに10㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を含む均質な層
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	1層に類似しているが直径2～10㎜程度の岩盤ブロックを少量、層の西側部分に含み、又炭化粒を少量含む層
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックを含む層で、又特に他の層と比べて炭化物が多くかつ粒が大きい層
4	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	3層に類似しているが炭化粒を極わずかに含む層

P1～P3

層位	土色		土質	土性 粘性	土性 しまり	備考
1	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	炭化物を少量含むが岩盤ブロックはほとんど含まない層
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	直径2～5㎜程度の岩盤ブロックを含む層で炭化物も少量含む層

C

層位	土色		土質	土性 粘性	土性 しまり	備考
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒と炭化粒を極わずかに含む均質な層

D

層位	土色		土質	土性 粘性	土性 しまり	備考
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒と炭化粒を極わずかに含む均質な層

第14図　Ⅱ区SI-01竪穴住居跡実測図

E　カマド断面

層位	土色		土質	土性		備考	
				粘性	しまり		
1	5YR4/3	鈍い赤褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	焚口内部にて赤色化。少量の炭化物が付着する。	カマド袖部（積土）
2	10YR5/4	鈍い黄褐	粘土質シルト	ややあり	あり	少量の黒褐色土を粒状に伴う。	
3	10YR5/6	黄褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	粒状の黒褐色土を少量含む。	周溝
4	10YR5/8	黄褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	基本層の4層及び砂岩粒少量含む。	

F　カマド焚口部

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径5㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を極わずかに含む層
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	1層に類似しているが2㎜程度の赤土の粒を極わずかに含む均質な層
3	7.5YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	1、2層に比べ赤い色が強い層でまばらに5YR4/8（赤褐色）の焼土を含むが炭化粒、岩盤ブロックはほとんど含まない層
4	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックと炭化物を少量含む層
5	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径5～20㎜程度の岩盤ブロックと炭化物を少量含む均質な層

G　P-11

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒と炭化粒を極わずかに含む層
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を少量含む層
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2～5㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を極わずかに含む層
4	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2㎜程度の岩盤粒と炭化粒を少量含み又まばらにパミスが含まれる層

は浅い舟底形を呈し、西から東方向に蛇行して延び、２・３Tの溝跡の底面で直径40～105cm、深さ20～40cm程のピット12仲基を中間距離0.6～2.0mほどの不規則的な間隔で検出した。３Tで溝跡の堆積土から内黒土師器体部の破片３点を出土している。

SD－04溝跡　Ⅱ区中央、２Tで検出した。東西方向の溝で、方向はN－55°－W、全長1.0m分を検出した。検出面での上端幅は34～56cm、下端幅は８～15cm、底面は凹凸が大きく、深さ12～30cm、断面形は舟底形を呈する。連続する複数のピットからなる遺構の可能性もある。

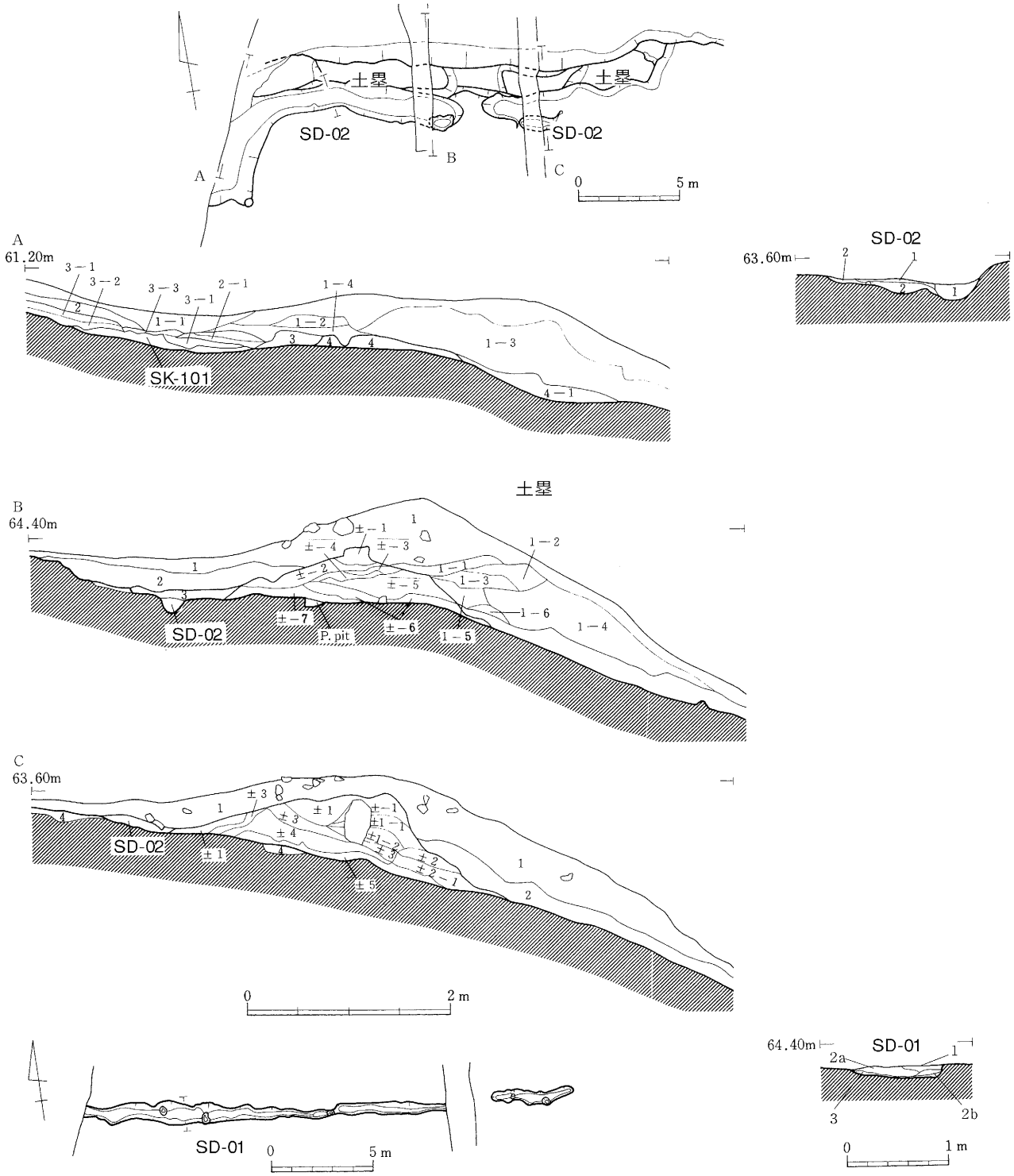
SD－05溝跡　Ⅱ区中央、２Tで検出した。東西方向の溝で、方向はE－17°－S、全長2.2m分を検出した。検出面での上端幅は30～65cm、下端幅は８～45cm、底面は凹凸が大きく、深さ16～40cm、断面形は不整形を呈する。

SD－06溝跡　Ⅱ区西部、尾根の最高所の平坦部、１Tで検出した。東西方向の溝で、方向はE－62°－Eで10mほど東に延びて屈曲し、さらに真東に５m、全長14.9m分を検出した。検出面での上端幅は75～130cm、下端幅は15～110cm、底面はほぼ平坦で、深さ6～13cm、断面形は椀底形を呈する。堆積土は大別して３層に分けられ、岩盤の小片が混入している。SX－06性格不明遺構、SD－07溝跡に切られる。堆積土から炭化物、縄文土器深鉢の体部下半の破片（A－36）を出土している。

SD－07溝跡　Ⅱ区西部、尾根平坦部の１・５Tで検出した。南北方向の溝で、ほぼ真北方向に延び、全長6.2m分を検出した。検出面での上端幅は80～285cm、下端幅は48～245cm、深さ８～22cm、南から北に平面形が広がり、浅くなって消失する。溝としての機能を考えがたい遺構である。

【竪穴住居跡】

SI－01竪穴住居跡　Ⅱ区西部、１T、尾根の最高所の平坦面、Ⅳ層上面で検出した。平面形は南辺がやや長い不整な方形で、規模は東西3.0～3.4cm、南北3.0mを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、最大高は42cmで、25cmほどの深さがあり、３層に区分できる。床面は地山で極めて固くしまりがあり、西壁部がやや高く、北辺部で幅25～60cm、数cmほど一段高い部分が認められる。住居跡内で24個のピットを確認しているが、その配置や深さなどに規則性がなく、建物の主柱穴とは認められない。住居内の全周に断続的に周溝を検出し、断面形はU字形で底面幅は約６cm、床面からの深さは10cmほどである。周溝は南西および北西隅部では不整形を呈し、幅や深さが一定でない。カマドは東壁の南辺よりに位置しており、燃焼部の側壁と両袖部分が残存し、粘性土で構築されている。左袖部の内面は火熱によって赤変し、焼土が付着する。煙道は確認できなかったが、燃焼部壁が住居東辺の外に張り



SD-02

層位	土　色		土 質	土 性		備　考
				粘 性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	1cm大の岩盤礫をわずかに含む
2	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	あり	0.5cm大の岩盤礫を全体に含む

SD-01

層位	土　色		土 質	土 性		備　考
				粘 性	しまり	
1	10YR5/4	鈍い黄褐色	シルト	なし	ややあり	
2a	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	砂岩に小粒の石を含む、少々炭化物を含む
2b	10YR4/4	黄褐	シルト	なし	ややあり	2Aとは異なり1層の土が混入層
3	10YR5/6	黄褐	シルト	ややあり	ややあり	全体に2層土混入

第15図　Ⅱ区土墨・SD-01・SD-02溝跡実測図

土壌セクション図A

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	7.5YR4/4	褐	シルト	ややあり	なし	表土1～2cm大の礫を少量含む
1-1	7.5YR4/3	褐	シルト	ややあり	なし	旧畑地作土
1-2	7.5YR4/6	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	1層よりもやや明るい
1-3	7.5YR4/4	褐	シルト	ややあり	なし	縄文土器を含む
1-4	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	1-2層よりも暗い
2	7.5YR4/3	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	1～3cm礫を少量含む
2-1	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	2層よりやや暗い
3	7.5YR3/4	暗褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	3cm大の礫を少量含む
3-1	10YR2/3	黒褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	0.5～3cm大の礫を少量含む。2-1よりも暗い
3-2	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	1cm大の礫を含む
3-3	7.5YR4/4	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	3-2層よりやや明るい
4	7.5YR4/4	褐	粘土質シルト	ややあり	あり	1～2cm大の礫を少量含む。土壌底辺部残存、地山の基本層Ⅳ層
4-1	7.5YR4/4	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	2～5cm大の礫を含む
5	7.5YR4/6	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	岩盤からなる層

土壌セクション図B

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	7.5YR4/3		シルト	ややあり	なし	3～20cm大の岩盤を多量に含み、現代の遺物も含む事から耕作に伴う盛土と思われる
1-1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	2cm大の礫（岩盤）を少量含む、土壌崩落土
1-2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	1-1層に比べやや暗い
1-3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	2～3cm大の礫（岩盤）を少量含む、土壌崩落土
1-4	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	3～5cm大の礫（岩盤）を少量含む
1-5	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	1～4層よりやや明るい
1-6	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	1-3に同じ
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	1～5cm大の礫（岩盤）を少量含む。又、少量の炭化物を含む
2-1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	5cm大の礫（岩盤）を少量含む
3	10YR3/3	暗褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を少量含み、1～3cm大の礫（岩盤）を含む
4	10YR4/4	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	2～3cm大の礫（岩盤）を少量含み、3層よりやや明るい
5	10YR4/4	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	岩盤からなる層
土-1	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	あり	1～5cm大の岩盤礫を含む
土-2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	1～5cm大の岩盤礫を多量に含み炭化粒を少量含む
土-3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	風化した1～2cm大の岩盤礫を少量含み炭化粒を極わずかに含む
土-4	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	1～2cm大の岩盤礫をわずかに含み炭化粒を極わずかに含む
土-5	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	1～7cm大の岩盤礫を少量含み炭化粒を極わずかに含む
土-6	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	1～2cm大の岩盤礫を少量含み炭化粒を極わずかに含む
土-7	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト	ややあり	あり	1～5cm大の岩盤礫を少量含み炭化粒を極わずかに含む

土壌下層遺構

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
SD-02	10YR3/3	暗褐	粘土質シルト	ややあり	あり	1～8cmの岩盤礫を含む
Pit	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト	ややあり	あり	2cm大の岩盤礫を極わずかに含む

土壌セクション図C

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	なし	3～20cm大の岩盤を多量に含み、現代の遺物も含むことから耕作に伴う盛土と思われる
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	粒子状～1cm程度の炭化物を多量に含む。又、腐った木や、風化した岩盤の粒も含む
4	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	ややあり	粒状の炭化物を多量に含む。又1cm程度の岩盤の粒もわずかに含む
5	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	ややあり	岩盤からなる層
土1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	炭化物を極わずかに含む
土1-1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	炭化物をわずかに含む
土1-2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	風化した岩盤の粒（直径3cm）を含む
土2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	なし	風化した岩盤の粒（直径1.5cm）を含む
土2-1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	なし	炭化物を極わずかに含む
土3	10YR2/3	黒褐	シルト	ややあり	なし	南側の層に直径0.5cm程度の炭化物を少量含む。又岩盤の細かな粒も含む
土4	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	粒子状の炭化物を少量含む。岩盤の粒も少量含む
土5	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	層の中央部分に直径1cm程度の岩盤の粒を含む
Pit	10YR2/3	黒褐	シルト	なし	なし	草の根を多く含む。周りの層に比べて粘性・しまり共にほとんどなく後から埋められた土のように思われる
SD-2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	風化した岩盤をわずかに含む

出す。東辺部でSX－07性格不明遺構を切り、南西隅部はSK－01土坑、北東隅部ではSK－12土坑に切られ、中央部は幅60×長さ180×深さ60cm、平面長方形の電柱支柱坑掘り方の撹乱を受けている。

【土坑】

SK－01土坑　Ⅱ区南西部、尾根平坦部の１Ｔで検出した。平面形が隅丸長方形で、東辺部が丸みを帯び、南西角はほぼ直角を呈す。長軸方向はN－33°－W、上端は東西方向の長軸138cm、南北方向の短軸56cm、深さ11cm、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底形を呈する。堆積土には炭化材と多量の炭化物を含み、若干の焼土を含むが、壁面には炎熱による赤変化は認められない。SI－01竪穴住居跡を切っている。

SK－02土坑　6T中央部で検出した。平面形が不整な長楕円形で、東側が膨らみを帯びている。長軸方向はN－22°－E、上端は南北方向の長軸158cm、東西方向の短軸43cm、深さ15cm、壁は緩やかに立ち上がり、断面形はU字形を呈する。堆積土にはわずかに炭化物を含む。

SK－03土坑　Ⅱ区西部、尾根の最高所の平坦面、5T中央で検出した。平面形は北側が先細りの楔形で南西側に膨らむ不整形を呈する。上端は南北方向の長軸236cm、東西方向の短軸63cm、深さ28cm、壁は全周が緩やかに立ち上がり、中央部で落ち込み、断面形は不整形を呈する。堆積土にはわずかに炭化物と焼土を含む。

SK－04土坑　6Tの北側で検出した。平面形は略円形を呈する。上端は東西・南北方向ともに約4.0m、深さは最深部で80cm、壁は全周が緩やかに立ち上がり、堆積土はレンズ状の堆積状況をなしており、3層中には基本層Ⅲ層とみられる土砂も認められる。倒木痕である可能性がある。SK－06に切られ、内黒土師器坏を出土している。

SK－05土坑　6Tの北側で検出した。SK－06に切られ、平面形は三日月形を呈する。上端は3.9m、深さは最深部で10cm、堆積土には灰白色火山灰の可能性がある土砂の堆積もみられ、縄文土器を出土している。

SK－06土坑　2Tで検出した。平面形は長楕円形を呈する。長軸方向はN－43°－Eで、上端は南北262cm、東西72cm、壁は尾根側で柱穴状に深く、最深部の深さは43cmである。堆積土に岩盤ブロックと炭化物を含む。

SK－07土坑　6Tの中央、SX－03性格不明遺構の南東隅部に接して検出した。平面形は不整形を呈し、南西辺が歪んでいる。長軸105ｃｍ、短軸87cmを測り、壁は南壁で垂直に立ち上がり、48cmほどである。堆積土は4層に分層され、炭化物を含んでいる。

SK－08土坑　6Tの北側、SX－03性格不明遺構の東辺を切って検出した。平面形は不整形を呈し、長軸150cm、短軸145cmを測り、東よりで断面形が舟底形で長方形に落ち込む。堆積土は3層に分層され、東壁はSK－05土坑に切られている。

SK－09土坑　4Tの南東、尾根の南側斜面で検出した。平面形は略円形を呈し、南側に広がっている。東西方向の長軸138ｃｍ、南北方向の短軸84cmを測り、壁は緩やかに立ち上がり、深さは18cmほどである。堆積土は2層に分層され、炭化物を含んでいる。

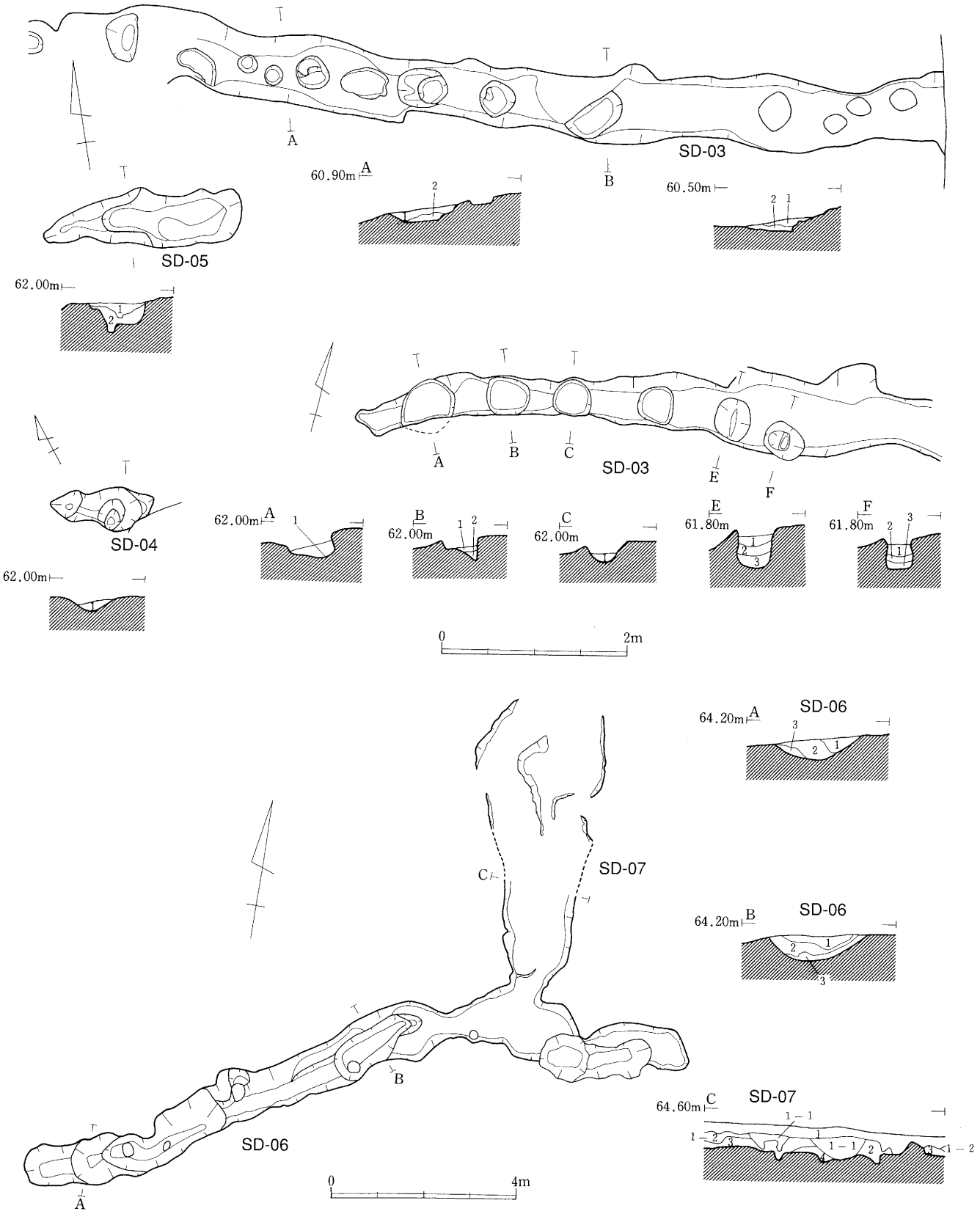
SK－10土坑　6Tの中央、SX－03性格不明遺構の南東部を切って検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、南北方向の長軸164ｃｍ、短軸62cmを測り、壁は北壁以外では垂直に立ち上がり、深さは48cm、最深部で60cmである。堆積土は5層に分層され、炭化物を含んでいる。

SK－11土坑　3Tの南西部、尾根の南側斜面で検出した。平面形は円形を呈している。規模は88×74cmを測り、壁は尾根側で急に立ち上がり、深さは32cmほどである。堆積土は2層に分層される。

SK－12土坑　1T西部、SI－01竪穴住居跡の北西部で検出した。当初は、竪穴住居跡の一部として精査していたが、住居跡の北東隅部で住居跡を切っている遺構であることが判明した。平面形は楕円形で、東西方向の長軸124cm、短軸75cm、深さ32.5cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、堆積土は1層である。SK－13土坑に切られる。縄文土器深鉢を出土している。

SK－13土坑　1T西部、SI－01竪穴住居跡の北西部で検出した。当初は、SK－12土坑と同様に竪穴住居跡の一部として精査していたが、住居跡の北東隅部で住居跡を切っている遺構であることが判明した。平面形は不整楕円形で、南北方向の長軸107cm、短軸70cm、深さ42cmを測る。壁は途中で段をもって立ち上がり、堆積土は4層で、縄文土器を出土する。SK－12土坑を切っている。

SK－101土坑　5T西壁部、SD－02溝跡の底面で遺構の東半部を検出した。平面形は楕円形で、南北208cm、東西124cm以上、深さ15cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈す。堆積土は2層で、SD－02溝跡に切られている。縄文土器深鉢（A－3・20・23）を出土している。



第16図　Ⅱ区SD-03・04・05・06・07溝跡実測図

SD-03　A

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	なし	右隅部分に1～10㎜程の細かな礫を含み、又極わずかな炭化物を含む
2	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	中央より左側には最大直径60㎜の礫を1つと10～30㎜程の礫を2～3含む。右側には2～5㎜程の細かな礫が少量含まれている

SD-03　B

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/2	黒褐	シルト	ややあり	なし	Ⅲ層黒色土。3～10㎜程の礫を極わずかに含む。又極わずかな炭化物を含む。土質はセクション1の1とほぼ同じ
2	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	右端に10～30㎜の砂岩ブロックを数個含む。又砂岩ブロックの周辺でⅢ層黒色土の混入がわずかに見られる。土質はセクション1の2とほぼ同じ

SD-03　底面ピット（A・B・C・E・F）

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径5～20㎜の岩盤ブロックを少量含む層
2	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	あり	直径5㎜程度の岩盤ブロックを含む均質な層
3	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	あり	2層に類似しているが岩盤ブロックを含まない層

SD-05

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	あり	図中斜線部分で直径20㎜程度の岩盤ブロックを少量含むだけで、それ以外はブロックの混入が見られない均質な層である
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	直径20～50㎜程度の岩盤ブロックを少量含む

SD-04

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	5～10㎜（最大直径40㎜）の礫を含む

SD-07　C

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2～5㎜程度の岩盤ブロックを少量含む層で、表土層と思われる
1-1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックを少量、炭化粒を極わずかに含む層で、畑の旧作土と思われる
1-2	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	あり	直径2～20㎜程度の岩盤ブロックを少量、炭化粒を極わずかに含む層で、畑の旧作土と思われる
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径10㎜程度の岩盤ブロックを多く含み、又炭化粒を極わずかに含む層
3	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	あり	直径2～30㎜程度の岩盤ブロックを少量、炭化粒を極わずかに含む層で、基本層（4層）に類似すると思われる
4	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	あり	直径2～20㎜程度の岩盤ブロックを多く、炭化粒を極わずかに含む層

SD-06　A

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/6	褐	シルト	なし	あり	混じり気が少なく均質な層。2㎜以下の細かな炭化物をわずかに含む
2	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	あり	1～10㎜（最大直径20㎜）程の礫を極わずかに含んでおり、又2㎜以下の細かな炭化物を極わずかに含まれている
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	3～30㎜程度の礫を少量含んでおり、又2㎜以下の細かな炭化物を極わずかに含まれている

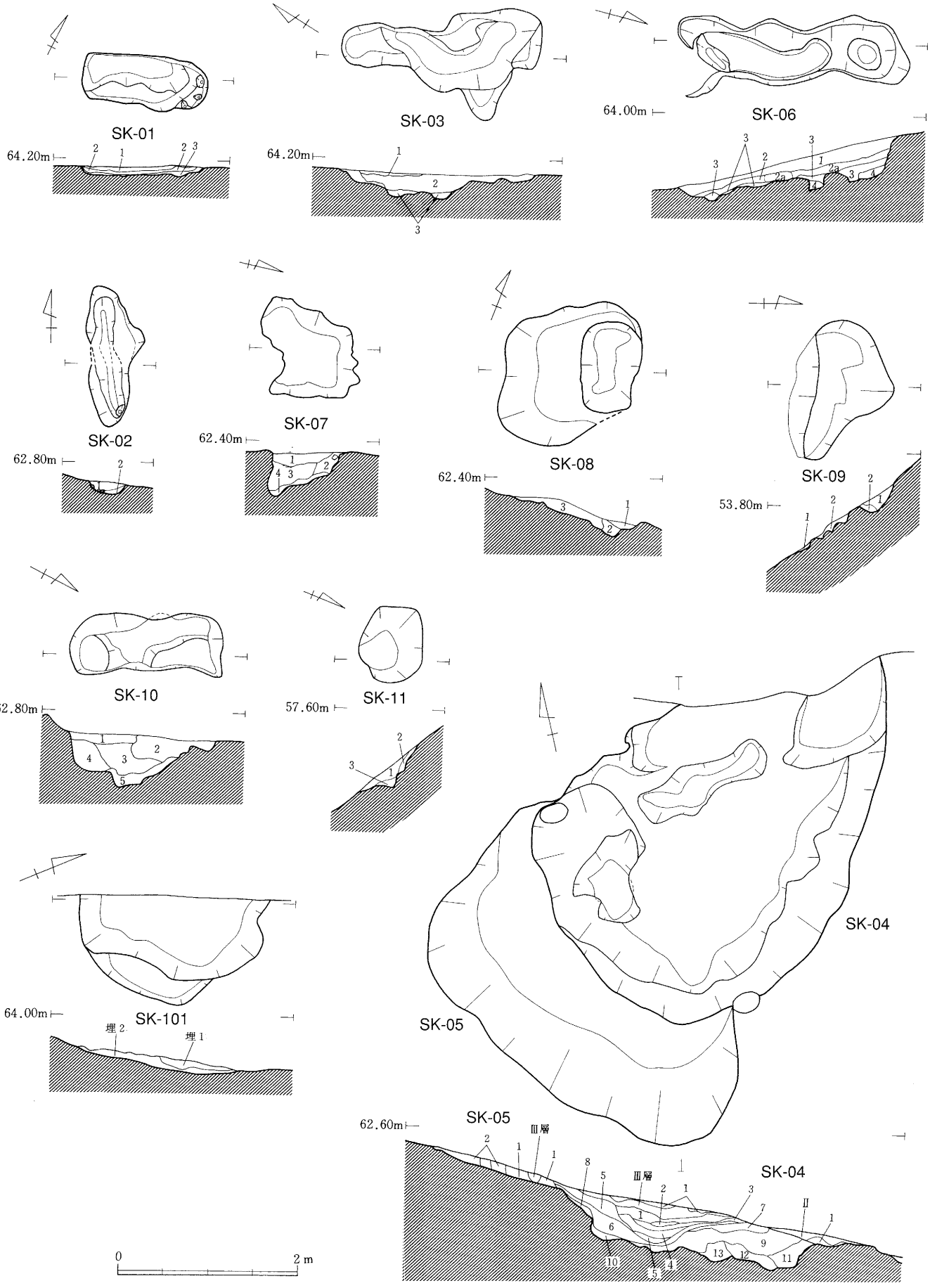
SD-06　B

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2～5㎜程度の岩盤ブロックを少量含み、炭化粒を極わずかに含む層
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を少量含む層で縄文片が見られた
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	2層に類似しているが直径1～3cm程度の岩盤ブロックを多く含む層

【焼土遺構】

1号焼土遺構　Ⅱ区西端、尾根中央の5Tで検出した。平面形が隅丸方形で、東辺がやや膨らむ。長軸方向はN－6°－W、上端は南北方向の長軸240cm、東西方向の短軸152cm、下端幅154×226cm、深さ40cm、断面形は東辺以外の壁が直立ないしはオーバーハングを呈する。西壁、特に北西隅部が強く赤変しており、東側は火熱による変化が少なく、炭化物や焼土が周辺に分布することから、焚き口側であった可能性がある。堆積土には多量の炭化物や焼土が含まれ、下層には灰ブロックと純一な炭化層が認められる。底面には炎熱による赤変化は認められず、灰の掻きだしを行った可能性がある。上面で縄文土器を出土している。

2号焼土遺構　Ⅱ区南東部、4T、3号平場遺構の肩部で検出した。平面形が不整円形で、東西がやや膨らむ。長軸方向はE－16°－S、上端は東西方向の長軸128cm、南北方向の短軸112cm、下端幅85×70cm、岩盤層（Ⅴ層）を掘り窪め、深さ68cm、断面形は逆台形を呈する。堆積土には純一な灰層を含み、底面には多量の炭化物が含まれる。一部壁面には炎熱による赤変化が認められる。内黒土師器坏を出土している。



第17図　Ⅱ区土坑実測図

SK-01

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR2/1	褐	シルト	ややあり	ややあり	わずかな焼土と多量の炭化物を含み、炭化材（直径10㎜～20㎜）を含む
2	10YR2/2	黒褐	シルト	ややあり	ややあり	1層より黒みが強く、大量の炭化材（30㎜～40㎜）を含む。又焼土を含む
3	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	地山土の包含層。わずかな炭化物と焼土を含む

SK-03

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	粒子の細かな土で、炭化物をわずかに含む
2	10YR2/3	黒褐	シルト	ややあり	ややあり	粒子の細かな土に、炭化物（最大直径10㎜）と焼土（最大直径5㎜）をわずかに含んでいる。又中央より北側（図中右）には岩盤ブロック（直径5～50㎜）を集中的に含む
3	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	南側の3層南端に崩落土（焼土、直径40㎜）を含んでおり、又少量の炭化物とわずかな焼土を含む
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	上部に岩盤ブロック（最大直径70㎜）を多く含み、又風化した礫と細かな焼土をわずかに含んでいる

SK-06

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	3～20㎜の礫を少量含んでおり炭化物をごくわずかに含む
2	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	土質的にはIとほぼ同じであるが10～30㎜の砂岩ブロックを少量含む
2a	10YR5/4	鈍い黄褐	粘土質シルト	あり	あり	2の土の中に非常に多量の粘土を含み、また5～15㎜程の小さな礫を少量含んでいる
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	5～35㎜（最大直径60㎜）程の砂岩ブロックを多量に含む。図中B部分には2aの土の混入がわずかながら見られる
4	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	ややあり	粒子が細かく均質な層。部分的に1～3㎜程の細かな礫を極少量のみ含む

SK-02

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	あり	炭化物を極わずかに含み、又5～50㎜大の岩盤礫を多量に含む
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	炭化物を極わずかに含み、又5～50㎜大の岩盤礫を極わずかに含む

SK-07

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	3～20㎜（最大直径35㎜）程の礫を多量に含み、又炭化物を極わずかに含む
2	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	5～50㎜程の礫を非常に多く含んでおり、右上の部分には最大直径110㎜ほどの大きな岩を1つ含んでいる
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	土質は1、2とほぼ同じ。2～40㎜程の礫を少量含んでおり、又わずかな炭化物を含んでいる
4	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	5㎜大の礫がわずかに含まれている以外は、他の上層の土質とほぼ同じであるがより粒子が細かく粘性が強い

SK-08

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	3～10㎜程の礫をわずかに含んでおり、炭化物を極わずかに含む
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	10～20㎜程の砂岩ブロックを少量含んでおり、左上層部には黒色土（10YR3/2黒褐）の混入がわずかに見られる
3	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	3～30㎜程の砂岩ブロックをわずかに含む。土質は1、2、3ともほぼ同じ

SK-09

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	なし	ややあり	5～10㎜程度の凝灰岩を含む。崩落土と思われる
2	10YR2/3	黒褐色	シルト	ややあり	ややあり	炭化物を多く含み黒色が強く礫の上面に焼け色が見える

SK-10

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	ややあり	1～20㎜程の小さな礫を少量含んでおり、又2㎜（最大直径6㎜）以下の細かな炭化物を極わずかに含んでいる
2	10YR5/4	鈍い黄褐	粘土質シルト	あり	ややあり	1～10㎜（最大直径45㎜）程の礫を多量に含んでおり、層の上面には部分的に黒色土（10YR3/4暗褐）の混入がわずかに見られる
3	10YR4/4	褐	シルト	あり	なし	最も粘性が強く、遠くなるにつれ粘性はややなくなる。（粘性○→△）又1～5㎜（最大直径50㎜）程の礫を極わずかに含む
4	10YR5/6	黄褐	シルト	ややあり	ややあり	直径85㎜のブロック状の塊が含まれている。又1～5㎜程の礫をわずかに含んでいる
5	10YR4/4	褐	粘土質シルト	あり	ややあり	直径90㎜と50㎜のブロック状の粘土の塊がふたつ含まれており、そのすぐ脇の右脇の所にも直径25㎜程の粘土ブロックが含まれている。層の土質は2、3に近い。また1～3㎜程の非常に細かな礫を含んでいるがa部（粘土ブロック）周辺にはほとんど含まれていない

SK-11

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR2/2	黒褐	シルト	ややあり	なし	Ⅲ層黒色土。3層と接する付近で直径10～20㎜の岩盤ブロックを2、3個含む
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	なし	岩盤ブロックの混入しない均質な層
3	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	上部で1層の土が混入している。岩盤ブロックはほとんど含まない

SK-04

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
Ⅱ	10YR4/2	鈍い黄橙	シルト	ややあり	あり	岩盤の風化した粒が全体的に多量に含まれる。又層中から土師質土器が出土している
Ⅲ	10YR2/2	黒褐	シルト	ややあり	あり	5～10㎜大の風化した岩盤の粒を含む
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	5～10㎜大の風化した岩盤の粒を含む。又5㎜大程度までの炭化物の粒を極わずかに含む
2	10YR6/4	鈍い黄橙	シルト	なし	あり	灰白土？粘り気がほとんど無く、さらさらした感触である
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	10㎜大程度の風化した岩盤の粒を含む。又5㎜大程度までの炭化物の粒をわずかに含む
4	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	あり	5～10㎜大の風化した岩盤の粒を多量に含む。又10㎜大程度までの炭化物の粒をわずかに含む
5	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	5㎜大までの、風化した岩盤の粒を全体的に含む。又炭化物の粒を極わずかに含む。層中から縄文土器が出土している
Ⅲ'	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	10㎜大程度の風化した岩盤の粒を含む。畑の畝を覆っていることから、畑地の作土と思われる
6	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	岩盤粒を含み、粘性は極めて弱い
7	10YR4.5/4	褐	シルト	ややあり	あり	岩盤粒を極わずかに含み、炭化物も極わずかに含む
8	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	あり	あり	直径20㎜大の岩盤粒を含み、しまりがある
9	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	強い	直径50㎜程度までの岩盤粒を含み、しまり極めて強い。少量の炭化物を含む
10	10YR4/4	褐	シルト	あり	ややあり	岩盤粒をわずかに含み、しまり弱い
11	10YR4.5/4	褐	シルト	あり	強い	岩盤粒を全体的に含み炭化物を極わずかに含む
12	10YR5.5/4	鈍い黄褐	砂質シルト	ややあり	あり	層の北端部に岩盤粒を多く含み、しまり強い
13	10YR5/4	鈍い黄褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	層のほぼ全域を大きな岩盤粒が占めている
Ⅱ-1	10YR4.5/4	褐	シルト	あり	ややあり	細かな岩盤粒と炭化物をわずかに含む
Ⅱ-2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	全体的に岩盤粒を含み、炭化物を極わずかに含む
Ⅳ-1	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	ややあり	直径50㎜大の岩盤粒を層中に含み、炭化物を極わずかに含む
Ⅳ-2	10YR4.5/4	褐	シルト	あり	あり	岩盤粒を多く含み、炭化物をわずかに含む

SK-05

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	強い	岩盤粒を多く含み、砂質のようではあるが、しまりは極めて強い
2	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	ややあり	直径20㎜以上の岩盤粒を含み、粘性は弱い

SK-101

遺構	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
SK-101	7.5YR4/3	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	縄文土器を含み、炭化粒も含む

【土塁】

Ⅱ区北西部、5・6Tで尾根北側の縁辺部に沿って残存しており、表土・崩落土を除去して検出した。現地表から20～60cm下で土塁上面を検出し、崩落土層は60～80cmの厚さがあった。土塁の北面は現況では約30度の傾斜であったが、精査の結果、土塁の北側は約60度の勾配に切り立っていたことを確認した。耕作等によって遺存状態は極め悪く、土塁上面は起伏ある状態であった。土塁の方向はE－8.5°－Sで、上端幅86～164cm、下端幅260～338cm、総長20.8m、高さ0.8～1.1m、基底部は幅1.3～3.4mを測る。残存状態のよい部分では、基底部の岩盤地山層（Ⅴ層）とその上の漸移層（Ⅳ層）を残しているが旧表土や整地層は認められず、岩盤塊を含む褐色シルトを互層に盛り土している。土塁構築段階には、旧表土を削平して平坦面を造り出した後、基底部幅を3m、北外側の高さを1.5m、断面台形とするプランで構築し、内側に溝を配した構造が想定できる。土塁積み土や北側の崩落土からは、金属製品笄（M－01）や比較的多量の土師質土器灯明皿（D－01など）、剥片石器（K－02・03）などを出土している。

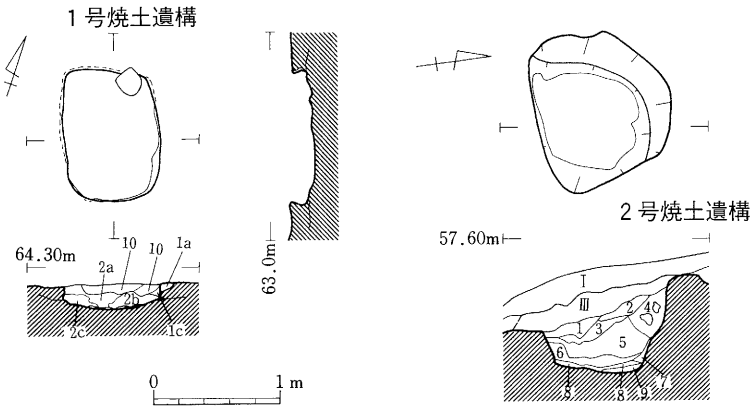
【平場遺構】

南側斜面1Tから4Tにかけて、上・中・下の3段、段状に位置する平場遺構3基を検出した。

1号平場遺構　調査区の中央、2T、尾根の南肩部の最上段で検出した。幅1m、東西方向に長さ9mほど、岩盤の地山の上に岩盤ブロックを含む黒褐色土を盛り土して平坦面を造成している。

2号平場遺構　調査区の西半部、1～2T、尾根の南肩部の2段目で検出した。幅0.4～2.0m、東西方向に長さ22.5mほど、岩盤の地山の上に岩盤ブロックを含む黒褐色土を盛り土して平坦面を造成している。1号平場遺構と類似した構造である。

3号平場遺構　調査区を横断するように1～4T、尾根の南肩部下段で検出したが、さらに調査区東方、Ⅵ区まで延び、最大幅3.2m、東西方向に長さ80mほどを確認した。地山の岩盤を削って平坦面を造りだしている。その中央部には溝状に浅く窪み、その底面で浅いピットを検出しており、柵状をなす杭列もしくは路面の普請に関わる遺構の可能性がある。



1号焼土遺構

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1a	10YR3/2	黒褐	シルト	ややあり	ややあり	少量の炭化物（最大15㎜）を含みわずかに焼土を含む。又5㎜大の礫を含む
1b	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	極わずかの炭化物（2㎜以下）を含む。又濁りのない均質な層である
1c	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	わずかな焼土と炭化物を含む。又中央部に直径20㎜の炭化物を含む。1ｂと同じく混じり気のない層である。1ｂ層との層離面に焼け面又は焼土あり
2a	10YR3/2	黒褐	シルト	ややあり	なし	大量の炭化物と少量の焼土を含む。但しこの遺構の北西部上面には大量の焼土が集中している
2b	10YR3/2	黒褐	シルト	ややあり	なし	大量の炭化物と少量の焼土（3～5㎜）を含む。又中央部に細かい灰（3～5㎜）をブロックで含み、左下隅部分に直径80㎜の灰のブロックを含む
2c	10YR1.7/1	黒	シルト	なし	なし	ほとんど炭化物である。炭化物は最大25㎜位のものが含まれる、なお、2層の炭化物はa、ｂ、ｃの順で多くなっている。純粋な炭化物層
3	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	わずかに炭化物を含む。又濁りのない均質な層である。灰の堆積層

2号焼土遺構

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
Ⅰ	10YR3/3	暗褐	シルト	なし	なし	中央付近より右側に風化した5～10㎜程度の礫をわずかに含む
Ⅲ	10YR3/2	黒褐	シルト	なし	なし	Ⅲ層黒色土。中央右より黒みが強い（10YR2/2黒褐）
1	10YR2/3	黒褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	上の層に比べるとやや明るく、粒子が非常に細かい
2	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	1に比べ粒子は粗くなるものの、土質的にはほぼ同じ
3	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	図中aの部分は灰。（灰：10YR6/4、鈍い黄橙）右側部分の土にも灰の混入が少量見られる。
4	10YR3/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	なし	やや粒子が粗く、中に10～20㎝の礫と拳大の岩盤ブロックを二つ含む
5	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	ややあり	中に1～5㎜大と20～30㎜大の礫を含み、又上部にわずかな炭化物を含む
6	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	5と同じ土質の中に多量の炭化物と5㎜大の礫を含む
7	10YR4/4	褐	粘土質シルト	ややあり	なし	粒子が粗く、極少の礫（2㎜以下）を含むが粘りがある
8	10YR3/3	暗褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を多量に含んでおり、又右側部分には直径5～30㎜大の炭化材が集中的に含まれている
9	10YR5/6	黄褐	粘土質シルト	ややあり	なし	土質はきわめて7に近いが土色により明るい。又少量の炭化粒（1～3㎜）と右上に20㎜大の炭化物を1つ含む

第18図　Ⅱ区1号・2号焼土遺構実測図

【通路状遺構】

尾根の南斜面、1T～4Tにかけて、上下の平場遺構を斜めにつなぐ通路状遺構2基を検出した。

1号通路状遺構　1Tで、下段の通路から上段の1号平場遺構をつないでいる。

2号通路状遺構　4Tで、東へ続く踏み路と一段上の3号平場遺構を連結している。

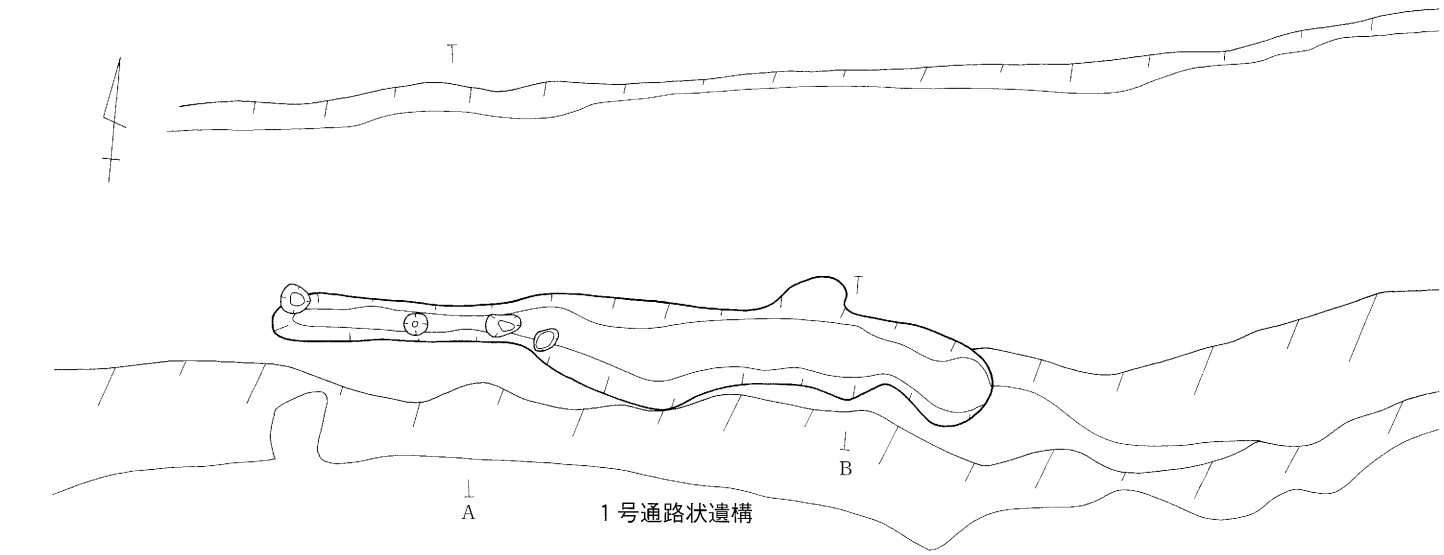
【性格不明遺構】

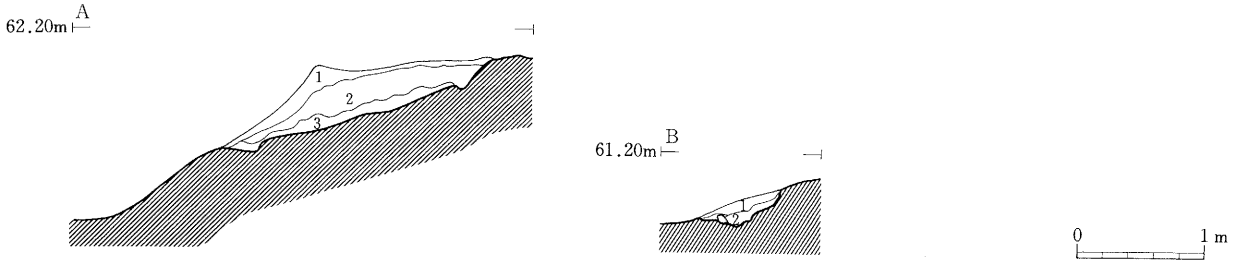
検出した9基の性格不明遺構のうち、主なものについて記述する。

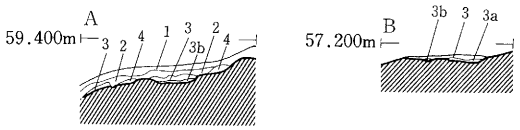
SX－1性格不明遺構　9T西側、南斜面で検出した。平面形は略円形を呈し、規模は東西約5m、南北約7m、深さ1.0mで、堆積土に基本層Ⅲ層を含み、風倒木痕の可能性がある。縄文土器を6点出土している。

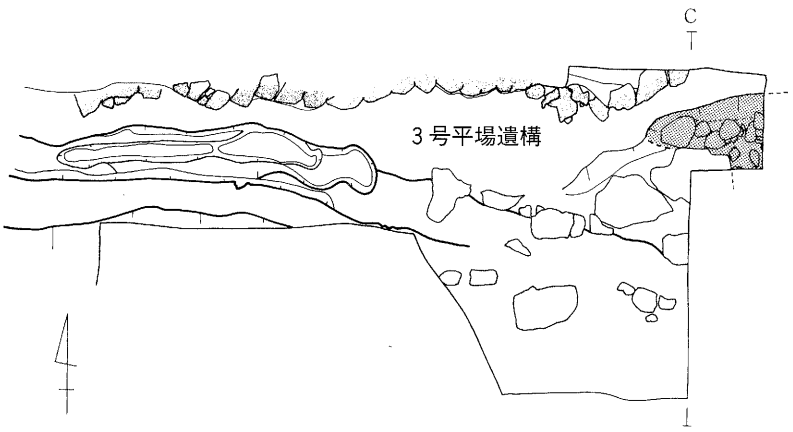
SX－2性格不明遺構　10T西側、急傾斜の南斜面で検出した。平面形は溝状で、斜面に斜めに延び、最大幅140㎝、断面がV字形を呈し、深さ140㎝以上で垂直に落ち込み、堆積土に基本層Ⅲ層が落ち込んでおり、人為的な遺構とは認められず、地割れ痕とみられる。

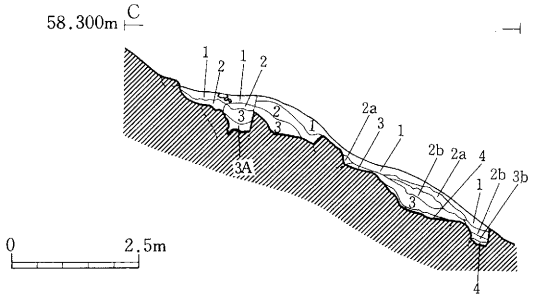
SX－6性格不明遺構　1Tの北側平坦面で検出した。東西方向に延びるSD－6溝跡を切っている。平面形は略隅丸











第19図　Ⅱ区平場遺構・通路状遺構実測図

1号通路遺構　A

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	わずかに炭化物を含み、直径10㎜位の凝灰岩ブロックを多く含む
2	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	層の下半部・斜面側に黄色の土（10YR5/6）がかなり混入している。又1層と同様に凝灰岩ブロックを含む。但しブロックの大きさは1層のものよりも大きいものが多い。（畝の天地返し）
3	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	ややあり	ややあり	平場と斜面の境目付近（谷側の）に直径50㎜位の岩盤ブロックが大量にあり、又ところどころに2層の暗褐の土が混入している。

1号通路遺構　B

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/2	黒褐	シルト	なし	ややあり	10YR2/2黒褐の土が部分的に集中しており、又細かい根が多い
2	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	10YR3/2黒褐の土が上部に混入している。下部には小さな（直径10～20㎜）岩盤ブロックを含んでおり、図中にあるような大きめ（60㎜位）のもの含まれている

3号平場遺構　A

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR2/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	1、2層とも崩落土であり、ガラスが含まれている
2	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	層の下半部・斜面側に黄色の土（10YR5/6）がかなり混入している。又1層と同様に凝灰岩ブロックを含む。但しブロックの大きさは1層のものよりも大きいものが多い。（畝の天地返し）
3	10YR2/3	黒褐	シルト	ややあり	なし	上の断面図の3層よりも粒子が粗く、褐色の土（10YR4/4）の土が混入している
3b	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	直径1～5㎜の砂礫を少量含む、又上部に3層の黒色土が混入している
4	10YR5/6	黄褐	シルト	ややあり	ややあり	2層の土が上部に混入している。又下部に10～20㎜位の岩盤ブロックが含まれる

3号平場遺構　B

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
3	10YR2/3	黒褐	粘土質シルト	△	△	粒子の細かい均質な黒色の層であるが、斜面側にさらに黒い（10YR2/2）粒子が多量に混入している。又ピットの掘り込みがある
3a	10YR4/4	褐	シルト	△	△	砂礫がわずかに含まれる
3b	10YR3/4	暗褐	シルト	×	△	砂岩ブロックの風化したようなもの（岩盤粒子）がほとんどを占める層である

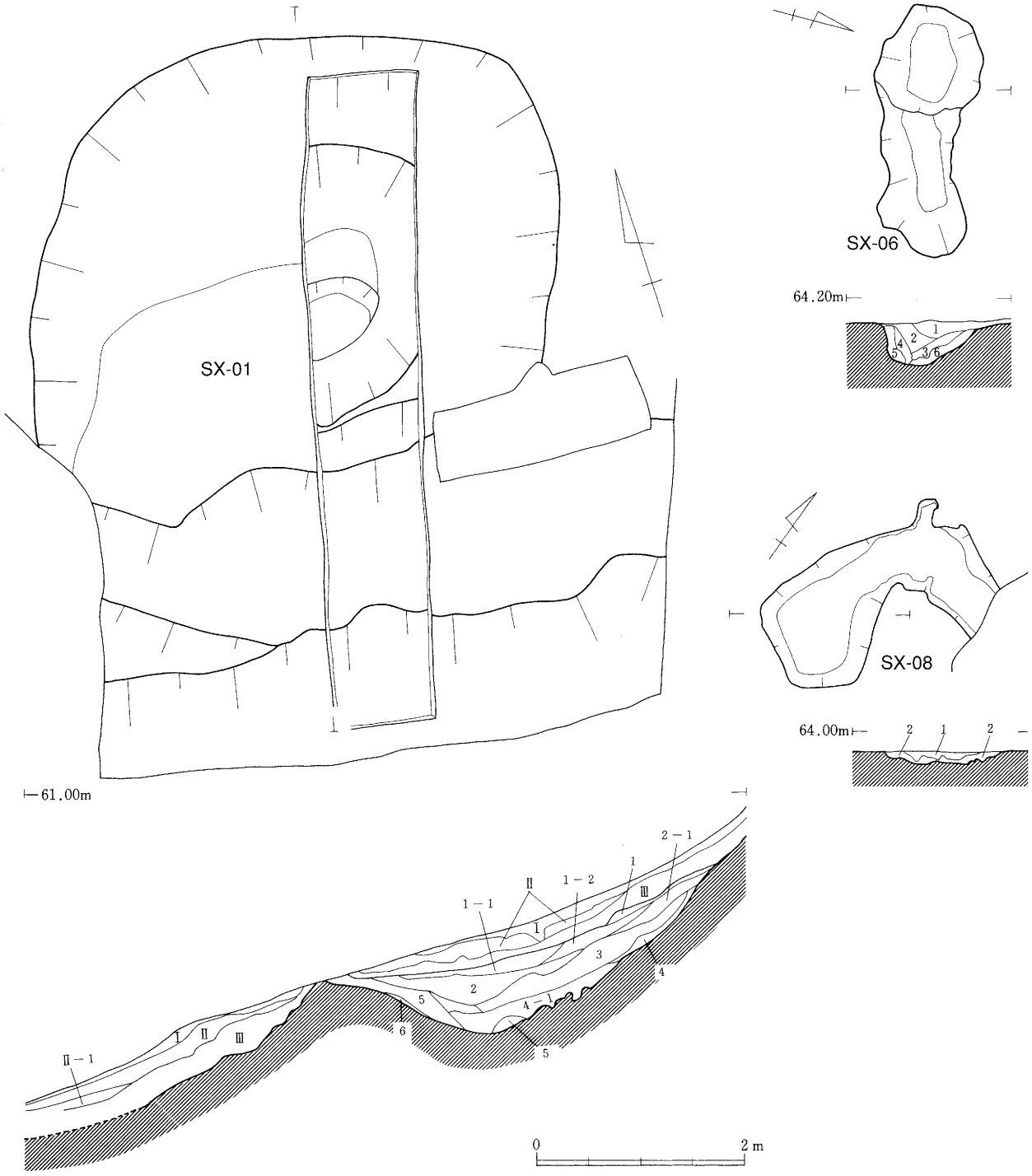
3号平場遺構東側　C

層位	土色		土質	土性		備考	
				粘性	しまり		
1	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	腐葉土の層で、最上部には調査時に出た残土が積っている。左の図中、中央付近に最大200㎜の岩盤ブロックを含む。表土	
2	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	左図の層には直径10～40㎜の礫が少量含まれているが、右図の層には、ほとんど含まれていない。崩落土と思われる	崩落土
2a	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	2に比べ、粒子が細かく、混じり気が少ない。層の右端部（a）に黒色土の混入が見られ、礫（20㎜前後）を含む	崩落土
2b	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	中央部に3の土がわずかに混入している。土質は2aとほぼ同じ。岩盤状（ブロック等）のものは全く含まれない	崩落土
3	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	3層黒色土。右図Bの部分はより黒色が強い。土色：10YR3/2（黒褐）。左ｊは根の濁りか？	
3a	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	崩れたブロック状の岩盤ブロックを含む。3号平場を整地した時の土と思われる。拳大から人頭大の岩盤ブロックを含む	
4	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	あり	岩盤が風化してできた細かい粒子の層で、非常にしまりがある。地山の掘り過ぎ	

長方形で、長軸方向はN－77°－Eで、長軸243cm、短軸60～96cm、深さ33～42cmを測る。堆積土２層上面に炭化物を多く含んでいる。

SX－７性格不明遺構　１Tの西側平坦部で検出した。南辺と北西角部はSI-01掘立柱建物跡及びSK-12土坑によって切られているが、平面形は楕円形と推定される。長軸400cm、短軸240cm以上で、上端幅45～100cm、U字形の断面形を呈し、深さ5～22cmの溝が半円形に周溝状に巡る。

SX－８性格不明遺構　１T中央部の緩斜面で検出した。一部撹乱で欠けているが、平面形は不整な三角形を呈する。規模は長軸220cm、短軸116cm、深さ14cmで、断面形は浅い舟底形である。



SX-01

層位	土色		土質	土性 粘性	土性 しまり	備考
1						埋1-2に類似するがやや明るく、しまり極めて強い
1-1	10YR3/3	暗褐	粘土質シルト	あり	あり	砂岩粒及び、炭化粒を含み、しまり強い（基本層Ⅲ層か？）
1-2						埋1-1に類似するが、しまり大で、砂岩粒を多く含む
2-1	10YR4/4	褐	粘土質シルト	あり	強い	しまり極めて強い
2	10YR4/4.5	褐	シルト質粘土	あり	あり	砂岩を含み、少量の炭化粒を含み、しまり強く、岩盤粒は南辺部に集中する
3	10YR3.5/4	暗褐	粘土質シルト			砂岩粒を含み、しまり強く、少量の木炭を伴う
3-1						埋2に類似するが砂岩粒を多く含み、しまり大
4	7.5YR3/4	暗褐	シルト質粘土	あり	あり	炭化粒及び砂岩粒を含み、しまり強い
4-1	7.5YR4/4	褐	粘土質シルト	強い	あり	極大の岩盤を多量に含み、粘性強くややベタつく
5	2.5Y5/3	黄褐	砂質シルト	ややあり	強い	ややグライ化するが、多量の岩盤粒を含み、かたくしまる
6	10YR4/4	褐	粘土質シルト	あり	あり	少量の砂岩粒及び木炭粒を含み、しまり強い
Ⅰ	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	岩盤粒を極わずかに含む
Ⅱ	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト	あり	あり	少量の砂岩粒、炭化粒を含み、しまりあり
Ⅱ-1			粘土質シルト			Ⅱに類似するが、炭化粒を多く含み、やや暗い。しまりあり
Ⅲ	10YR3/2	黒褐	粘土質シルト	あり	あり	炭化粒及び少量の砂岩粒を含み、しまり強い（基本層Ⅲ層？）上部層Ⅲ層より黒色のブロックが少ない
Ⅳ	10YR4/5	褐	粘土質シルト	あり	あり	少量の砂岩粒及び炭化粒を含み、しまり強い。傾斜面にて、Ⅴ層直上のⅣ層よりしまり強い

第20図　Ⅱ区SX-01・06・08性格不明遺構実測図

SX-06

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	1～5㎜程の礫を少量含んでおり、又3㎜以下の細かな粒状の炭化物をわずかに含む
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	3～20㎜（最大直径40㎜）程の礫が層の中央より左上に集中して含まれ、又3㎜以下の細かな粒状の炭化物を極わずかに含んでいる。炭化物は1との境目により多く見られる
3	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	ややあり	粘土が多く含まれた直径90㎜程の土がブロック状に含まれている。又3～10㎜程の礫を数粒含む
4	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	3～7㎜程の礫を数粒含む以外は、土質的にも2、3とほぼ同じ
5	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	1～5㎜程の礫を少量と10～35㎜（最大直径45㎜）程の岩盤ブロックを数個含んでいる、又炭化物を極わずかに含む
6	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	粘性の強い土の混入が見られる。又層中右上部分は5～25㎜程の礫が多く含まれている

SX-08

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	あり	径5～50㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を少量含む層
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径5～30㎜程度の岩盤ブロックを多量に含み、又炭化粒を少量含む層

2）Ⅲ区

Ⅲ区は、Ⅱ区との比高差が30mにも及ぶ深い谷部である。谷筋は傾斜角９度程度で、谷の最奥部から下流側へ順にトレンチ番号１～５Ｔを付し、重機を用いて表土排除を行い、遺構確認調査を行った。

１Ｔ　谷部の最奥部、沢を横切るように南北方向に幅１m、長さ７m、面積約７㎡のトレンチを設定した。表土から１mほどの深さで湧水が激しく、壁崩落の危険があったため、調査を中止した。出土遺物はない。

２Ｔ　１Ｔに平行に、東側下流８mの地点に、南北方向に幅１m、長さ８m、面積約８㎡のトレンチを設定し、沢底まで精査したが遺構は検出しなかった。表土から砥石（Ｌ－３）が出土している。

３Ｔ　２Ｔの東側下流８mの地点に、南北方向に幅５m、長さ９m、面積約45㎡のトレンチを設定し、沢底まで精査した。３・４ＴではＶ字状の沢底の肩部に幅0.5～1.5m程の平坦部を確認し通路の可能性があるが、これ以外の遺構は検出しておらず、不明である。沢底から須恵器坏（Ｅ－３）が出土している。

４Ｔ　沢が土採りによって広く開口する地点、３Ｔの東側下流12mに、南北方向に幅５m、長さ11m、面積約55㎡の不整形のトレンチを設定し、沢底まで精査したが、３Ｔから続く平坦面以外、遺構は検出しなかった。地表に顕在するマウンドがあったが、近年の土採りによって形成された盛り土とみられ、その下層から寛永通宝（Ｎ－５）、表土からは鉄砲玉（Ｍ－３）が出土している。

５Ｔ　４Ｔの東側下流15mの地点に、南北方向に幅５m、長さ１m、面積約75㎡の不整形のトレンチを設定し、沢底まで精査したが遺構は検出しなかった。表土から縄文土器、土師器、磁器椀（Ｊ－５）を出土している。

3）Ⅳ区

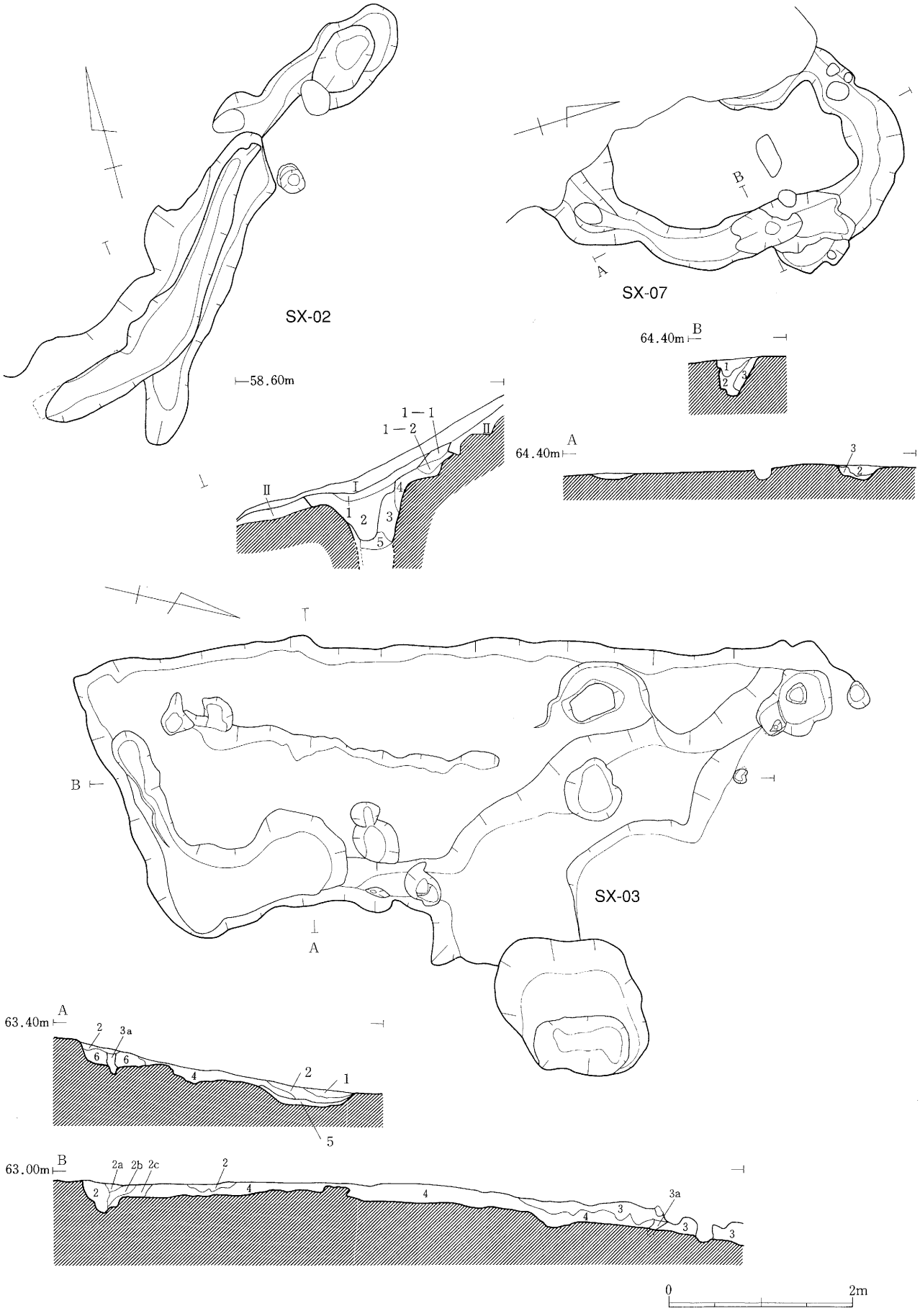
調査対象区北側の尾根の南斜面に幅14m、長さ20m、面積約260㎡の調査区を設定した。十字形に地層観察用のベルトを残し、調査区を４区画、１～４Ｔに分け、表土（Ⅰ層）、旧表土層（Ⅱ層）を除去し、Ⅲ層上面で遺構確認調査を行った後にベルトを撤去し、Ⅳ層上面の精査を行った。

１Ｔから２Ｔにかけて、調査区北端にあたる現況で尾根の「背」となる最高所、及び、調査区の東端は、かつての土採りで削り残された斜面の縁辺で、急傾斜の崖面となっており、幅1.2m、高さ0.2～0.4mほどの塁状の高まりが巡る。

調査区中央、３Ｔから４Ｔにかけて緩やかな斜面に沿って、南西側の林から北東方向に斜上していく、幅0.3～0.6mほどの通路状の平坦面を確認したが、近年まで利用されていた踏み跡とみられる。

Ⅲ層上面の調査では、調査区全面に不作為に分布するピット135個を検出した。ピットの組合せから建物跡や柱列などの遺構となる可能性を見出すことはできなかった。

Ⅳ層上面の調査では、土坑８基、性格不明遺構３基のほか、ピット103個を検出した。



第21図　Ⅱ区SX-02・03・07性格不明遺構実測図

SX-02

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
Ⅰ	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	5㎜大の岩盤礫を極わずかに含む
Ⅱ	10YR3/3	暗褐	シルト	なし	ややあり	50㎜大の砂岩を北側傾斜面に極わずかに含む
1	10YR3/2	黒褐	シルト	なし	ややあり	基本層3層の黒色土を多量に含む
1-1	10YR3/3	暗褐	シルト	なし	ややあり	1に類似しているが褐色が強い
1-2	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	1-1に類似しているが、黄褐色の粒状の砂岩を含む
2	10YR2/2	黒褐	シルト	ややあり	ややあり	縄文土器片を含む、又5㎜大の岩盤礫を極わずかに含む。他の層に比べて黒色が強い層（基本層の3層）
3	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	10㎜大の岩盤礫を極わずかに含む
4	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	30㎜大の岩盤（基本層の5層）
5	10YR4/4	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	2、3よりも明るい層

SX-07　A

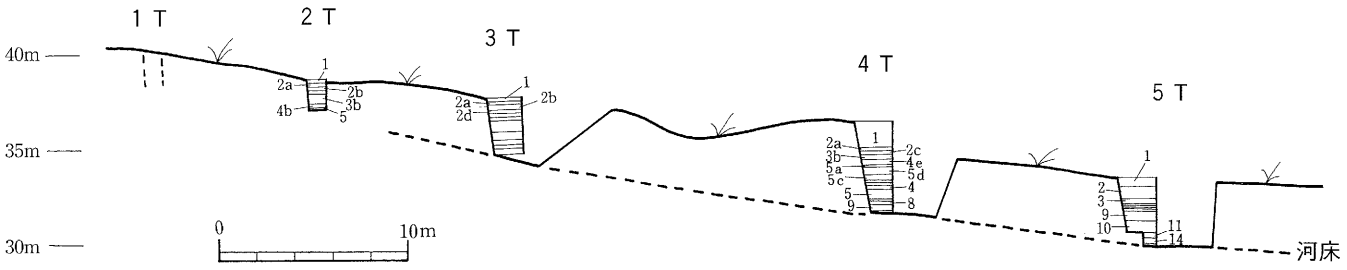
層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を極わずかに含む層
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を少量含む層
3	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	あり	直径2～5㎜程度の岩盤ブロックと炭化粒を少量含む層

SX-07　B

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2～10㎜程度の岩盤ブロックと直径2～10㎜程度の炭化物を少量含む層
2	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径1～40㎜程度の岩盤ブロックを多量に含み直径5㎜程度の炭化物を少量含む層でその中に直径5㎝程度の礫が見える
3	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	あり	直径2～5㎜程度の炭化物を極わずかに含む層

SX-03

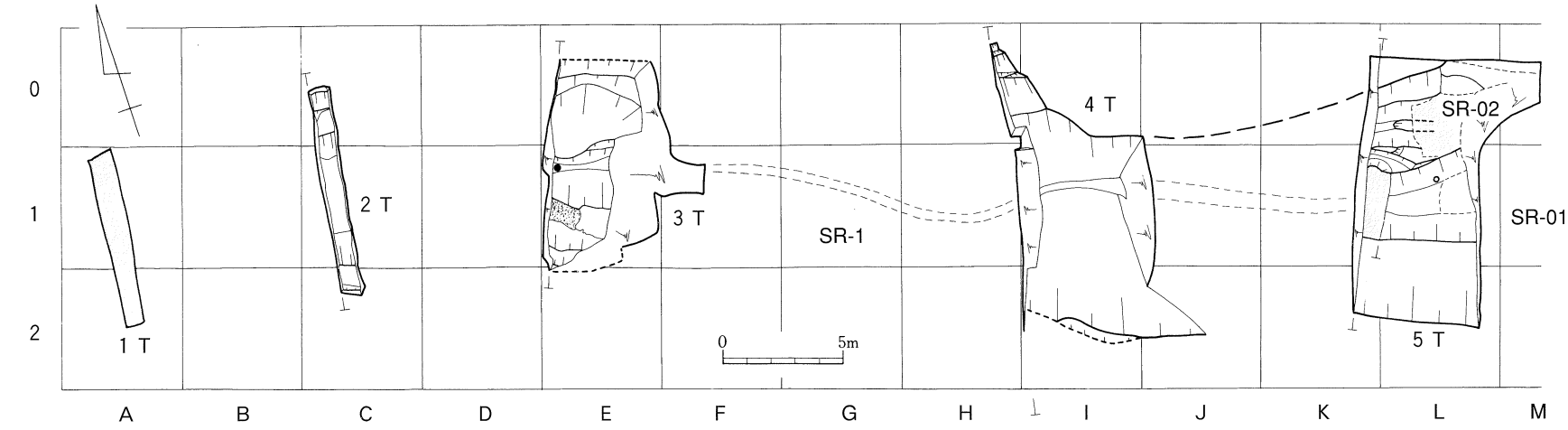
層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	3㎜以下程の細かな礫をわずかに含む以外は、混じり気の少ない土層
2	10YR4/4	褐	シルト	なし	ややあり	全体的に5㎜以下の小さな礫をわずかに含み、図中a部分には20㎜程の砂岩ブロックを3つ含む
2a	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	10～35㎜程の砂岩ブロックを数個含んでおり、炭化物を極わずかに含む。土質は2と同じ
2b	10YR5/6	黄褐	シルト	ややあり	ややあり	40㎜程の砂岩ブロックを1つと5～20㎜程の礫をわずかに含む。土質は2に極めて近いが、やや粘性がある
2c	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	5㎜以下程の小さな礫をわずかに含んでいるが、中央より下部には全く含まれない。土質は2ｂとほぼ同じ
3	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	5～15㎜程の礫をわずかに含み、又図中B部分には10～60㎜（最大直径80㎜）程の大きめの礫を多量に含む（東側斜面に土器含む）
3a	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	10～20㎜程の砂岩ブロックをわずかに含む。大きめの礫が含まれないことをのぞけば土質的にも3とほぼ同じ
4	10YR5/6	黄褐	シルト	ややあり	ややあり	全体的に3～10㎜程の以下の小さな礫が含まれる。又図中a部分に3の混入が少量見られ、その部分に1～40㎜程の砂岩ブロックを少量含む
5	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	3㎜以下程の細かな礫をわずかに含まれている。土質は2とほぼ同じ
6	10YR5/4	鈍い黄褐	シルト	なし	ややあり	5に比べ30～40㎜（最大直径50㎜）程の礫が少量含まれている。土質は5と同じ

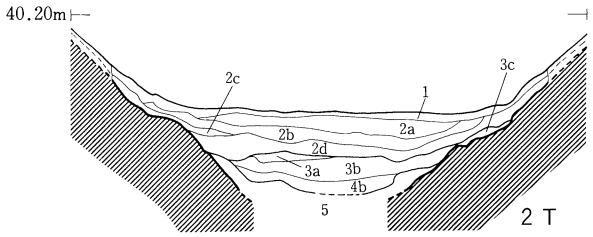


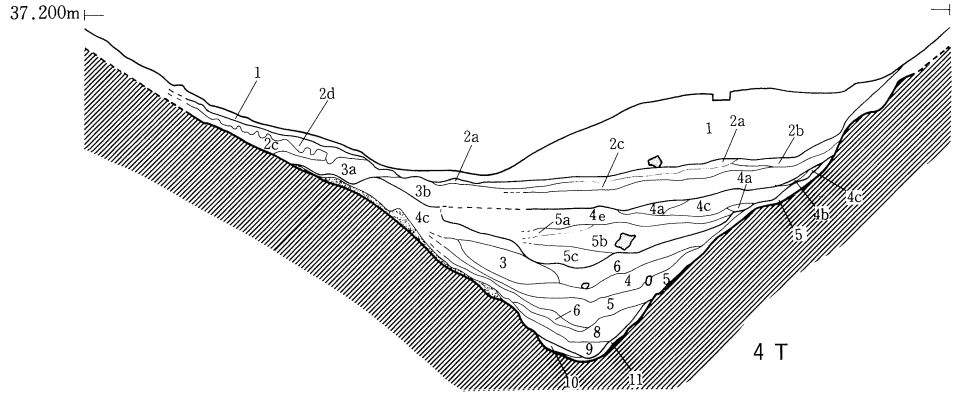
第22図　Ⅲ区調査区図

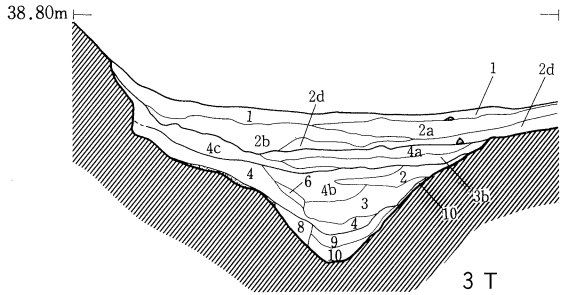
Ⅲ区　2T

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	現表土層。植物の根を多く含み、岩盤細片を含む
2a	10YR3/4	暗褐	砂質シルト	ややあり	なし	1層よりも岩盤礫を多く含み、上流からの流入層か。1層よりやや明るい
2b	7.5YR3/2	黒褐	粘土質シルト	あり	ややあり	2a層よりも緻密な層で、若干の岩盤細片を含む。水性堆積層か
2c	10YR4/4	褐	砂	なし	なし	壁からの崩落層で、茶褐色シルトブロックを含む。3ｃ層と類似
2d	10YR4/3	鈍い黄褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	2b層よりも岩盤破片を多く含み、両壁からの崩落土の可能性あり
3a	2.5I3/3	暗オリーブ褐	砂質シルト	ややあり	なし	3ｂよりも明るく、粒の大きな岩盤細片を多く含む。2ｄの漸移層か
3b	10YR2/1	黒	砂質シルト	あり	ややあり	黄褐色の岩盤細片を含み、水平堆積。ある時期の表土層と考えられる
3c	10YR4/4	褐	砂	なし	ややあり	黄色岩盤（砂岩）の大ブロックを含み、基本層（砂岩）の風化層か、崩落層
4a	2.5Y4/4	オリーブ褐	砂質シルト	ややあり	なし	4ｂよりも細かな岩盤礫を含み、3Tのみに分布
4b	10YR3/4	暗褐	砂	なし	弱い	黄褐色の岩盤破片を大量に含む。上流からの流入層か
5	7.5Y3/1	オリーブ黒	砂質シルト	あり	弱い	グライ化し壁からの崩落土層の自然堆積層
4c	10YR4/4	褐	砂質シルト	ややあり	あり	2ｂ層よりも大きな岩盤ブロックを含み（100㎜直径大）壁からの崩落土もしくは整地層か









第23図　Ⅲ区調査区実測図

3T

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	2.5Y3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	直径5～10㎜程度の岩盤ブロックを多量に含む層
2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	ブロックを極わずかに含む均質な層
3	5Y2/2	オリーブ黒	粘土質シルト	ややあり	ややあり	北側に進むにつれて、10YR3/3の色が出てくる
4	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	ややあり	直径20～50㎜の岩盤ブロックを多量に含む、崩落土と思われる
5	10YR4/4	褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	直径20～50㎜程度の岩盤ブロックを極わずかに含む
6	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	5層に類似しているが、それと比べてブロックを多く含む層
7	10YR5/6	黄褐	粘土	あり	あり	直径10～50㎜の岩盤ブロックを多量に含む崩落土
8	5Y3/1	オリーブ黒	粘土質シルト	ややあり	なし	直径5～20㎜の岩盤ブロックを少量含む層
9	5Y2/2	オリーブ黒	シルト	なし	なし	ブロックを含まない均質な層
10	5Y3/1	オリーブ黒	シルト	なし	なし	ブロックが入らない均質な層であるが上部に比べて下部の方がグライ化が激しく、ねずみ色が強い

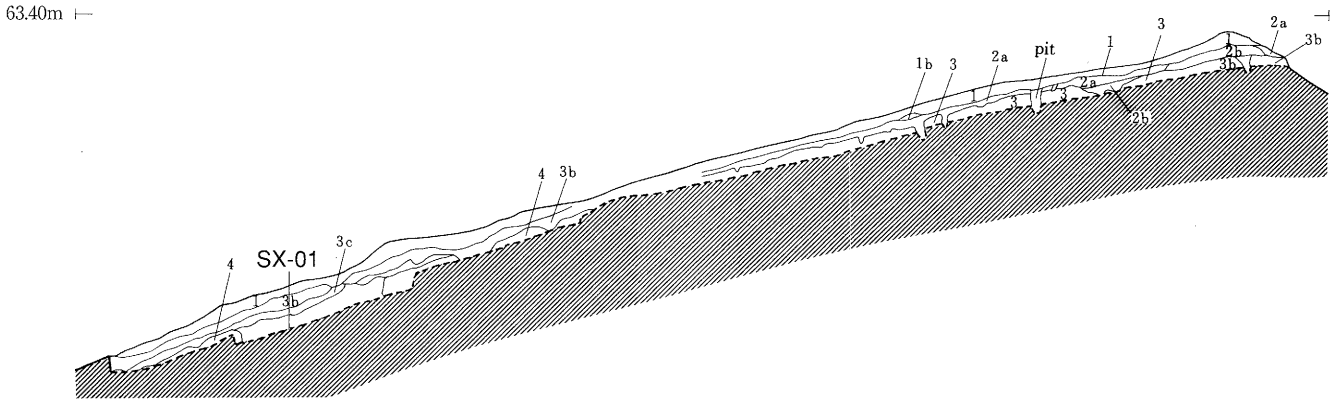
4T

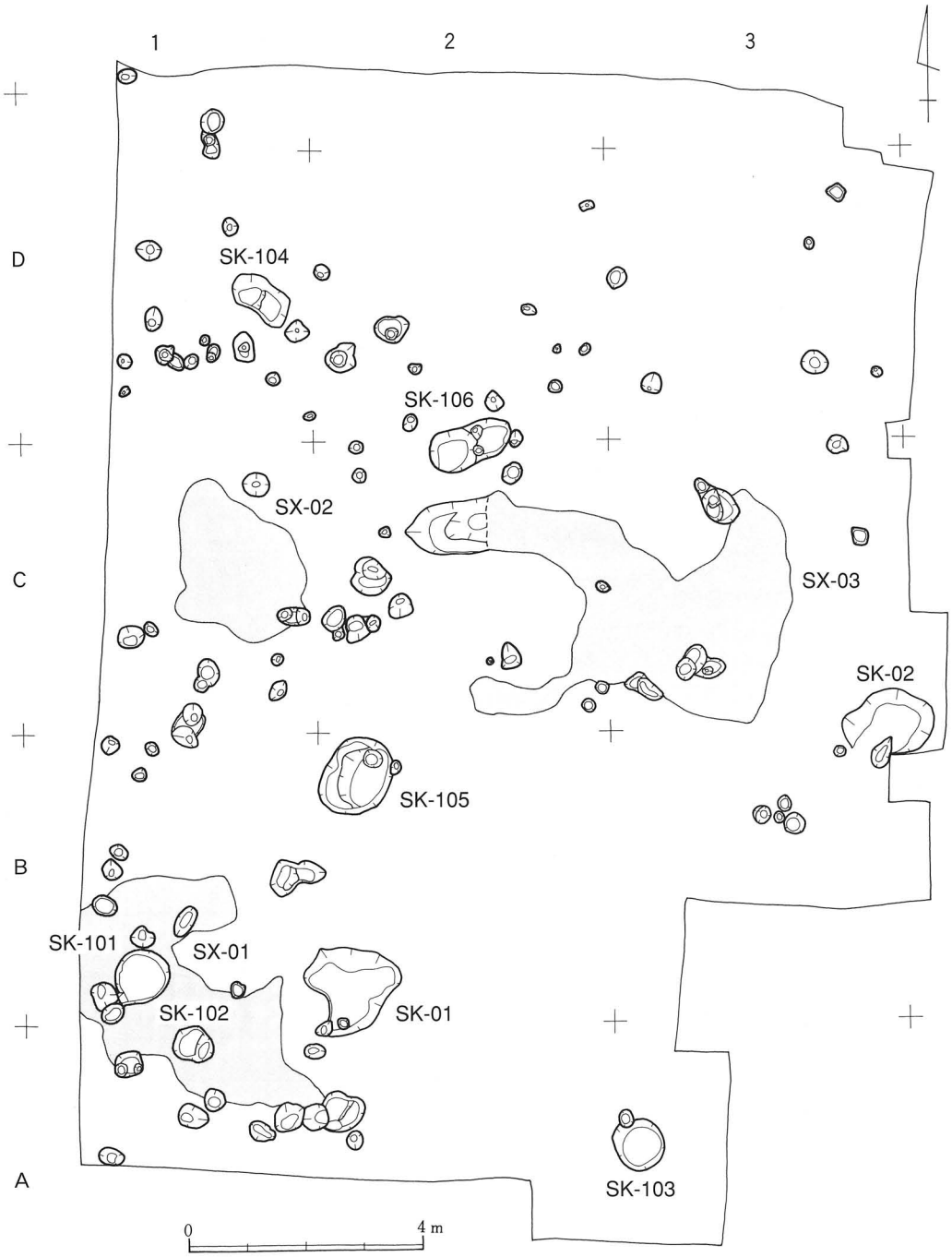
層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	5YR3/2	暗赤褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	沢の開口部を閉塞させる施設か。但し4T南側までこの層は分布しない。2.5Y5/6黄褐色砂と岩盤ブロック（直径3～30cm）を多量に含み、4T付近でマウンド状に盛土されている
2a	7.5YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	1層との層離面がややグライ化し均質に10cm前後の厚さでほぼ水平に堆積している
2b	7.5YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	均質なシルト層でブロック含まず。崩落土と思われる
2c	7.5YR4/3	褐	シルト	ややあり	ややあり	直径5～30㎜大の粒子（小礫）を多く含む
3b	7.5YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	2ｃよりも大きな岩盤ブロック（直径5～20cm大）と2ｃ同様岩盤粒子を多く含む層
4a	7.5YR3/3	暗褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	細かい岩盤粒子（3㎜大）を含む
4c	7.5YR4/4	褐	砂	なし	ややあり	4aよりも明るく、礫（3～10㎜大）を含む
4d	7.5YR4/4	褐	砂	なし	ややあり	4aよりも暗く、4ｂよりも崩落ブロックを多く含む
4e	7.5YR3/1	黒褐	シルト	ややあり	ややあり	5～50㎜大の礫を含む。4aよりも明らかに黒い
4f	7.5YR4/4	褐	砂	ややあり	ややあり	3～5cm大の礫を含む
2a	7.5YR3/4	暗褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	3cm大の礫を含む明るい層
2e	7.5YR4/6	褐	砂	なし	ややあり	2～8cm大の礫を多く含む
3a	10YR3/4	暗褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	2～5cm大の礫を含む
4b	7.5YR4/3	褐	砂質シルト	なし	ややあり	直径5㎜前後の岩盤粒子を含む。崩落土
5a	7.5YR4/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	直径20～50㎜大の岩盤ブロックを含む
5b	7.5YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	直径50～300㎜の岩盤ブロックと細かな直径5㎜大の岩盤粒子を多く含む
5c	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	なし	直径10～100㎜大の岩盤ブロックを大量に含み、5層よりも均質な層
6	10YR3/3	暗褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	5層と異なり、ブロックをほとんど含まない。凹部中央のみブロック混入
7a	7.5YR4/3	褐	シルト	ややあり	ややあり	均質なシルト層でブロック含まず。
7b	7.5YR3/4	暗褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	直径10㎜前後の礫を含む。上流からの流入か、または人為的な操作の加ったものか。他層に比して極めて明るい層である。100㎜大のブロックをわずかに含む
8a	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	壁面からの崩落層（旧表土か）
8b	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	8aよりもやや明るい
9	10YR5/4	鈍い黄褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	ブロックをほとんど含まない均質な層
10	10YR5/3	鈍い黄褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	ブロックをほとんど含まない均質な層
11	10YR3/3	暗褐	粘土	あり	ややあり	ブロックをほとんど含まない均質な層

5T

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	直径10～100㎜程度の岩盤ブロックを少量不規則に含む層。最近の工事による土盛りと考えられる
2	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	直径5～20㎜程度の岩盤ブロックを含み、上の層に比してかなり均質な層
3	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	2層よりも岩盤ブロック（5～20㎜）を多く含み、黒色の強い層。5㎜程度の炭化物をわずかに含む。2、3層は人為的な埋土と思われる
4	10YR3/3	暗褐	粘土	あり	ややあり	直径5～20㎜程度の岩盤ブロックをわずかに含むだけの均質な層である
5	10YR3/3	暗褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	直径5～20㎜程度の岩盤ブロックを大量に含む砂質の層である
6	10YR3/2	黒褐	粘土	あり	ややあり	4層よりも岩盤ブロック（5～20㎜）を多く含み、黒みが強い層である
7	10YR5/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	ややあり	直径50～200㎜程度の岩盤ブロックを多量に含む、周囲の層よりも明るい層である。人為的な盛土と考えられる
8	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	直径5～30㎜程度の岩盤ブロックを少量含み10㎜程度の炭化物を含む
9	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	直径10～50㎜程度の岩盤ブロックを含み、炭化物をわずかに含む砂と粘土の混合層
10	10YR3/3	暗褐	砂質シルト	あり	ややあり	9層に類似しているが、多少目が粗い層。又70㎜程度の岩盤ブロックをわずかに含む
11	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	直径5～20㎜程度の岩盤ブロックをわずかに含む。上の2つの層に比して均質で明るい層
12	10YR5/4	鈍い黄褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	直径50～200㎜程度の岩盤ブロックを大量に含む。南側斜面に近づくにつれ徐々に目が細かくなっていく。崩落層
13	10YR4/4	褐	粘土	ややあり	ややあり	直径50㎜程度の岩盤ブロックを少量含む層
14	10YR5/6	黄褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	ブロックを含まない均質な層。崩落土と思われる
15	10YR4/6	褐	砂質シルト	ややあり	あり	直径50㎜程度の岩盤ブロックを少量含む層。非常にしまりがある。崩落土と思われる
ア	10YR5/4	鈍い黄褐	粘土質シルト	ややあり	あり	ｇ層と同様のものである
a	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	直径20～70㎜程度の岩盤ブロックを多量に含む層。a、ｂ、ｃ層とも人為的な埋土か？
b	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	a層と類似しているがa層よりも大きい岩盤ブロック（50～100㎜）を含む
c	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	a、ｂ層と類似しているが、それらと違い岩盤ブロックをあまり含まない層
d	10YR4/3	鈍い黄褐	砂質シルト	ややあり	ややあり	岩盤ブロックがほとんど見られない層。崩落土と思われる
e	10YR5/4	鈍い黄褐	粘土質シルト	ややあり	あり	直径30～80㎜程度の岩盤ブロックを多量に含む層。非常にしまりがある
f	10YR4/3	鈍い黄褐	シルト	ややあり	ややあり	細かい岩盤ブロック（10～20㎜）を多量に含む層
g	10YR5/4	鈍い黄褐	粘土質シルト	ややあり	あり	e層よりも岩盤ブロックを多く含む。非常にしまりがある

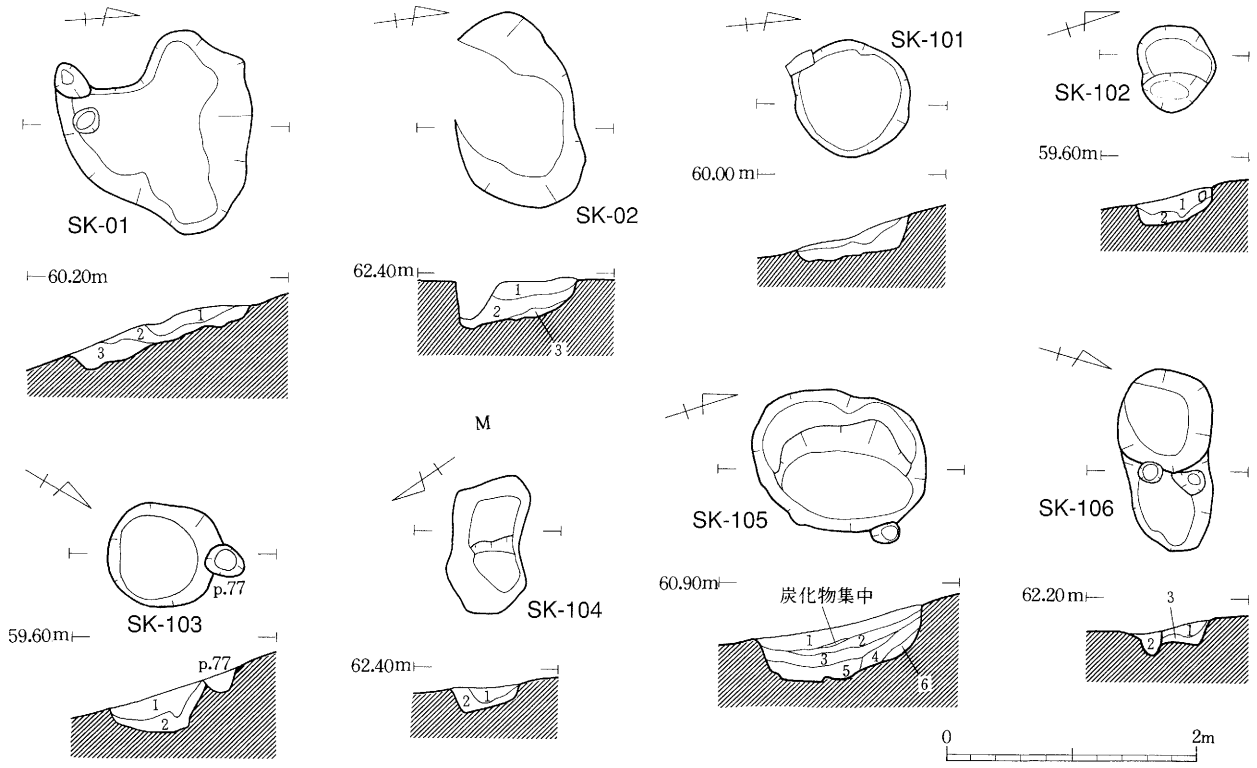
第24図　Ⅳ区調査区実測図（Ⅲ層上面）





第25図　Ⅳ区調査区実測図（Ⅳ層上面）

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	なし	表土
2b	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	あり	土塁構築土（盛土）
2a	10YR3/2	黒褐	シルト	ややあり	なし	旧表土もしくは、それの崩落流れ土。土師器、縄文土器の包含層
3a	10YR4/4	褐	シルト	なし	あり	
3b	10YR5/3	鈍い黄褐	シルト	なし	あり	基本層（第1検出面）岩盤ブロック（5～10㎜大）を含む。縄文土器、包含層
4	10YR5/3	鈍い黄褐	シルト	なし	あり	基本層（第2検出面）3b層より明るく岩盤との漸移層ブロック大
SX-01	10YR3/2	黒褐	シルト	なし	あり	50～100㎜大のブロック混入



第26図　Ⅳ区土抗実測図

SK-01

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR2/3	黒褐	シルト	なし	ややあり	1層目南1/3に、10YR2/2黒褐が入っている。炭化物を極わずかに含む
2	7.5YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	炭化物を極わずかに含む。中央下部に直径10～30㎜の砂岩ブロックを含む
3	7.5YR3/2	黒褐	シルト	ややあり	ややあり	全体的に均質な層であるが、中央下部に直径60～70㎜の砂岩ブロックを含む

SK-02

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	木の根が多い。炭化物を極わずかに含む
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	北半分の部分に直径5～10㎜の小石を含む
3	10YR5/6	黄褐	粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を極微量含む。直径10㎜弱の砂岩ブロックを含む

SK-101

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	全体的に直径10～20㎜の風化した礫を含む
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	炭化物を極わずかに含む。直径30～40㎜の風化した礫を含む

SK-102

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	全体的に10～30㎜の風化した礫を含む。北壁に拳大の礫を含む
2	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	あり	炭化物を極わずかに含む。北壁に直径20㎜の礫を含む

SK-103

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	あり	炭化物の粒を多く含む。風化した細かな礫を全体的に含む
2	10YR5/6	明褐	シルト	ややあり	あり	中央部分に風化した細かな礫をわずかに含む。10YR3/4がブロック状に混入している

SK-104

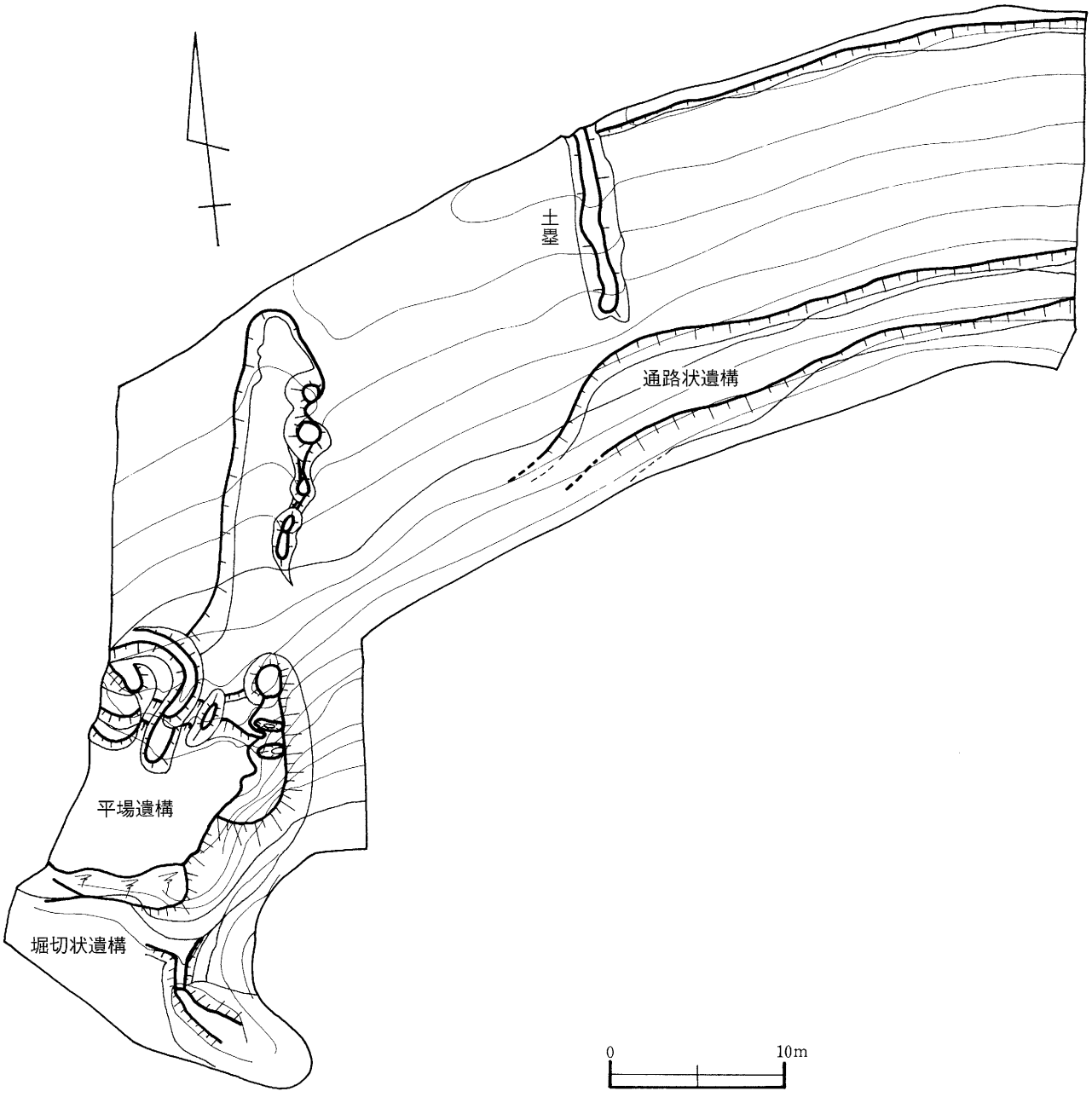
層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	根が多い。風化した礫の粒が全体的に含まれる
2	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	あり	北壁に直径10～20㎜の風化した礫を含む。南壁下部に直径40㎜程度の礫のブロックを含む

SK-105

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR3/4	暗褐	シルト	なし	ややあり	下層面に炭化物の集中が見られる。風化した礫の細かな粒が含まれる
2	10YR4/4	褐	シルト	ややあり	ややあり	炭化物が極わずかに含まれる。風化した礫の粒が含まれる
3	7.5YR4/3	褐	シルト	ややあり	ややあり	炭化物が極わずかに含まれる。層の北側に直径40㎜の礫が含まれる
4	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	ややあり	全体に直径1～2㎝の礫が含まれる
5	10YR3/3	暗褐	シルト	ややあり	ややあり	炭化物が極わずかに含まれる。下層部に直径50㎜程度の礫を含む
6	10YR5/6	黄褐	シルト	ややあり	なし	炭化物を極わずかに含む

SK-106

層位	土色		土質	土性		備考
				粘性	しまり	
1	10YR4/6	褐	シルト	ややあり	ややあり	砂岩ブロックを含む。炭化物を極わずかに含む
2	10YR5/8	黄褐	シルト	ややあり	ややあり	均質な層。風化した細かな礫の粒を含む
3	10YR3/2	黒褐	シルト	なし	なし	土壌内のピット。10YR4/6が少量混入している。炭化物を極わずかに含む



第27図　Ⅴ区現況略測図

8基の土坑は、緩やかな斜面に不規則に分布し、平面形が円形、楕円形もしくは不整形を呈し、深さは10～60cm、一部の遺構は堆積土に炭化物を含む。SK－103から縄文土器を出土している。3基の性格不明遺構は、いずれも平面形が不整形で、しまりのない黒色土を堆積土にもち、人為的な掘り込みとは認めがたい。

4）Ⅴ区

Ⅳ区の西側の雑木林は、今回の工事対象外の区域であるが、自然地形とは異なり、中世城郭である笹森城を構成する人工的な遺構である可能性が高い地形が観察されたため、現況で地表顕在の地形について、城館に関わる遺構の可能性を検討した。

Ⅲ区とした谷地形の源流部は急激にⅣ区側へ屈曲し、幅5m程の「堀切」状の窪みに変化し、Ⅱ区とⅣ区の尾根の連結が遮断されている。この「堀切状遺構」は、落差が4mほどに垂直近く切り立ち、屈曲部分は人工的にL字形をなしている。その上部には平場を有し、周辺には土塁状の高まりや通路状の平坦部分もあって、「虎口」や「切通し」といった性格を有する遺構の可能性が認められる。

5）Ⅵ区

Ⅱ区の東側、尾根の東端部には、3段の段状をなす平場が認められた。1段目の平場はⅡ区の平坦な尾根に連続しており、2段目の平場はⅡ区の3号平場状遺構に延び、途中で1段下の通路状遺構と連結するものと推定される。2段目と3段目の平場の間には岩盤を切出して積上げた「石積み」の可能性がある箇所が認められた。尾根の先端東側と北側は土採りで削平されている。

2．出土遺物

出土した遺物には、縄文土器、土師器、土師質土器、須恵器、瓦質土器、瓦、土製品、磁器、石器、石製品、金属製品、古銭などがある。

【縄文土器】　縄文土器156点を出土した。

Ⅱ区から145点、Ⅲ区から1点、Ⅳ区から10点出土しており、24点を図示した。

A－33・34・39・40・43深鉢は、「縄文条痕土器」で胎土に繊維を含んでいる。A－34は頸部の破片で、斜行沈線により幾何学的文様を描出していると推定され、太白区北前遺跡などに類例がある。早期末の土器である。

A－9・13・24・26・32・41・42は、中期から後期にかけての土器で、粗製の深鉢が多く認められる。A－24は大木10式、A－32は大木8a式である。A－26深鉢は内面に格子状沈線があり、後期前半とみられ、太白区下ノ内浦遺跡や山口遺跡などに類例がある。A－13浅鉢は肥厚した口縁部上端に櫛歯状文が施され、口縁部上半に沈線で区画された幅広い無文帯があることから、後期中葉頃、宝ヶ峰式とみられる。A－41とA－42は同一個体となる可能性がある。

出土した縄文土器の中でも遺存状態が良いA－2深鉢とA－3深鉢や、A－21浅鉢は、波状口縁や平行沈線などが認められ、晩期後葉の土器とみられる。

【弥生土器】　弥生土器2点をⅡ区の表土・耕作土から出土した。

B－1とB－2の2点とも甕または壺の破片で、肥厚する口縁部に交互刺突文などが認められることから、弥生後期、天王山式である。

【土師器】　土師器31点を出土した。

Ⅱ区から20点、Ⅲ区から1点、Ⅳ区から10点出土している。

【土師質土器】　土師質土器44点を出土した。

Ⅱ区から29点、Ⅲ区から1点、Ⅳ区から14点出土している。

【須恵器】　須恵器3点を出土した。

E－01甕は、Ⅱ区1TⅢ層から出土し、体部の一部に自然釉がみられる。E－03坏は、Ⅲ区3T河川から出土し

たロクロ調整、底部回転糸切りで、口径10.6cm、器高3.4cm、底径4.6cmほどの残存1／8の破片である。他にⅡ区4T表土から甕の体部破片を1点出土している。

【瓦質土器】　瓦質土器1点を出土した。

F－01は、Ⅱ区1Tで表採した瓦質土器で鉢の破片とみられる。

【瓦】　瓦2点を出土した。

G－02は、Ⅳ区1Tで表採した平瓦または桟瓦の破片で、焼成は良好である。Ⅱ区1T表土からは平瓦もしくは桟瓦の破片G－01を出土している。

【土製品】　土玉1点を出土した。

H－01土玉は、Ⅱ区から表採で出土し、直径14mm、重さ2.7g、面取りされた球形の粘土玉で、鉄砲玉の可能性がある。

【陶器】　陶器2点を出土した。

Ⅱ区1T表土から甕、Ⅱ区7T表土から盃の破片を出土している。

【磁器】　磁器4点を出土した。

J－01碗は、Ⅱ区5Tと6Tから出土し、口縁部が外反気味に立ち上がる碗で、外面に牡丹文、見込に寿字文が描かれ、口径12.6cm、器高7.2cm、高台径4.4cmを測る。平清水焼とみられる。他にⅡ区1Tから白磁Ⅲ2点、Ⅲ区5Tから碗を1点出土している。

【石器】　石器9点を出土した。

Ⅱ区から8点、Ⅳ区から1点出土している。二次加工のある剥片や剥片6点を図示した。

【石製品】　石製品4点を出土した。

L－01砥石は、Ⅱ区3TⅠ層から出土し、長さ88mm、幅28mm、厚さ21mm、重さ122.1gを測り、3面に使用痕が認められ、粘板岩製である。

L－02砥石は、Ⅱ区3T3号平場遺構から出土し、粘板岩製である。

L－03砥石は、Ⅲ区2T北斜面のⅠ層から出土し、長さ134mm、幅45mm、厚さ21mm、重さ333.8gを測り、上下2面に使用痕が認められ、砂岩製である。

他にⅡ区6T表土から砥石を1点出土している。

【金属製品】　金属製品3点を登録した。

M－01笄は、Ⅱ区6T土塁状遺構の構築土から出土し、青銅製で、全長21.0cm、最大幅14mm、厚さ3mmを測る。幅4mm、長さ1.4cmの耳掻部の肩部から胴部にかけて渦巻文と直線文の彫文があったが、X線撮影等では金などの象嵌は確認できなかった。

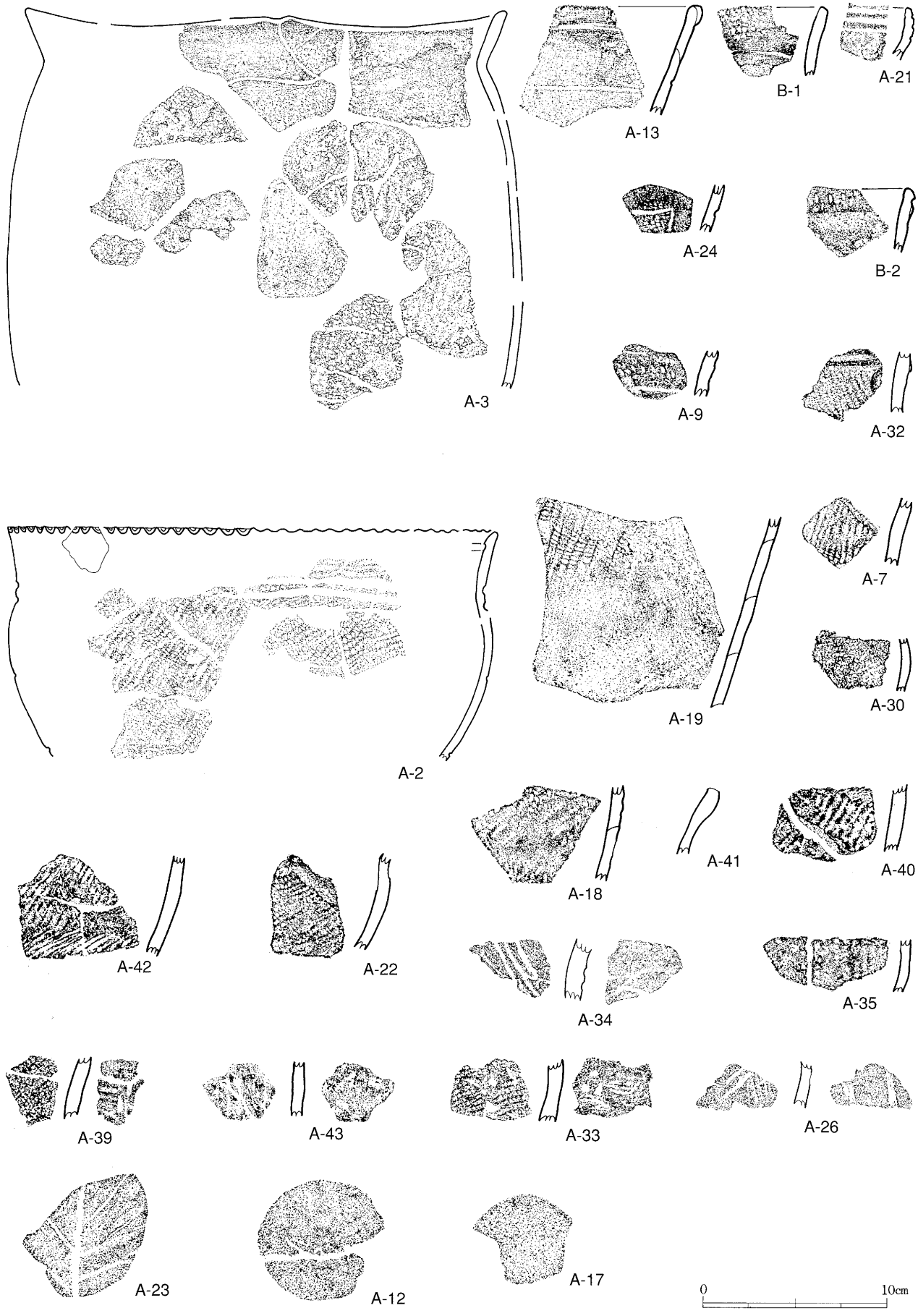
M－02鉄製品は、Ⅱ区6Tの北斜面表土層から出土した断面形が長方形で板状を呈し。頭部が打撃によると思われる変形を生じ、先端部は薄く面取りされ、湾曲する。最大幅12mm、長さ68mm、厚さ8mm、重さ27.5gを測り、クサビの可能性がある。

M－03鉄砲玉は、Ⅲ区4T表土から出土し、直径が11.50～13.91mm（平均12.50mm）、重量が11.2g、表面が白色化し、全周を幅4～5mm幅で帯状の擦痕が巡り、歪んだ球形を呈す金属製品は、電子比重計での測定の結果、鉛の比重11.3に近い比重10.8の値を示した。また、砲弾とすれば、三匁玉ないしは三匁五分玉の直径にあたる12.28～12.93cm、鉛1匁を3.758gとした場合の三匁玉ないしは三匁五分玉の重量11.27～13.15gに近似することから、経年変化で表面に錆が生じた鉛製の火縄銃弾とみられ、歪みは着弾によって生じた可能性が考えられる。

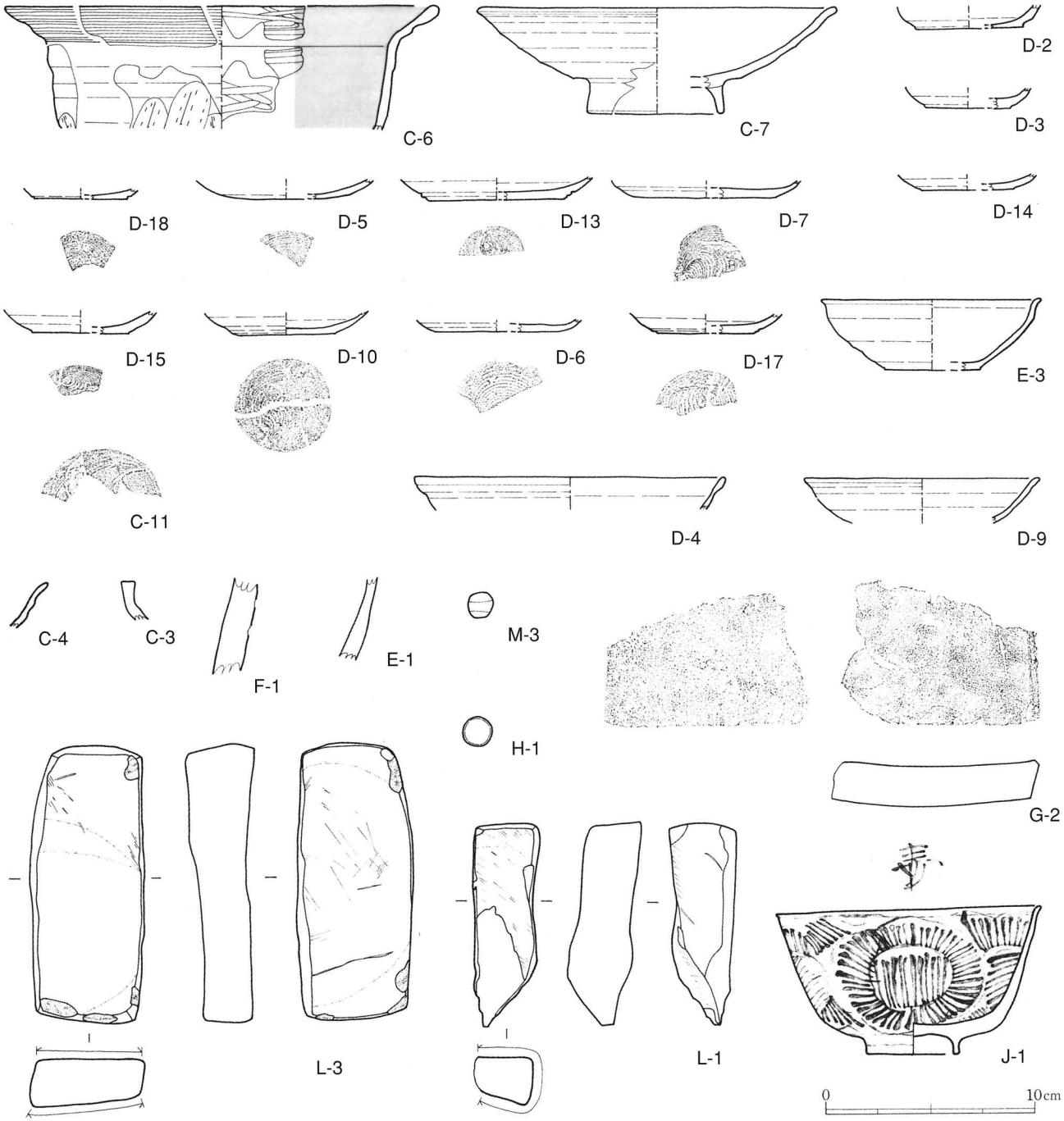
M－01笄とM－03鉄砲玉の成分分析については、釜石文化財保存処理センターの報告による。

【古銭】　古銭5点を出土した。

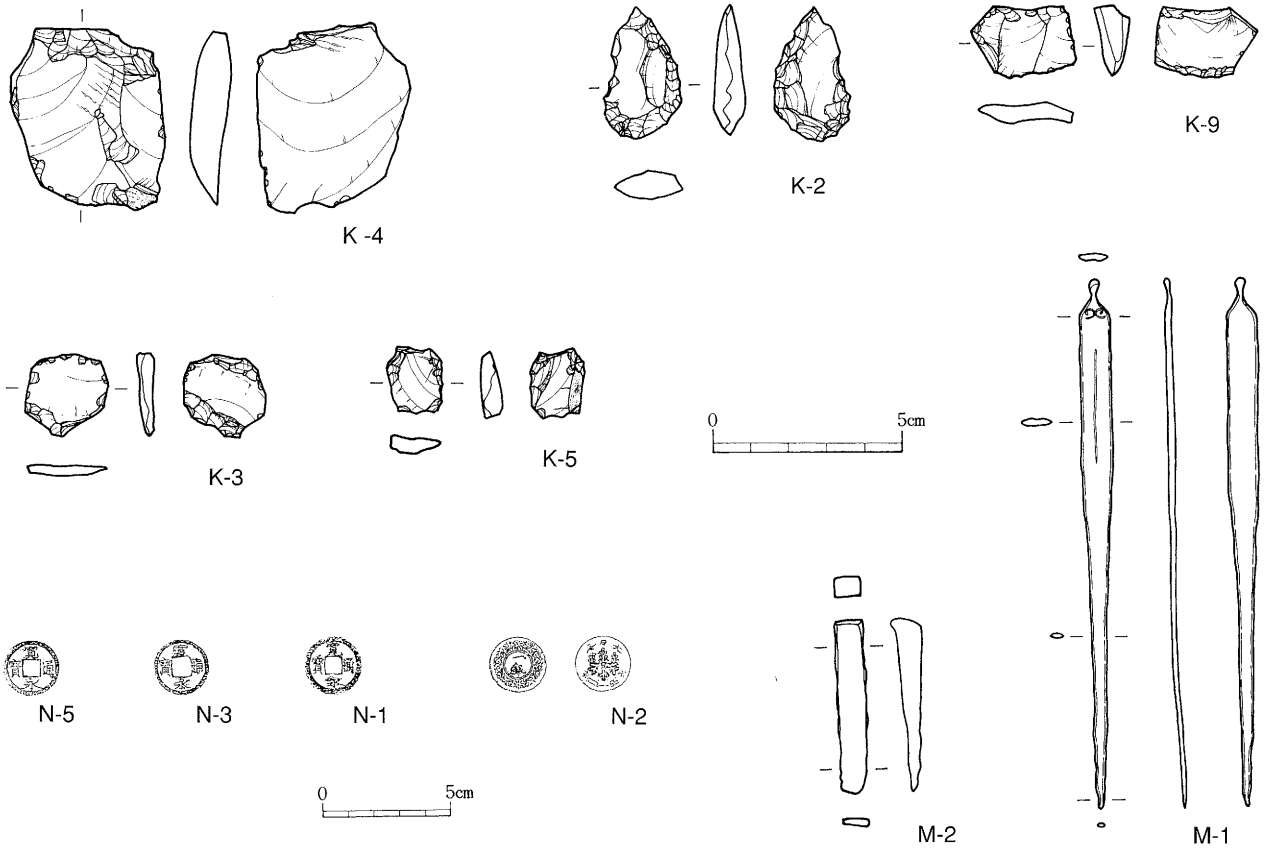
Ⅱ区1Tから寛永通宝3点と大正12年（1923）の桐一銭銅貨1点を、Ⅲ区から寛永通宝1点を出土している。



第28図　出土遺物　実測図１



第29図　出土遺物　実測図２



第30図　出土遺物　実測図３

出土遺物観察表

第28図

登録番号	種別	器種	出土地区・遺構・層位				文様・施文		備考	図版番号
			区	トレンチ	遺構	層位	外面	内面		
A－2	縄文土器	浅鉢	Ⅱ			表採	小波状口縁、頸部に平行沈線2条、体部に結節R縄文（2列）、LR縄文	沈線1条、ミガキ	口径27.6cm　器高（12.6cm）	13—2
A－3		深鉢	Ⅱ	5T		Ⅰ層	波状口縁、LR縄文	ミガキ	口径27cm　器高（20.8cm）	13—1
A－13		浅鉢	Ⅱ	5T		Ⅰ層	肥厚した口縁部上端に櫛歯状文、口縁部上半は平行沈線2本で区画、ミガキ	ミガキ		13—3
B－1	弥生土器	甕or壺	Ⅱ	1T		Ⅱ層	やや肥厚した口縁部上端に刺突文、ミガキ	ミガキ		13—4
A—21		浅鉢	Ⅱ	5T	試掘	Ⅰ～Ⅲ層	口縁部沈線1条、半行沈線3条、ミガキ	ミガキ	外面摩滅	13—5
A—24		深鉢	Ⅱ	1T	南斜面	Ⅰ層	LR縄文→沈線（横位・縦位）、磨消縄文（ミガキ調整）			13—6
B—2	弥生	甕or壺	Ⅱ	1T		Ⅰ層	肥厚した口縁部に交互刺突、頸部RL縄文			13—7
A—9		深鉢	Ⅱ	6T		Ⅰ層	沈線、刺突、隆帯			13—12
A—32		深鉢	Ⅱ	7T		Ⅰ層	隆線文、LR縄文	ミガキ		13—13
A—19		深鉢	Ⅱ	5T		Ⅲ層	LR縄文	ミガキ	内外面炭化物付着	13—8
A—7		深鉢	Ⅱ	5T		Ⅰ層	LR縄文	ミガキ		13—9
A—30		壺	Ⅱ	9T	SX－01	8層	LR縄文、結節R縄文	ミガキ		13—16
A—42		深鉢	Ⅱ	6T		Ⅰ層	L縄文	ミガキ	A－41と同一個体か	13—15
A—22		深鉢	Ⅱ	1T	2号平場	Ⅰ層	LR縄文	ミガキ	炭化物付着	13—17
A—18		深鉢	Ⅱ	2T			LR縄文			13—10
A—41		深鉢	Ⅱ	6T		Ⅰ層	ミガキ	ナデ	A－42と同一個体か	13—11
A—40		深鉢	Ⅳ		Z3グリッド	4層	LR縄文	条痕文	繊維混入	13—14
A—34		深鉢	Ⅱ	10T		Ⅲ層	3条の斜行平行沈線、刺突文	条痕文	繊維混入	13—19
A—35		深鉢	Ⅱ	1T		Ⅱ層	縄文（原体不明）	ミガキ		13—18
A—39		深鉢	Ⅳ		Z1グリッド	4層	LR縄文	条痕文	繊維混入	13—20
A—43		深鉢	Ⅱ	7T		表採			繊維混入	13—21
A—33		深鉢	Ⅱ	1T		Ⅳ層	LR縄文	条痕文	繊維混入	13—22
A—26		深鉢	Ⅱ	1T		Ⅱ層	沈線（2条）、撚糸文R	格子状沈線		13—23
A—23		底部	Ⅱ	5T	SK－101	底面	底部木葉痕			—
A—12		底部	Ⅱ	6T		Ⅰ層				—
A—17		底部	Ⅱ	6T		Ⅰ層				—

第29図

登録番号	種別	器種	出土地区・遺構・層位				器面調整		備考	図版番号
			区	トレンチ	遺構	層位	外面	内面		
C—6	土師器	甕	Ⅳ	4T		Ⅰ層	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ後ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	口径20.8cm	14—1
C—7		高台付坏	Ⅳ	4T		Ⅰ層	ロクロ調整		口径（17.2cm）、器高5.1cm、高台径6.4cm	14—2
D—2	土師質土器	Ⅲ	Ⅱ	3T		Ⅰ層	ロクロ、回転糸切底	ロクロ		14—12
D—3		Ⅲ	Ⅱ	5T		Ⅰ層	ロクロ、回転糸切底	ロクロ		—
D—18		Ⅲ	Ⅳ	1T		Ⅳ層上	ロクロ、回転糸切底	ロクロ後ヘラケズリ		—
D—5		Ⅲ	Ⅱ	5T		Ⅰ層	ロクロ、回転糸切底	ロクロ後ヘラケズリ		14—6
D—13		Ⅲ	Ⅱ	3T		Ⅰ層	ロクロ、回転糸切底	ロクロ		14—9
D—7		Ⅲ	Ⅱ	5T		Ⅰ層	ロクロ、ヘラケズリ、回転糸切底			14—4
D—14		Ⅲ	Ⅱ	5T	土壙	積み土下部	ロクロ、回転糸切底	ロクロ		—
D—15		Ⅲ	Ⅱ	5T	土壙	積み土	ロクロ、回転糸切底	ロクロ後ヘラケズリ		14—3
D—10		Ⅲ	Ⅱ			表採	ロクロ、回転糸切底	ロクロ		14—8
D—6		Ⅲ	Ⅱ	5T		Ⅰ層	ロクロ後ヘラケズリ			14—5
D—17		Ⅲ	Ⅳ	2T	P78		ロクロ、回転糸切底	ロクロ		14—7
E—3	須恵器	坏	Ⅲ	3T	SR—01	底面	ロクロ、ヨコナデ、回転糸切底			14—17
C—11	土師器	坏	Ⅳ	4T		Ⅰ層	回転糸切底			14—10
D—4	土師質土器	Ⅲ	Ⅱ	3T		Ⅰ層	ロクロ、ヨコナデか	ロクロ		14—14
D—9		坏	Ⅱ	5T		Ⅰ層	ロクロ、ヘラケズリ、回転糸切底		碗形を呈す	14—15
C—4	土師器	坏	Ⅱ	1T		Ⅰ層	ロクロ調整	黒色処理		14—18
C—3		壺	Ⅱ	1T		Ⅰ層	ロクロナデ後ヘラケズリ	ヨコナデ、黒色処理		14—19
F—1	瓦質土器		Ⅱ	1T		表採	剥離著しく不明	ヨコナデ		14—21
E—1	須恵器	甕	Ⅱ	1T		Ⅲ層上	ロクロ調整、自然釉			14—22
M—3	金属製品	鉄砲玉	Ⅲ	4T		Ⅰ層			歪みあり	14—20
H—1	土製品	土玉	Ⅱ			表採	面取り整形			14—23
G—2	瓦	平瓦	Ⅳ	1T		Ⅰ層			桟瓦か	14—13
L—3	石製品	砥石	Ⅲ	2T		Ⅰ層				14—25
L—1			Ⅱ	3T		Ⅰ層				14—26
J—1	磁器	染付碗	Ⅱ	5・6T		表採	牡丹文	見込に寿字	口径12.6cm、器高7.2cm、高台径4.4cm、平清水焼	14—24
D—12	土師質土器	Ⅲ	Ⅱ	5T		表採	ロクロ、回転糸切底	ロクロ		14—11
C—10	土師器	坏	Ⅳ	3T		Ⅱ層	ヨコナデ	ヨコナデ		14—16

第30図

登録番号	種別	器種	出土地区・遺構・層位				法量				備考	図版番号
			区	トレンチ	遺構	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）		
K－4	石器	剥片	Ⅱ	7T		Ⅰ層	46	41	14	24.2	珪質頁岩	15—1
K－2		二次加工のある剥片	Ⅱ	5T		Ⅱ層	34	16	8	5.3	流紋岩、石鏃未製品？	15—3
K－9		剥片	Ⅳ	1T		Ⅱ層	17	26	4	3.2	珪質頁岩、ガジリあり	15—4
K－3		二次加工のある剥片	Ⅱ	5T			22	22	5	2.0	玉髄	15—5
K－5		二次加工のある剥片	Ⅱ	1T		Ⅱ層	16	14	4	1.7	チャート	15—6
N－5	古銭	寛永通宝	Ⅲ			表土	直径22、孔径6		1			15—7
N－3			Ⅱ	1T		表採	直径22、孔径8		1			15—8
N－1			Ⅱ	1T		Ⅰ層	直径24、孔径6		1			15—9
N—2		洞一銭銅貨	Ⅱ	1T		Ⅰ層	22		1		大正12年（1923）	15—10
M—2	金属製品	クサビ？	Ⅱ	6T		Ⅰ層	68	12	8	27.5		15—11
M－1		笄	Ⅱ	6T	土壙	積み土	210	1.2～0.4	0.3～0.1	29.5		15—12
K—1	石器	剥片	Ⅱ	1T		Ⅰ層	22	26	7	5.1		15—2

Ⅲ　自然科学分析

仙台市笹森城跡出土炭化材の樹種同定

株式会社　古環境研究所

1．試料

試料は、笹森城跡より出土した炭化材15点である。表1に一覧する。

表1　笹森城跡出土炭化材一覧

番　号	遺　構		細　部	
No.1	SB－01	掘立柱建物跡	S1・E2	柱痕跡
No.2	SB－01		S1・E3	
No.3	SB－01		S3・E2	
No.4	SB－01		S3・E3	
No.5	SK－01	土杭		
No.6	SA－08	柱列	S1	柱痕跡
No.7	SK－11	土杭		
No.8	SK－09	土杭		
No.9	2号焼土遺構			
No.10	1号焼土遺構			
No.11	SK－03	土杭		
No.12	SA－08	柱列	S1	柱痕跡
No.13	SB－02		S2・E2	
No.14	SB－02		S2・E3	
No.15	SB－02		S1・E3	

2．方法

炭化材を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3．結果

15点の炭化材から以下に挙げた4の樹種が同定された。なお、試料No.7についてはいずれの断面の観察においても木本の形質は認められなかった。

さて、炭化材においては、炭化の際に収縮膨張していたり、黒色の炭化物となることから表面構造の一部しか観察ができない。さらに横断、接線、放射の各面についての良好な破断面の作成が非常にむずかしい。したがって、同定の精度は生材に比べ遥かに劣ることは否めないため、このことに留意する必要がある。

結果を表2に示し、巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠を記す。

表２　笹森城跡出土炭化材樹種同定結果

試料	樹種	（和名／学名）
No. 1	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No. 2	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No. 3	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No. 4	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No. 5	ハシバミ属	*Corylus*
No. 6	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No. 7	不明	unknown
No. 8	フジ	*Wisteria floribunda* DC.
No. 9	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.10	クリ？	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.?
No.11	クリ？	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.?
No.12	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.13	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
No.14	サクラ属	*Prunus*
No.15	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

a．ハシバミ属　***Corylus***　カバノキ科　　図版１

横断面：小型で丸い道管が単独あるいは２～３個複合して、放射方向につらなる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は６～10本である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の形質によりハシバミ属に同定される。ハシバミ属にはハシバミ、ツノハシバミなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の低木である。なおハシバミは、高さ５ｍ、径10㎝ぐらいで、器具などに用いられる。

b．クリ　***Castanea crenata*** Sieb.et Zucc.　ブナ科　　図版２・３・４

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質によりクリに同定される。なおNo.10とNo.11は、クリの特徴を示すものの試料が小片であるため、広範囲な観察ができなかったので、クリ？とした。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40㎝ぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２ｍに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で建築など広く用いられる。

c．サクラ属　***Prunus***　バラ科　　図版５

横断図：小型で丸い道管が、単独あるいは数個複合して均等に分布する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は同性に近い異性放射組織型で、１～３細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属にはシウリザクラ、ウワミズザクラ、ヤマザクラ、モモ、ウメなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木である。

ｄ．フジ　***Wisteria floribunda*** DC.　マメ科　　図版６

横断面：年輪のはじめに大型で丸い道管が、１～２列配列する環孔材である。晩材部では中型の道管のほかにごく小型の道管が多数集合して木部柔組織とともに接線方向の帯状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は同性に近い異性放射組織で、１～８細胞幅である。

以上の形質よりフジに同定される。フジは本州、四国、九州に分布する。つる性の落葉木本である。

ｅ．不明　Unknown

横断面、放射断面、接線断面共に木本の形質をもたない。

４．所見

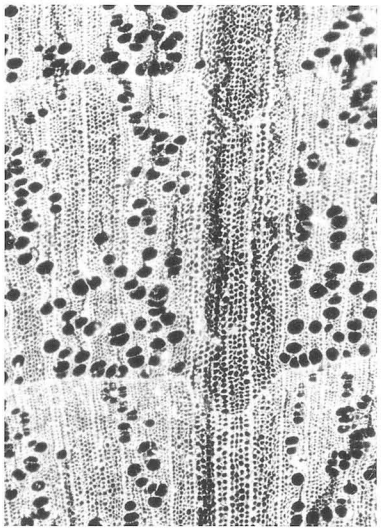
15試料中９点がクリであり、クリ？とした２点を含めると11点にもなり、クリが大部分を占める。他はハシバミ属、サクラ属、フジが各１点である。クリは特に保存性がよく建築材として用いられていた可能性があろう。炭化材にクリが多いのは周囲で比較的容易に入手できたためと考えられ、当時周辺にクリが分布していた可能性が推定される。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩（1985）針葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、P.20-48.

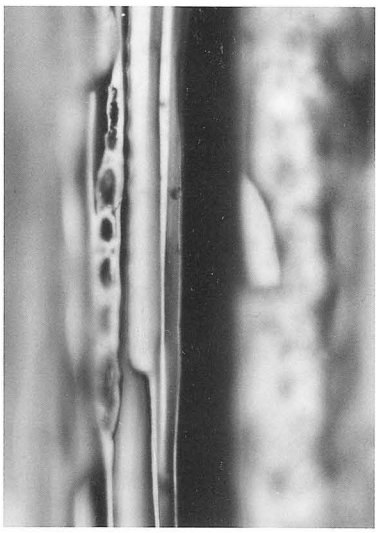
佐伯　浩・原田　浩（1985）広葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、P.49-100.

笹森城跡出土炭化材の顕微鏡写真Ⅰ



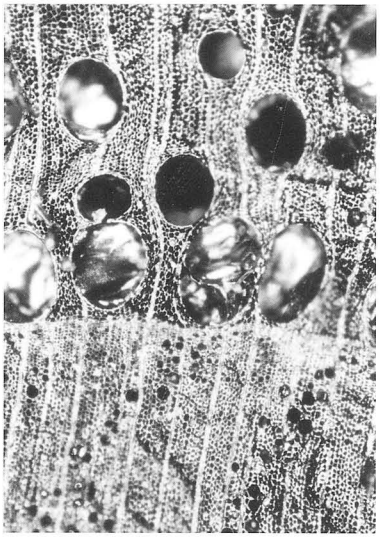
横断面 ——— :0.4mm

放射断面 ——— :0.1mm

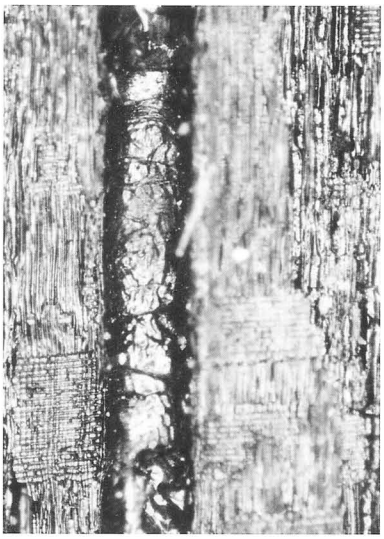


接線断面 ——— :0.04mm

1． No.5　ハシバミ属



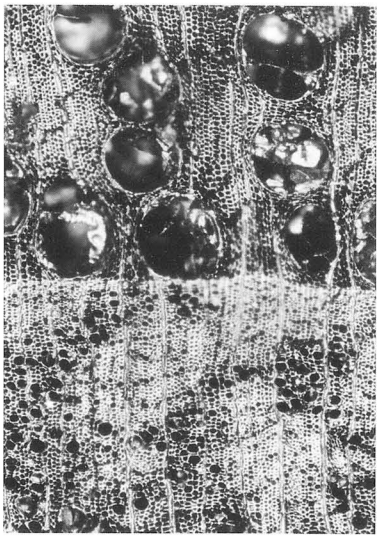
横断面 ——— :0.4mm



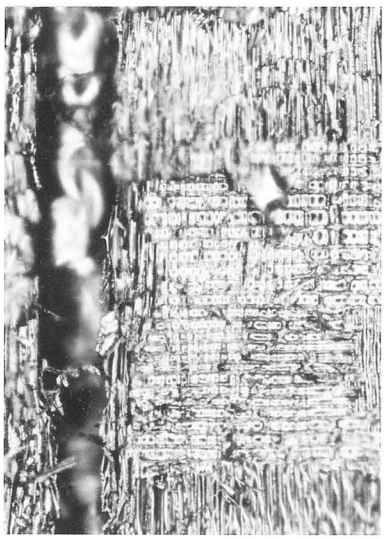
放射断面 ——— :0.4mm

接線断面 ——— :0.2mm

2． No.1　クリ



横断面 ——— :0.4mm

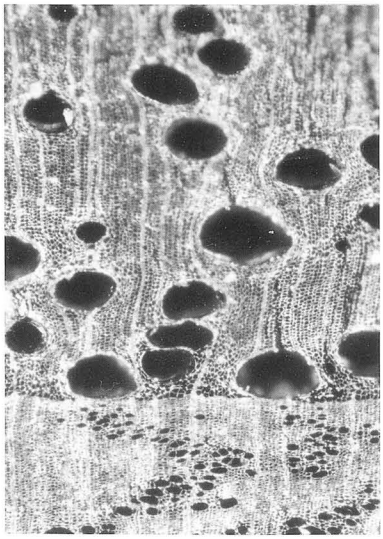


放射断面 ——— :0.2mm

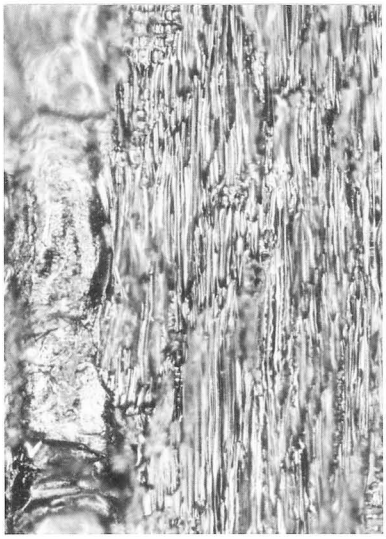
接線断面 ——— :0.2mm

3． No.2　クリ

笹森城跡出土炭化材の顕微鏡写真Ⅱ



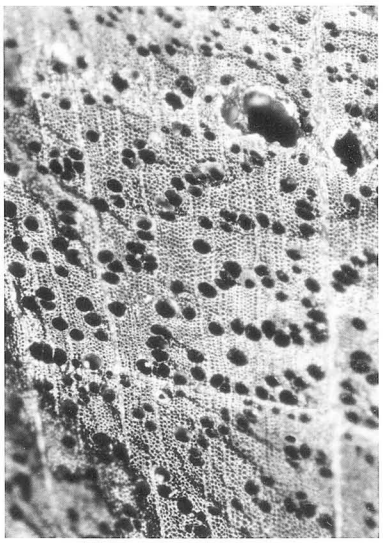
横断面 ——— :0.4mm



放射断面 ——— :0.2mm

接線断面 ——— :0.2mm

4．　No.13　クリ

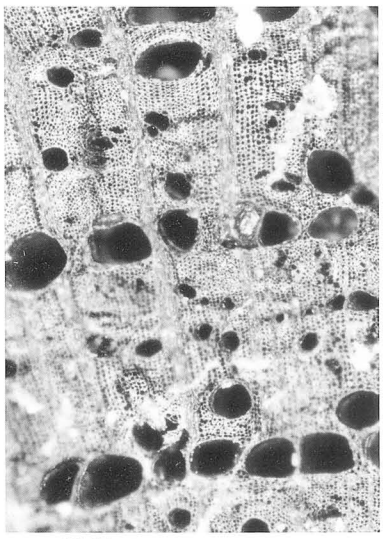


横断面 ——— :0.4mm

放射断面 ——— :0.1mm

接線断面 ——— :0.2mm

5．　No.14　サクラ属



横断面 ——— :0.4mm

放射断面 ——— :0.2mm

接線断面 ——— :0.2mm

6．　No.8　フジ

Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査では、笹森城の主体部を形成する遺構群を確認することはできなかった。

調査区南側、Ⅱ区とした尾根上で発見した軽易な掘立柱建物跡や柱穴列、土塁などは中世、戦国期の城館を構成する遺構群となる可能性があり、調査区周辺では地表観察ではあるが、城館特有の遺構とみられる地形を確認している。

調査区内の土塁は北側からの攻撃に対する防御施設とみられ、東西方向の柱穴列も防御もしくは尾根上の平坦面を区画する施設となる可能性がある。尾根南側の平場遺構は、狭い平坦面を拡幅し、防護施設などを設けていたものとみられる。

調査で出土した笄や鉄砲玉は、城館に伴うこれらの遺構群が機能していた時期に属する可能性がある。

また、古代の竪穴住居跡や、縄文時代の土坑や早期末から晩期にかけての遺物、弥生時代後期の土器を出土しており、丘陵上には各時代の遺跡が展開していた可能性が高いが、不明である。

参考文献

坂田　啓編『私本　仙台藩士事典（増補版）』創学出版　1995

紫桃正隆『史料　仙台領内古城・館　第四巻』宝文堂　1974

『みやぎの戦国時代·合戦と群雄』宝文堂　1993

仙台の歴史編集委員会編『仙台の歴史』宝文堂　1989

仙台市「宮城町誌」改訂編纂委員会『宮城町誌　史料編（改訂版）』　1989

仙台市史編さん委員会編『仙台市史　特別編２　考古資料』　1995

所　荘吉『火縄銃』雄山閣出版　1964

藤沼邦彦ほか『日本城郭大系　第3巻　山形·宮城·福島』新人物王来社　1981

平凡社『日本歴史地名大系　第四巻　宮城県の地名』　1987

宮城縣史編纂委員会『宮城縣史１（古代·中世史）』　1957

『宮城縣史32（資料篇９）』　1970

宮城県姓氏家系大辞典　編集委員会編『角川日本姓氏歴史人物大辞典４　宮城県姓氏家系大辞典』　1994

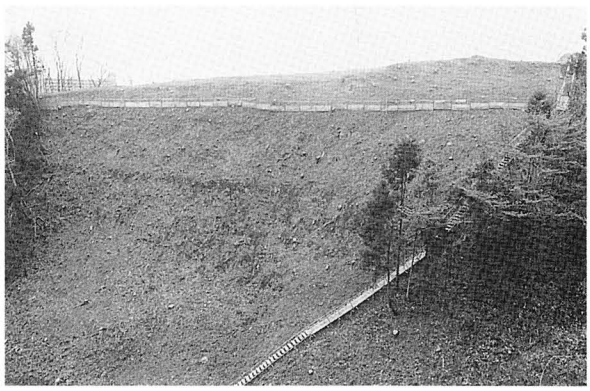
写　真　図　版

写真１　笹森城跡周辺航空写真（1947年10月撮影）

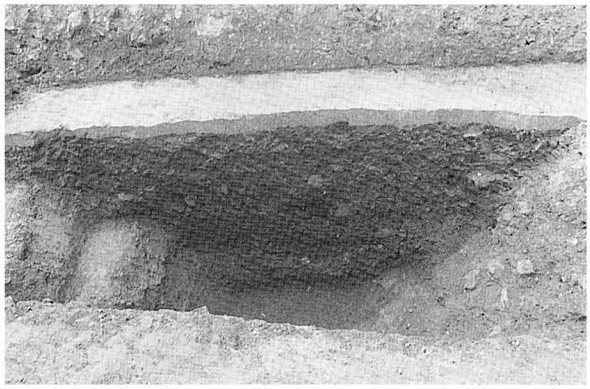
2．Ⅰ区全景（北から）

3．Ⅱ区斜面裾部（調査前・西から）

4．Ⅱ区南斜面（調査前・西から）



5．Ⅱ区北斜面（調査前・北から）

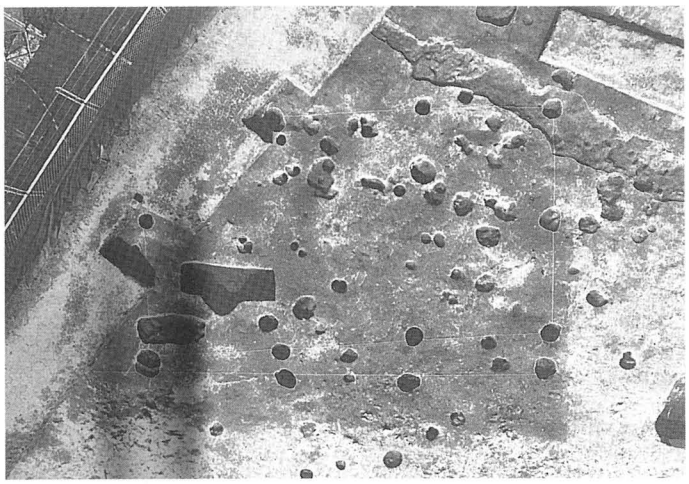


7．Ⅰ区２Ｔ（東から）

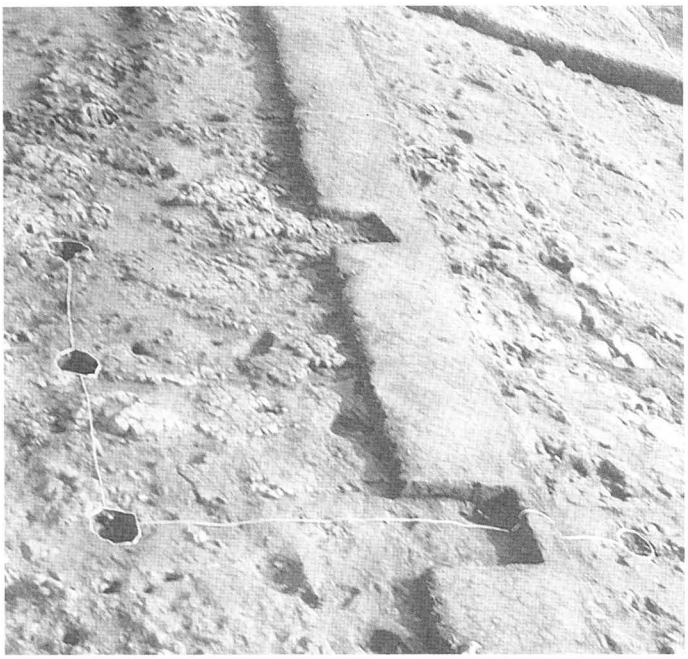
6．Ⅰ区１Ｔ全景（北から）

8．Ⅰ区３Ｔ全景（東から）

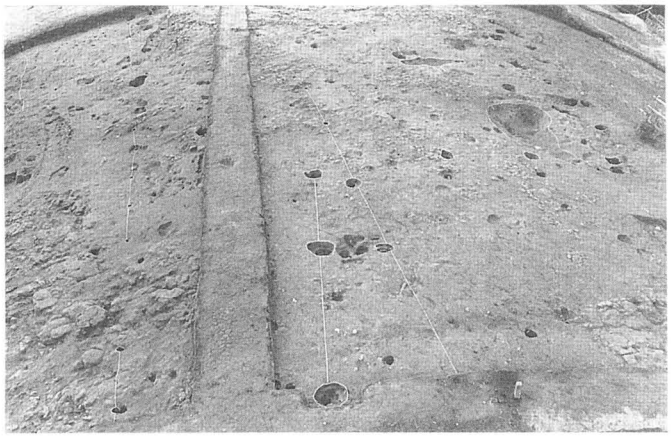
写真２　Ⅰ・Ⅱ区全景



9．ＳＢ-01・ＳＡ-01全景

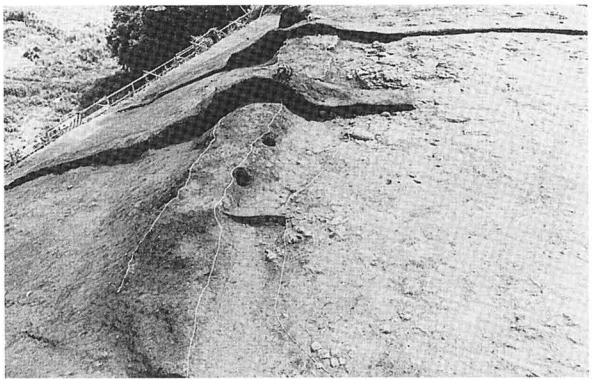


10．ＳＢ-02・ＳＡ-08全景



11．ＳＡ-02～ＳＡ-07全景

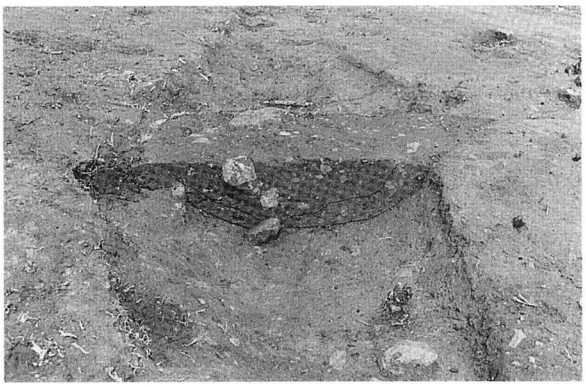
写真３　Ⅱ区掘立柱建物跡・柱列



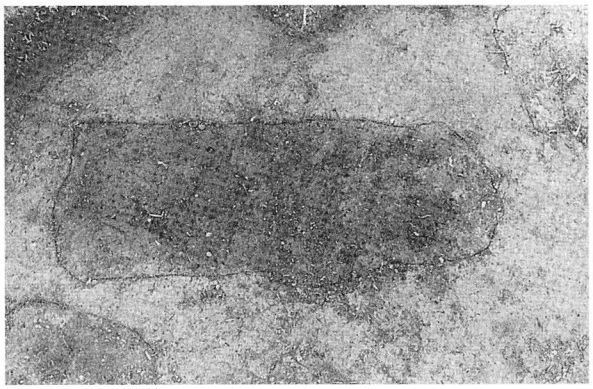
12．Ⅱ区土塁・ＳＤ－02検出（西から）

13．Ⅱ区土塁№.２断面（東から）

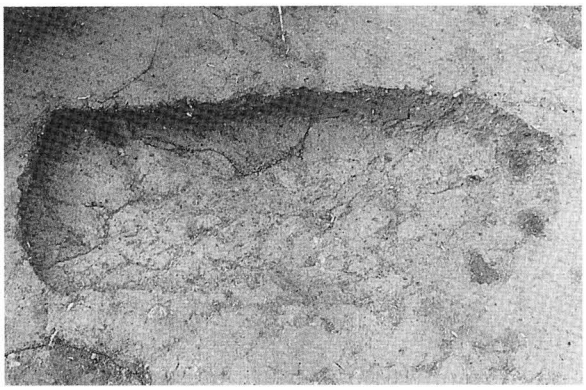
14．Ⅱ区土塁№.３断面（南から）



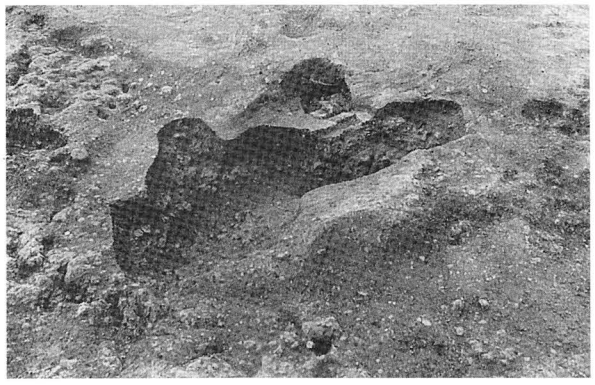
15．Ⅱ区ＳＫ－02断面（南から）



16．Ⅱ区ＳＫ－01検出（南から）



17．Ⅱ区ＳＫ－01全景（南から）

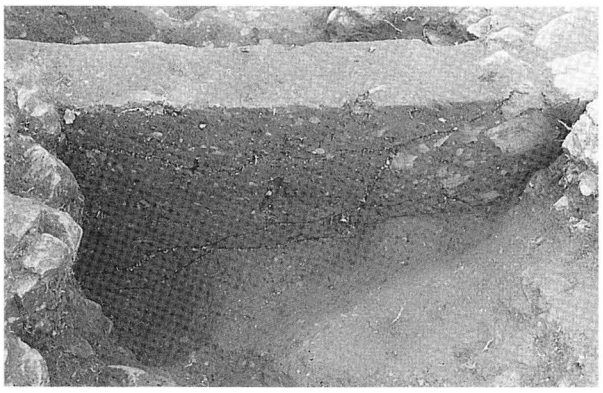


18．Ⅱ区ＳＫ－03全景（東から）

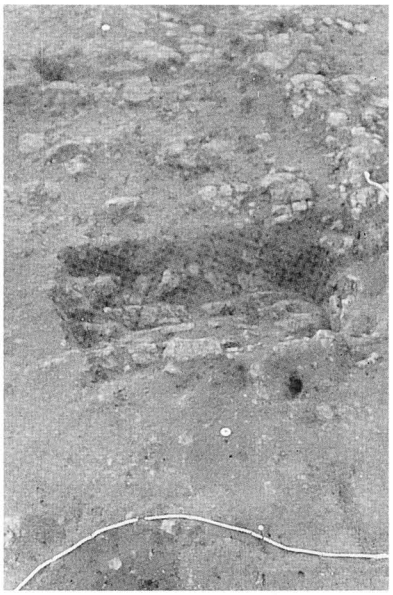
19．Ⅱ区ＳＫ－04・ＳＫ－05全景（南から）

写真４　Ⅱ区土塁・土坑

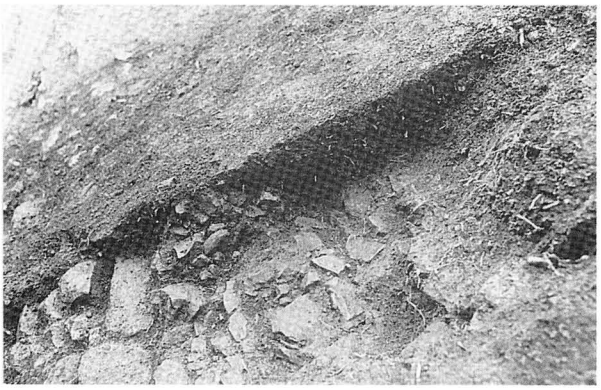
20．Ⅱ区ＳＫ－06全景（東から）



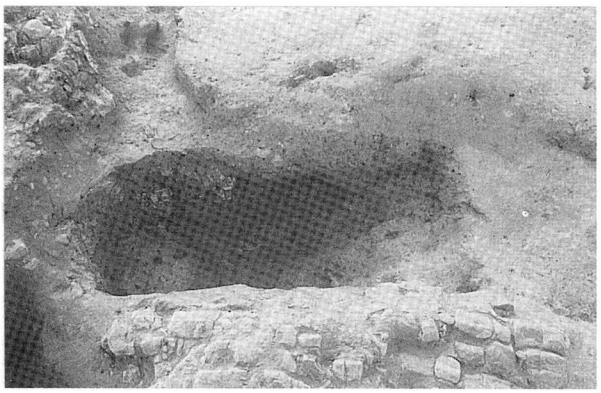
21．Ⅱ区ＳＫ－07断面（東から）



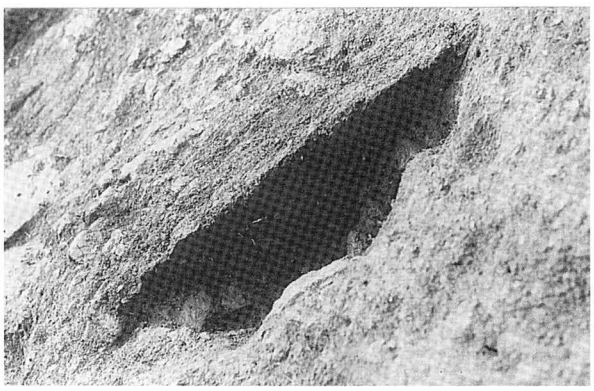
22．Ⅱ区ＳＫ－08全景（東から）



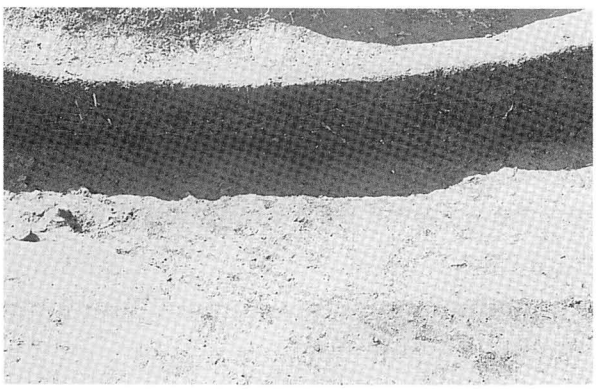
23．Ⅱ区ＳＫ－09断面（東から）



24．Ⅱ区ＳＫ－10全景（東から）



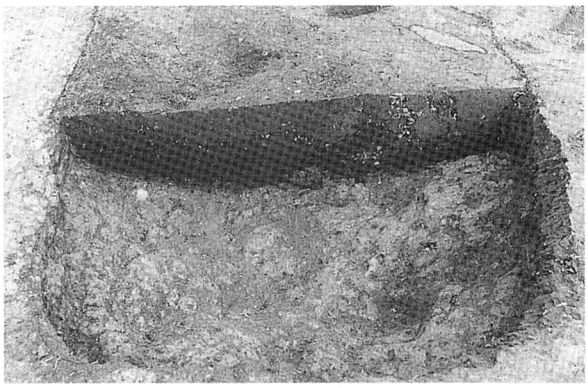
25．Ⅱ区ＳＫ－11断面（東から）



26．Ⅱ区ＳＫ－101断面（東から）

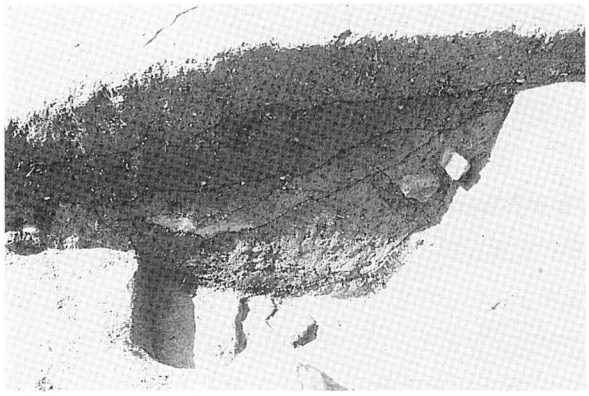
写真５　Ⅱ区土坑

27．Ⅱ区
1号焼土遺構全景
（東から）

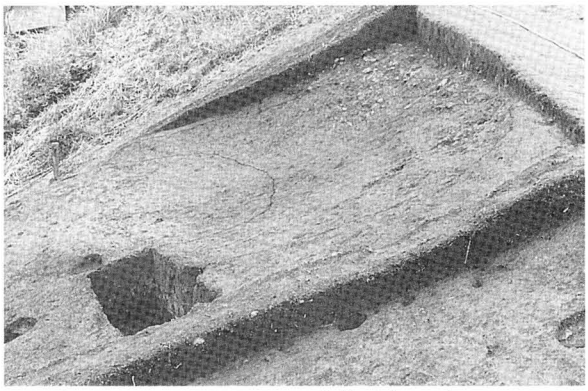


28．Ⅱ区1号焼土遺構断面（南から）

29．Ⅱ区
2号焼土遺構全景
（西から）



30．Ⅱ区2号焼土遺構断面（東から）



31．Ⅱ区ＳＸ-01全景（東から）

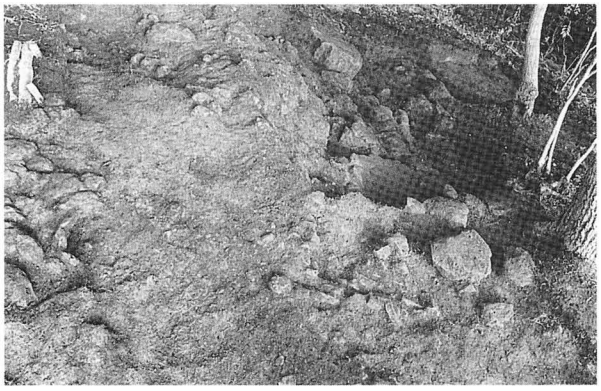
32．Ⅱ区ＳＸ-02全景（西から）

33．Ⅱ区ＳＸ-03断面（東から）

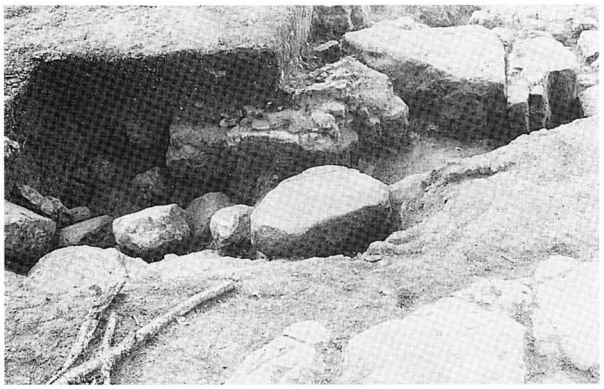
34．Ⅱ区ＳＸ-03全景（東から）

写真6　Ⅱ区焼土遺構・性格不明遺構

35．Ⅱ区３号平場遺構東端（西から）



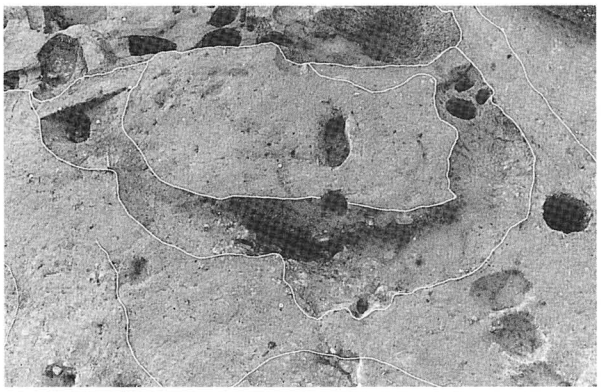
36．Ⅱ区ＳＸ－05検出（西から）



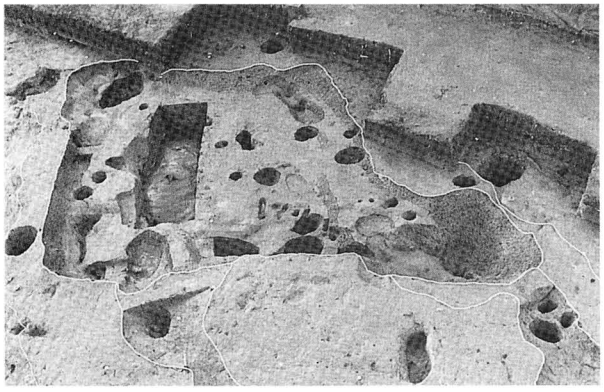
37．Ⅱ区ＳＸ－05全景（北から）

38．Ⅱ区ＳＸ－06（全景）（南から）

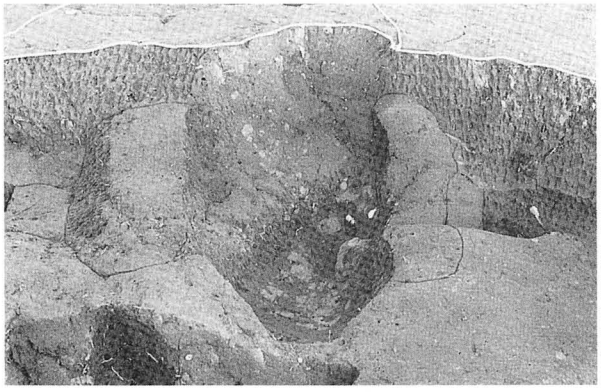
39．Ⅱ区ＳＸ－07検出（東から）



40．Ⅱ区ＳＸ－07全景（東から）

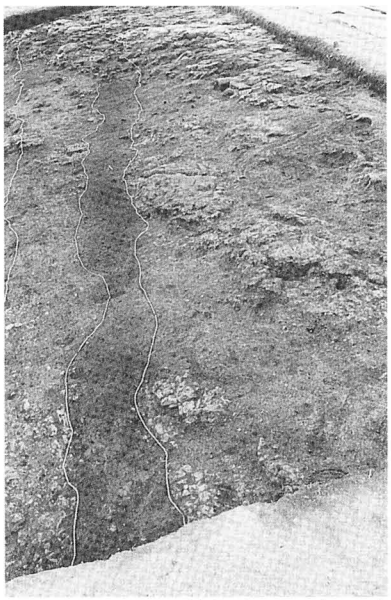


41．Ⅱ区ＳＩ－01全景（東から）

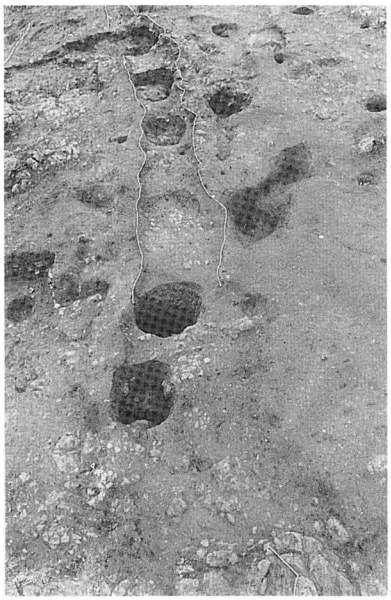


42．Ⅱ区ＳＩ－01カマド（西から）

写真７　Ⅱ区３号平場遺構・性格不明遺構・竪穴住居跡

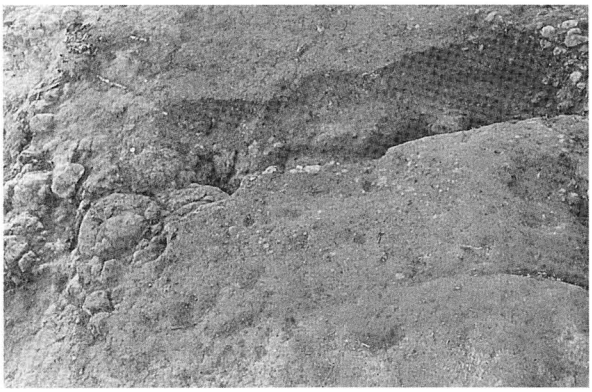


43．Ⅱ区ＳＤ－03検出（３Ｔ・東から）

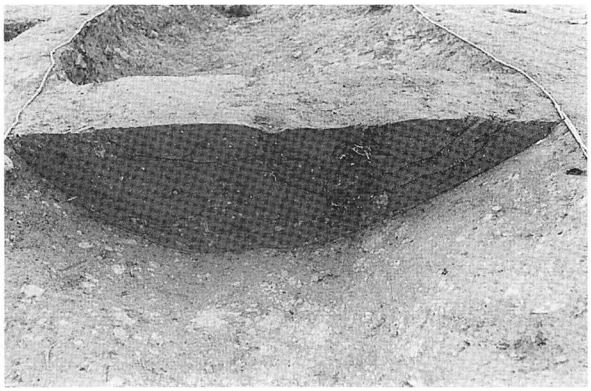


44．Ⅱ区ＳＤ－03底面ピット
（２Ｔ・東から）

45．Ⅱ区ＳＤ－03底面ピット断面（東から）



46．Ⅱ区ＳＤ－04全景（東から）



47．Ⅱ区ＳＤ－06断面（東から）

48．Ⅱ区ＳＤ－06全景（西から）

写真８　Ⅱ区溝跡

49. Ⅱ区１号・２号平場遺構
（２Ｔ・東から）

50. Ⅱ区２号平場遺構
（１Ｔ・東から）

51. Ⅱ区１号・３号平場遺構（４Ｔ・東から）

52. Ⅱ区３号平場遺構
（３Ｔ・東から）

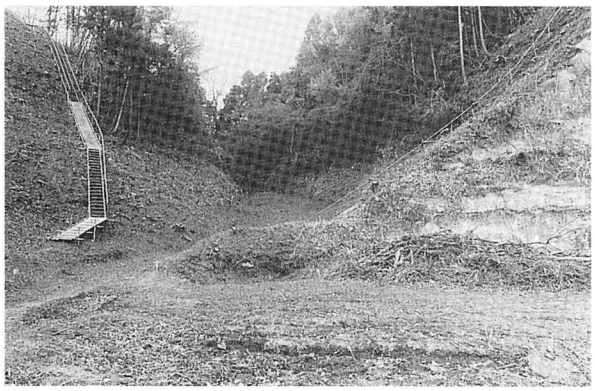
53. Ⅱ区３号平場遺構分岐点（西から）

54. Ⅵ区４号・５号平場遺構（西から）

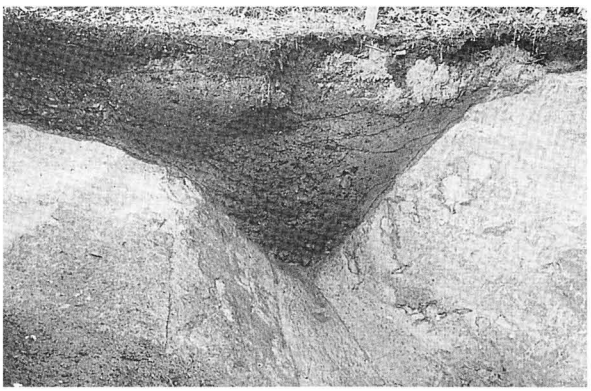
写真９　Ⅱ・Ⅵ区平場遺構

55．Ⅵ区段状平場遺構（東から）

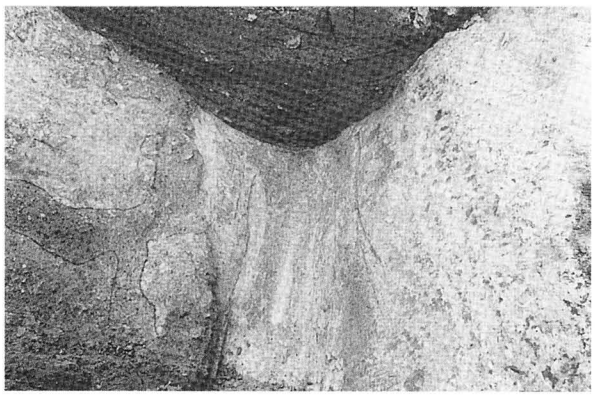
56．Ⅵ区東端の平場遺構・南肩部（西から）



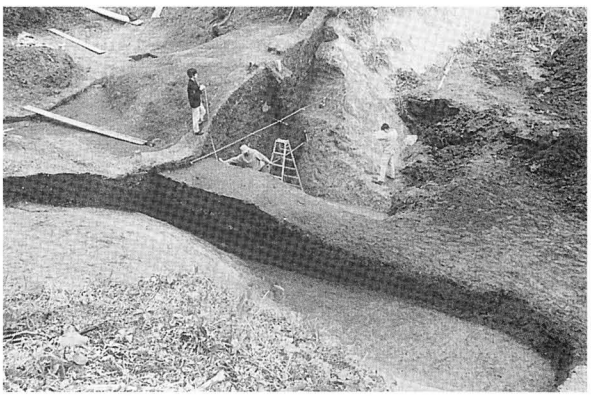
57．Ⅲ区全景（東から）



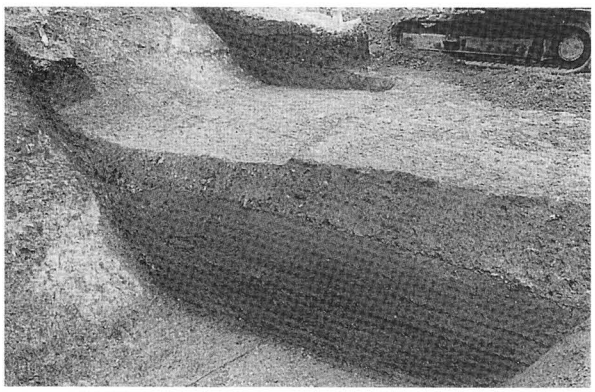
58．Ⅲ区SR-01（3T・東から）



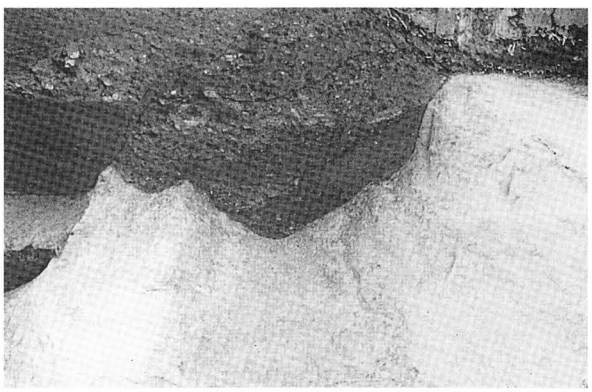
59．Ⅲ区SR-01（4T・東から）



60．Ⅲ区SR-01（4T・南から）



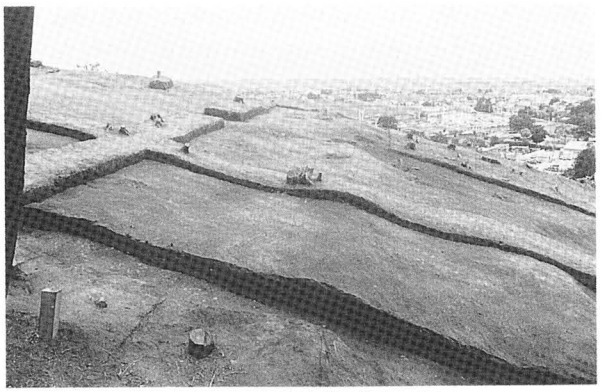
61．Ⅲ区SR-01堆積土上層（5T・東から）



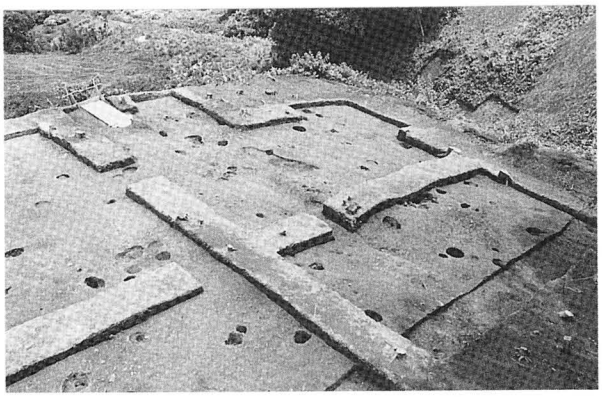
62．Ⅲ区5TSR-02・SR-03全景（東から）

写真10　Ⅵ・Ⅲ区

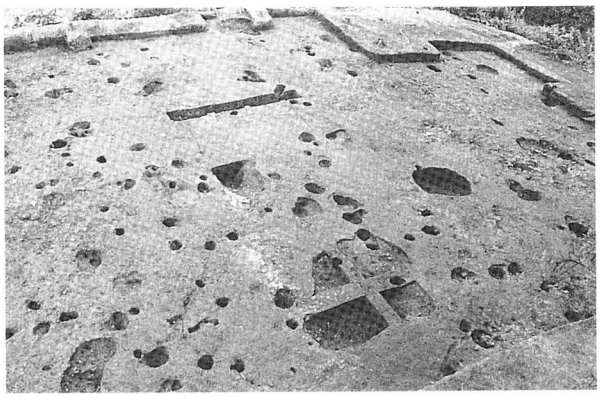
63．Ⅳ区土盛り状遺構（東から）



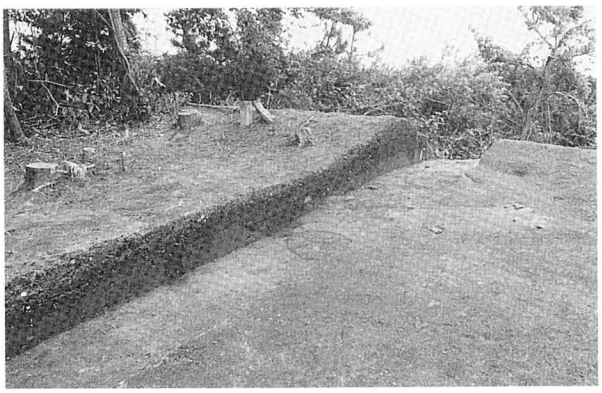
64．Ⅳ区通路状遺構（西から）



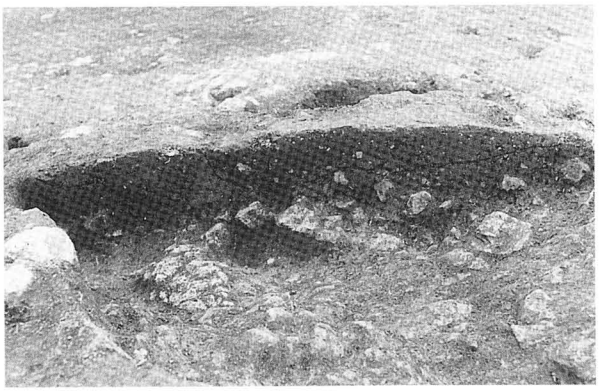
65．Ⅳ区Ⅲ層上面全景（西から）



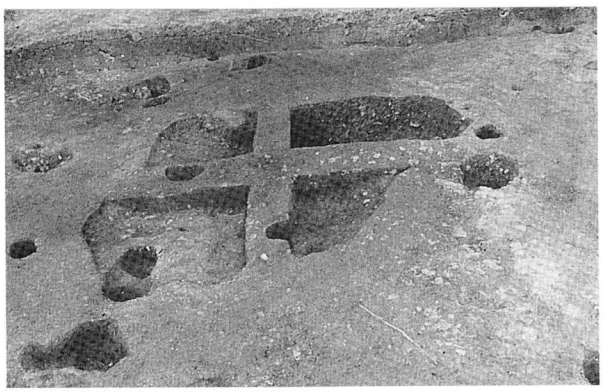
66．Ⅳ区Ⅳ層上面全景（西から）



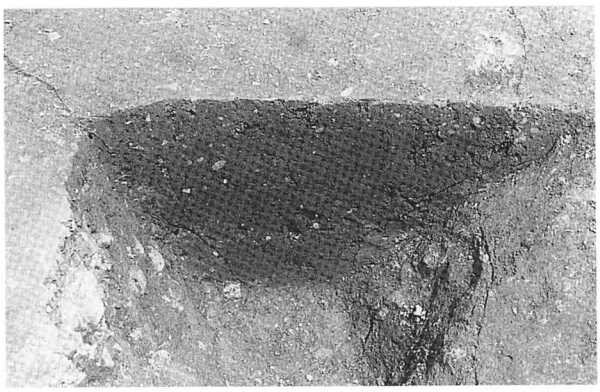
67．Ⅳ区西壁断面（南から）



68．Ⅳ区ＳＫ－01断面（東から）

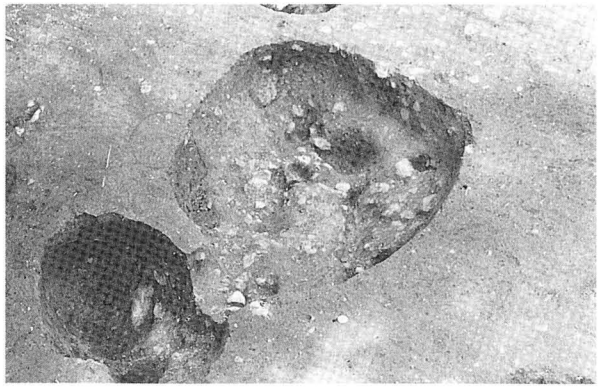


69．Ⅳ区ＳＸ－02全景（東から）

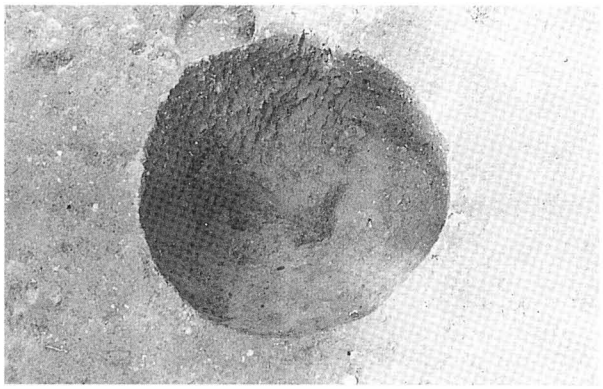


70．Ⅳ区ＳＸ－03断面（西から）

写真11　Ⅳ区

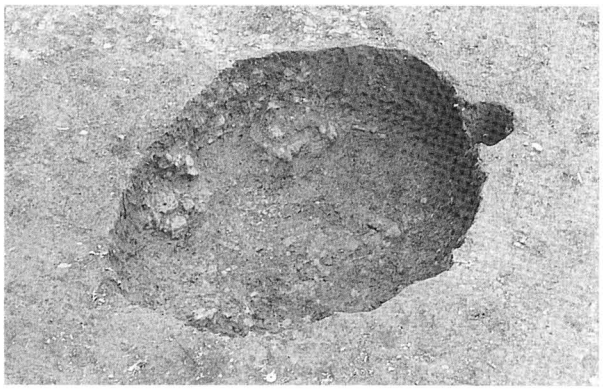


71．Ⅳ区ＳＫ－101全景（南から）

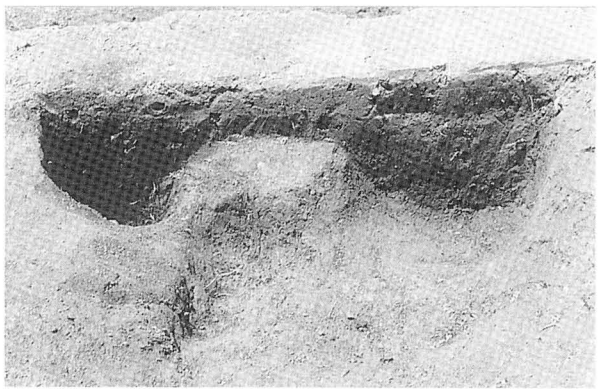


72．Ⅳ区ＳＫ－103全景（南から）

73．Ⅳ区ＳＫ－104全景（東から）



74．Ⅳ区ＳＫ－105全景（南から）



75．Ⅳ区ＳＫ－106断面（東から）

76．Ⅴ区切通状遺構（南から）

77．Ⅴ区南西平場遺構（南から）

78．Ⅴ区土盛り状遺構（南から）

写真12　Ⅳ・Ⅴ区

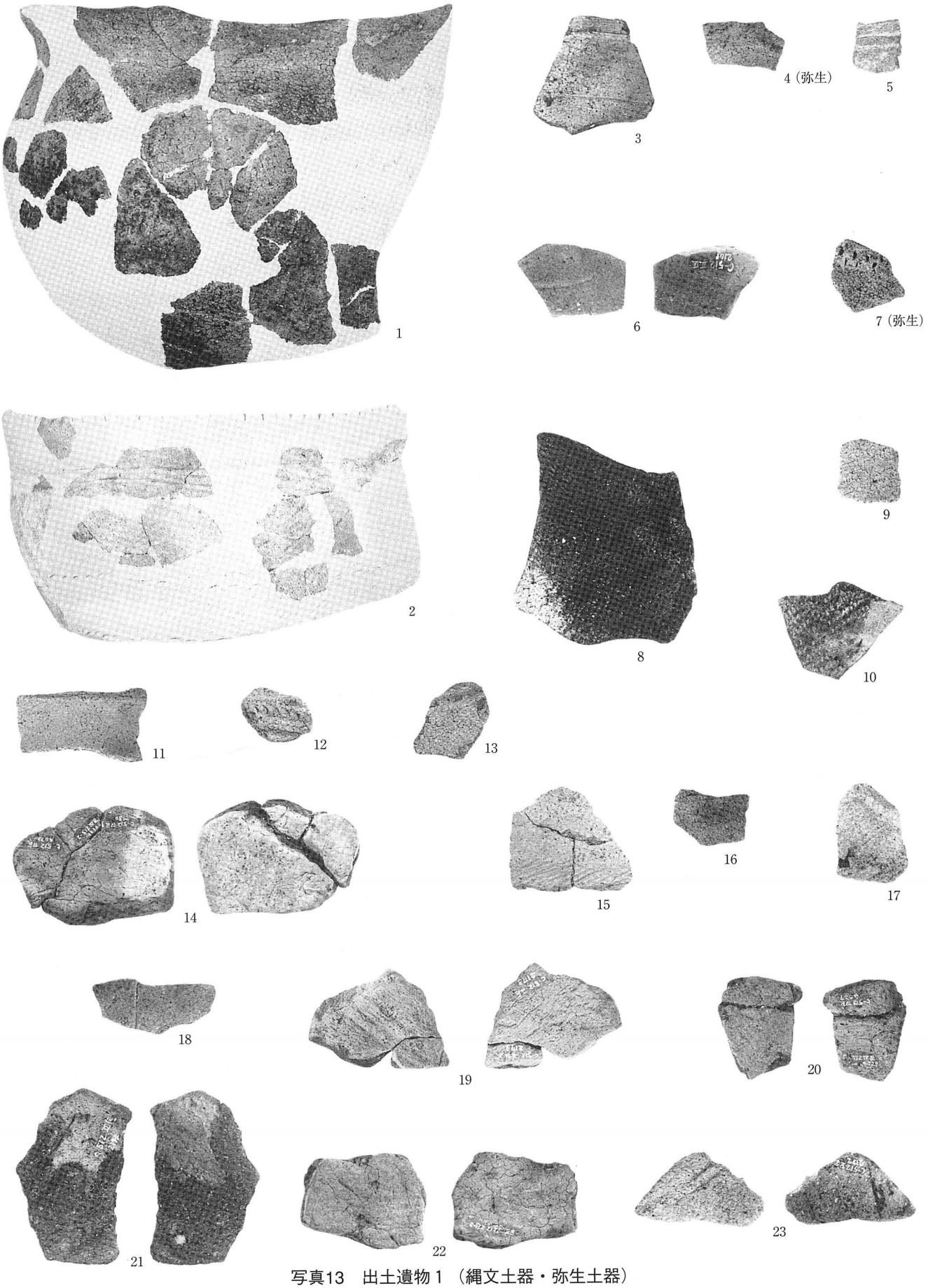
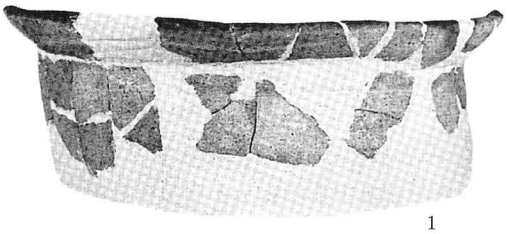
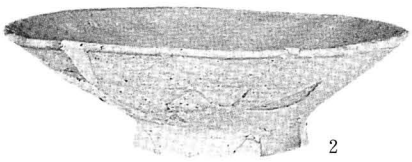
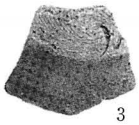
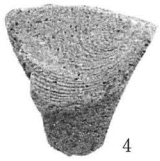


写真13　出土遺物１（縄文土器・弥生土器）

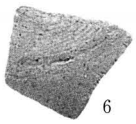

1


2


3


4

5

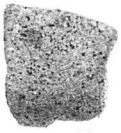

6

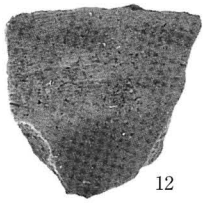
7

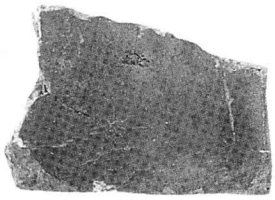
8

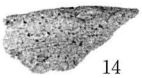
9

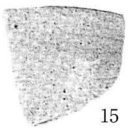
10


11


12

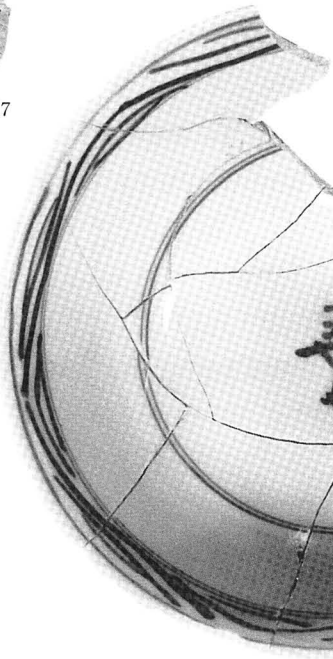

13


14


15

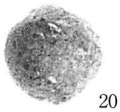
16

17

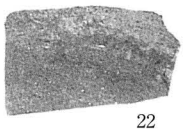

24

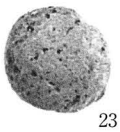
18

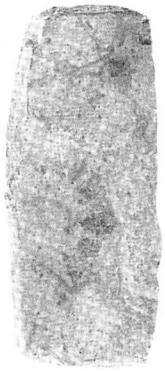
19


20

21


22


23


25

26

写真14　出土遺物２（土師器・磁器・金属製品・土製品・砥石）

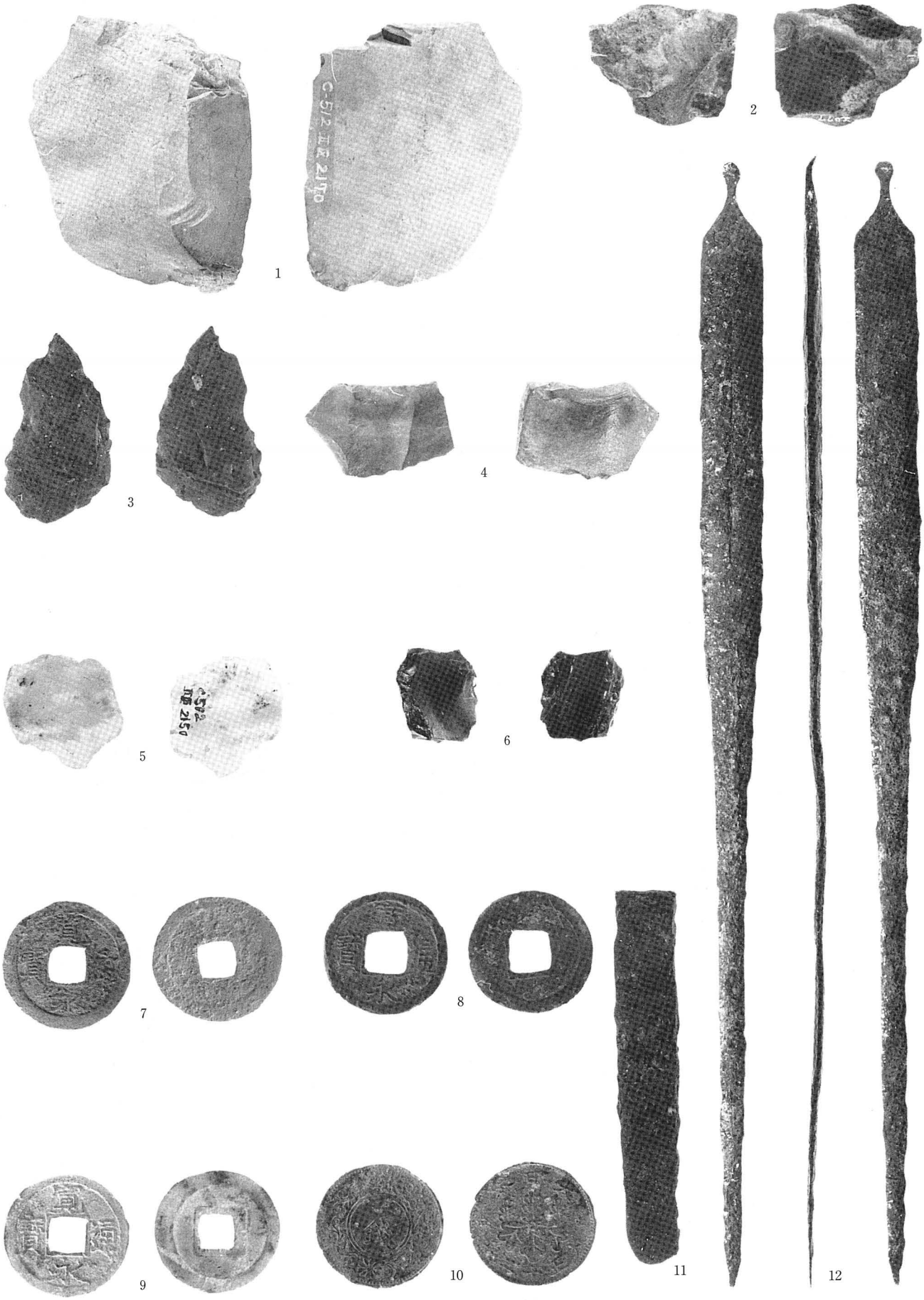


写真15　出土遺物３（石器・金属製品）

報告書抄録

ふりがな	ささもりじょうあと
書名	笹森城跡
副書名	発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第209集
編著者名	金森安孝
編集機関	仙台市教育委員会文化財課
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号　TEL 022-214-8893
発行年月日	平成8年3月31日（1996年）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ささもりじょうあと 笹森城跡	みやぎけん 宮城県 せんだいし 仙台市 みやぎのく 宮城野区 つるや 鶴ヶ谷 あざもとやまたてした 字本山・館下	4100	1120	38° 17′ 40″	140° 55′ 20″	1995年4月18日 ～ 12月1日	約4,000㎡	仙台市都市計画道路・東仙台泉線道路改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
笹森城跡	包含地	戦国時代 ～ 近世	土塁、掘立柱建物跡、柱列、溝跡、土坑、平場遺構、通路状遺構	磁器、金属製品、石製品、古銭	城館跡 笹森城に関する能性のある遺構・遺物を発見した。
		古代 ～ 縄文時代	竪穴住居跡、土坑、焼土遺構	土師器、土師質土器、須恵器、瓦質土器、瓦、土製品、弥生土器、縄文土器、剥片石器	

仙台市文化財調査報告書第209集

笹森城跡

発掘調査報告書

1996年３月

発　行　仙台市教育委員会

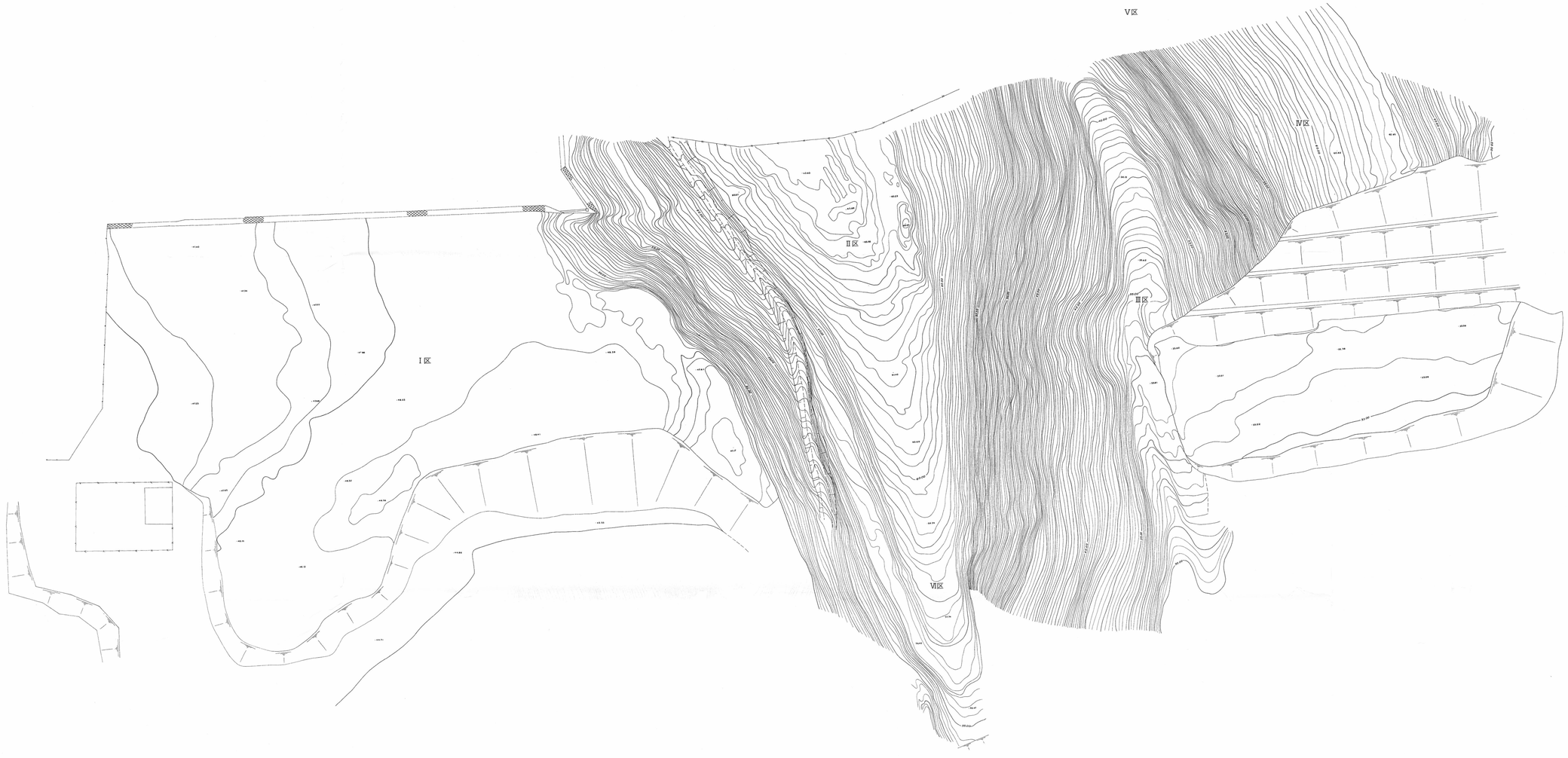
仙台市青葉区国分町三丁目７－１

文化財課　022(214)8894

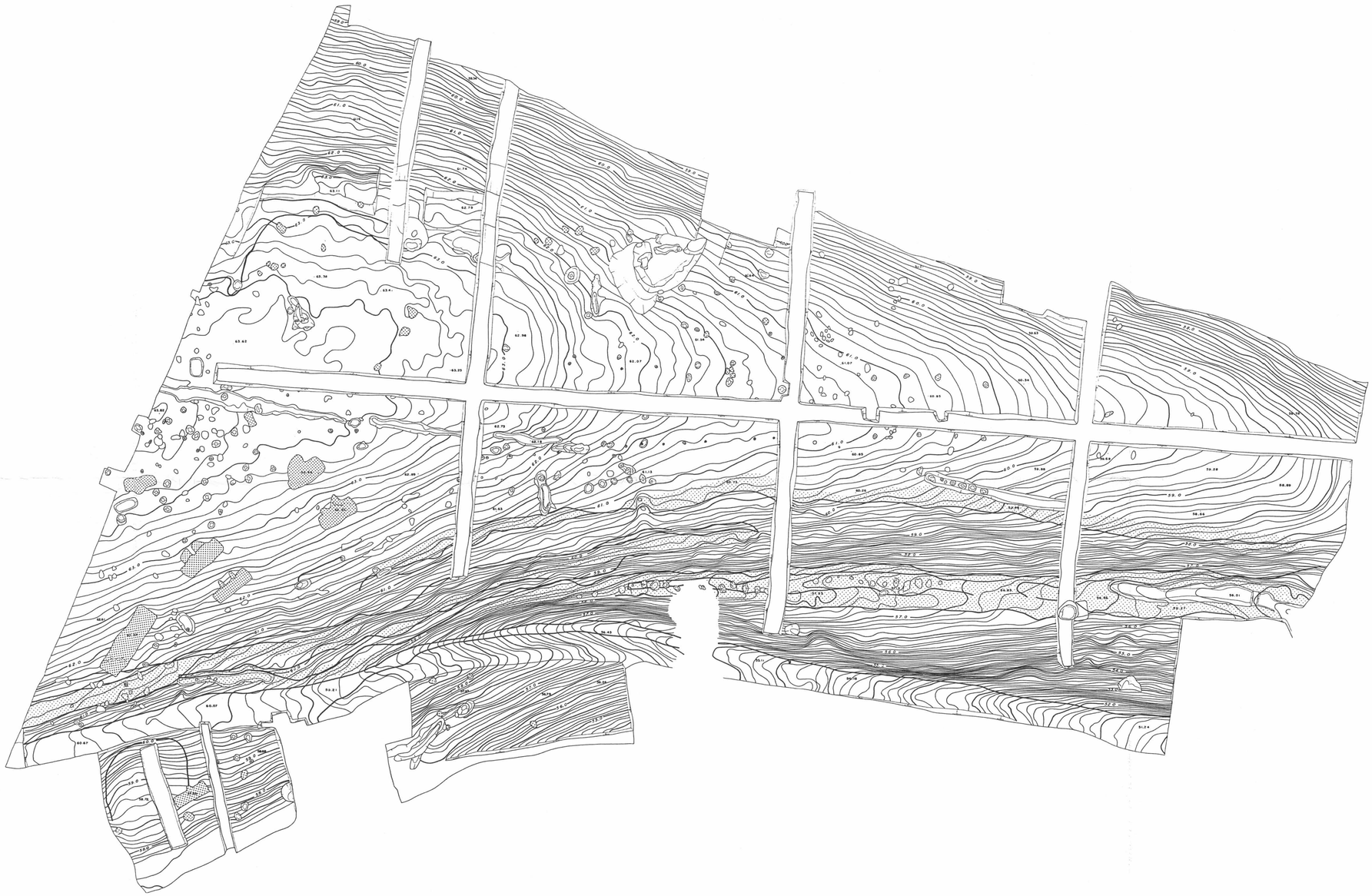
印　刷　株式会社　東北プリント

仙台市青葉区立町24－24

TEL 022(263)1166



付図１　笹森城跡現況測量図（調査前・1995年）　S＝１：200



付図２　笹森城跡Ⅱ区遺構測量図　S = 1 ：100